# 魔道都の修理屋

あなたのモノにはなりません！

MADOTO NO FUURIYA

かいとーこ

illustration ● 鳴海ゆき

一迅社文庫アイリス

# 魔道都の修理屋

あなたのモノにはなりません！

かいとーこ

TŌKO KAI

一迅社文庫アイリス


魔道都の修理屋
あなたのモノにはなりません！

# 魔道都の修理屋

**あなたのモノにはなりません！**

かいとーこ

TŌKO KAI

一迅社文庫アイリス

# CONTENTS


1章　弟子入り　8
2章　花街での副業　44
3章　具神と技士　78
4章　招かれざる客　目で見えぬモノ　103
5章　動けば迷惑　123
6章　少女達の憧憬　157
7章　親切は災い　184
実験と呪いとアーソルド〝様〟　223
あとがき　262


太陽神ラーハ
太陽と生命を司る一級神。
短気で嫉妬深く自己中心的。
短絡的な行動で周囲に
迷惑を撒き散らす。
魔道都の修理屋
MADOUTO NO SYUURIYA
あなたのモノにはなりません！
イゼア＝ウィーゲム
魔動機修理師の弟子。
14歳。太陽神に魔法を
使えない呪いをかけら
れた一族の少女。
そのため、魔力はあるが
魔法を使えない。
登場人物紹介
アーソルド＝ルフィル
名門魔道貴族。15歳。頭脳明晰、運動神経抜群、
魔法の扱いは天才的な美少年。イゼアを
自分の所有物だと思っている。





## ◉具神(ぐしん)ゼイレム

道具を司る二級神。その昔、太陽神の不興を買って心を封じられたとされている。

## ◉マナラ=エルーシア

魔動機修理師。いつも魔動機修理に熱中しすぎて食事・睡眠を忘れてしまう。
周囲に心配されるほど不健康。

**キーオ=セファイン** ◉ 魔道学院エムラドの教師。マナラの幼馴染みでイゼアの学院時代の先生。攻性魔法の使い手。

**アラン=トール** ◉ 死霊をこよなく愛している死霊術師の貴族。

**死神ターラ** ◉ 太陽神に対をなす、死を司る一級神。常識的で仕事熱心なため気苦労が絶えない。

## 用語紹介

◆神　一級神から六級神が存在する。
一級神は六人だが、二級神、三級神と下がるにつれて数は増えていく。

◆魔道学院エムラド　魔道機関「理力の塔」が運営している、魔道士を目指す人間が入る学舎。

◆魔動機　魔力で動く機械の総称。

イラストレーション ◆ 鳴海ゆき

Repair of Anthem I'm not yours!

魔道都の修理屋　あなたのモノにはなりません！

# 1章　弟子入り

イゼアは先ほど兄から届いた手紙の封を開け、不審に思いながら便せんを取り出した。

この全寮制の魔道学院エムラドに入学して以来、兄が手紙を寄越すなど今まで一度もなかった。兄が薄情なのではなく、郵便代がもったいないからだ。ウィーゲム家はどうしようもなく貧乏なのだ。一般家庭に比べれば裕福だが、貴族としては落ちぶれている。

この学院の学費も、イゼアが上位クラスなので免除を受けているからいいが、そうでなければ、学費を出せなかったはずだ。どうせ年に一度は実家に戻っているので、緊急時でもなければ、手紙を出す意味がなかった。

だからきっと何かろくでもない事があったに違いないと覚悟をして折りたたまれた、安物の、飾り気どころか香りすらない便せんを開いた。

簡単な挨拶(あいさつ)を読み飛ばし、その後に書かれている本題を読む。

『イゼア、父と母がとうとう君をルフィル家に売り飛ばしそうだ。君の体質にとても興味を

持っていたから、ついに来たかと思ったよ。
二人は呪い持ちのイゼアは嫁のもらい手もないだろうから、愛人としてでも裕福なルフィル家にもらわれれば、幸せになれるだろうと言っているよ。
僕はお前がルフィル家にいいように使われるのを喜ぶとは思えないから、こうして手紙を書いている。
二人を止められないし、お前を庇ってもやれない不甲斐ない兄を許して欲しい。
だから、もしどうしても嫌だったら、逃げることは止めないよ。イゼアはイゼアの好きなようにしなさい』

目の前が真っ白になり、手が震えた。怒りと恐怖に、震えが止まらなかった。
親に売られた。
兄に愛人と言い切られた。しかも庇ってもくれないと断言しているのだ。
昔からそうだ。思いやっているふりをして、イゼアを生贄として差し出していた。
それでも知らせてくれた事は兄に感謝しなければならない。知らなければ、ある日突然、イゼアは他人の所有物になっているところだった。
「逃げるって、どこに」
呪い持ちのイゼアが普通に暮らすなど、考えてもそんな方法が思いつかない。見れば分かる

人には分かるのだ。呪いは他人に実害はないが、それでも呪いというだけで偏見を持たれる。田舎でひっそり暮らそうと思っても、呪いの事がばれたら追い出されるだろう。

ウィーゲム家の呪いは、ある意味、とても質が悪いから。

「ど、どうしよう」

素直に愛人になるのは問題外。しかしその先が思い浮かばない。

「あああっ」

頭を抱えるが何も思い浮かばなかった。

どうすればいいのか。

どうしたら人並みの生活を送れるのか。

愛人だって、まともな愛人ならいい。名の通り、愛されて、幸せなのならそれでいい。

問題は、相手だ。イゼアは今まで受けた様々な仕打ちを思い出した。数々の横暴な命令は、愛人契約を結ぶ前から既にイゼアを自分の所有物だと思っているかのような、それはひどいものだ。

現実逃避するように、毛布にくるまって転がった。二人部屋だが、呪いを嫌がられるため、一人で使っているので誰にも迷惑はかけない。

いっその事、このままくるまって石になりたい。

そう考えていた時、ドアが乱暴にノックされた。

「おい、イゼア。何をしている、出てこい！」
一番聞きたくなかった声を聞き、イゼアは硬直した。
「お前の兄から手紙が届いたらしいじゃないか。あの金欠男が手紙を寄越すなんて、何が書いてあったんだ」
お前に売られそうだから逃げておけと書いてあったんだと、叫びたかった。
イゼアは手紙を握り締めて、硬直した。
「イゼア、いないのか？　明かりはついていたのに……あの女、こんな時間にどこに行った。まったく、仕置きが必要だな」
涙が出そうになった。
少し部屋にいないだけで仕置きをしようという男の、愛人という名の実験台にされる。
「おい、ここは女子寮だぞ。いくら入り口とはいえ、男が入ってくるなと何度言ったら」
「ちっ」
教師の声と、舌打ちして去って行く足音。
イゼアはほっとして腰が抜けかけた。
暫くして完全に足音が聞こえなくなった頃、ドアがノックされた。
「ウィーゲム、何かあったか？」
担任のセファインの穏やかな声を聞き、イゼアは涙をこぼした。

絶望で暗黒に染まっていたイゼアの中に、光が差し込んだ気がした。

「せ、先生っ」

イゼアは部屋を飛び出て、生まれて初めて他人に泣きついた。

ここアンセムは魔道都とも呼ばれている都市国家だ。

中央に塔があり、その塔を崇めるように魔道機関『理力の塔』の施設が囲み、そこから放射状に六つの大通りが広がっている。その大通りの一つに面する広場で週に一度、市が開かれる。魔道絡みの貴重な品が出回り、各国から人が集まる世界でも有数の変わり市だ。この市で扱われるのは、魔法薬や魔具、魔動機の類である。

そのため様々な人間が集まり、時にトラブルも起こる。

賑やかな市の片隅に、ちょっとした人だかりが出来ており、その中心では若い男と女が争っていた。理力の塔の魔道士と商人の女だ。

「娼婦を探してるんなら、場違いだ。とっとと帰れ」

分厚い眼鏡をかけた女は、身につけていた魔動機によって叩きのめした男を睥睨し、肩に掛かった三つ編みを払って背中に戻す。

今し方この男を打ちのめした攻撃用の魔動機が、彼女の動きに反応してエプロンの大きなポケットに戻る。

「お前は馬鹿か。アンセムに何年住んでいるんだ？　相手に大した魔力がなかったとしても、無力だと思うな。それ以上の力を持っている事を考えて行動しろ。思慮深さのない魔道士など、ただの魔法が使える道具にしかならないぞ」

彼女が低く笑うと、男は悔しげに呻く。

自分の実力を過大評価する男の、空虚な自尊心のなんと脆い事か。相手をする価値もない、益にもならない男など、いつまでもいてもらっては周辺の商人の商売にも差し障りがある。

「これ以上居座るなら、警邏を呼ぶぞ」

この街の治安維持には、理力の塔も手を貸している。街の警邏には、塔員も当番制で参加しているのだ。魔道士の多いこの町の警邏は、例外なく魔道を身につけた者で、理力の塔が運営する魔道学院エムラドの卒業生も多く、この男もその一人で、マナラは中途退学した落ちこぼれだ。

「たかが修理屋にやられた、助けて、なんて言えるならこのままいてもいいけどな」

落ちこぼれにしてやられた姿を、もしも同業者に見られでもしたら、彼にとってはさらなる屈辱だろう。

彼女の言葉に、名も忘れられた同窓の男は、唇を噛んで人を押しのけ去っていく。負け犬の

去る背中は可愛いが、人間となると可愛くもない。

「マナラちゃん、大丈夫なのかい？　あんな男の恨みを買って」

知り合いの中年男が声をかけてくる。行商人の男で、壊れた魔動機を安く買い入れ、マナラに修理を頼んでは高く売っているようだ。魔具を作れる呪術師や、新品を作る魔動機技士は世の中多くいても、修理屋というのは少ない。そのため、こういう商人とは縁がある。

「大丈夫だよ。あれは虚栄心の塊で、自分より格下と思う相手にしかちょっかいを出さないから。私のように塔から出た者を、落伍者として見下しているんだろうね」

マナラの実家に対する下心もあったのだろう。たまたま見つけて、あわよくばと声をかけて、さっきの結果だ。

かつて彼らと同じ学舎に入り、落ちこぼれたマナラの事を、彼は無力の証と思っていたのだろう。

だが現実はそこまで単純ではない。魔力のみが力と思っている塔の中しか知らないエリートには、受け入れがたい現実だろうが。

この日の家路は足取りは重く、おっくうであった。売り上げが悪かったわけではない。逆に仕事が多くてあの場ではとても終わらなかった。持ち帰る荷物が重く、リアカーを引く足は物理的理由で重い。

「まったく。あのオヤジ、心配するふりをしてこんなに押しつけるなんて、人をなんだと思っ

ている」

もちろん修理屋だ。修理屋だからこそ、大量に壊れた魔動機を置いていったのだ。これだけ多いと、一週間では無理だ。目利きなだけあり、かなりいい品ばかりなのだ。必然的に複雑な構造をしているものが多く、修理にはかなりの時間がかかる。来週、出来た分だけ持って来いと言ってたから、そんな事は分かっているのだろうが。

食うには困らないし、楽しいし、腕も上がるので、文句は言えないが、それにしても多い。

「町の便利な修理屋さんか……落ちたものなんだろうな」

元は名家の娘として、魔道士を目指していた過去もある。それが今では、便利屋扱いだ。腕に自信はあるし、この仕事の事は好きだが、たまに多少情けなくもなる。女一人だと男には甘く見られるし、それを理由に値切ろうとする。技術者に女も男も関係ないというのに、世間の風は冷たいものだ。

マナラも初めから好き好んでこの仕事を始めたわけではない。魔道士の才能があれば、道は違ったはずだ。才能がなくて、知識があって、魔動機が好きだったから、成り行きでこうなった。師もいなければ、友と呼べる同業者もいない。完全な独学の、デタラメ修理屋なのだ。

マナラの住まいは街の外れにある。市の外れからもかなり離れているが、安く小さくない家を買えた。元々は商売をしていた店らしく、一階が広いので、実に使いやすくていいのだ。

その住まいに辿り着くと、彼女は顔を顰めた。泥棒よけの仕掛けが綺麗に全て外されていた

のだ。

「あいつか」

わざわざ彼女の仕事場にやって来るのは、限られた者だけだ。馴染みの客にも善し悪しがあるので、この家を教えた事はほとんどない。わずかな例外も、無理に中にまでは入ろうとせず、外で待っているものだ。ここまでするのは、一人しか知らない。

「キーオ、何の用だ！」

マナラは短剣を抜いて工房の大きな扉を蹴り開け、中に待つだろう知人の名を呼んだ。

「ひぃっ」

聞こえたのは、子供の声。椅子にちょこんと座る、品のよい可愛らしい少年は、短剣を抜いたマナラを見て、青ざめ硬直していた。

「……君は何の用でここにいる？」

問うが、少年は答えない。刃物に怯えているのだと気づき、マナラは短剣を鞘に収め、再び同じ事を問う。

「君は何の用でここにいる」

「せ……せんせぇ」

情けない声を出して、少年は奥の台所へと呼びかけた。

「ああ、マナラ、勝手に邪魔している。しかし、茶もないのかここは」



奥から出てきた長身痩躯の男は、水の入ったマナラのグラスを手に持っていた。彼は知人のキーオ＝セファインという魔道士である。理力の塔でも指折りの攻性魔法の使い手であり、開発者でもある。今は教師をしているので、この少年は生徒なのだろう。

「先生……優しい人だって言ってたじゃないですかぁ」

情けない声を上げる少年は、どこからどう見ても箱入りのお坊ちゃまだ。服装はくたびれた感じはあるが、にじみ出る育ちのよさは隠せない。

「修理して欲しければ、塔の頑固オヤジに頼めばいいと言っているだろう、キーオ」

「だから俺は、あのジジイが嫌いだって言ってるだろ」

この男は先ほど会った同窓の男よりはずいぶんとましだが、マナラからすれば似たようなものである。嫌いな男に頭を下げるよりは、落ちぶれた同窓に金を払って頼む方がいいと、頻繁にやって来るのだ。物の扱いが乱暴なため、頑丈なはずの道具も壊すような男の尻ぬぐいなど、本当は一切したくない。渋々引き受けているのは、彼の背後にいる理力の塔の塔長に、世話になった事があるからだ。

「それよりさ、こいつ」

彼は少年を指さした。金髪で大きな青い瞳の十代半ばの少年だ。高い魔力を感じるため、彼が理力の塔の塔員の一人である事は間違いないだろう。制服は着ていないが、年齢的にエムラドの生徒だろう。魔道の才能はなかったマナラだが、感知能力だけは低くない。

「俺が担任しているクラスのウィーゲム。十四歳。成績よしの優等生」
「それがどうした」
無礼な知人の言葉に、マナラは反射的にそう切り返していた。少年が今にも泣きそうな顔になり、キーオはくくっと笑う。
世の中、みんな自分を馬鹿にしているのではないかという気分になり、マナラはリアカーを作業場に入れるために再び外に出た。
腹が立つ事は多くある。この世の全てが呪わしい瞬間すらあるが、細かい頭を使う作業をしている時は、それらを忘れられる憩いの時だ。
マナラにとって、魔動機いじりは趣味で、ついでに生活費を稼いでいるのだ。だから必要以上の依頼は邪魔だ。しかもこのキーオは、魔動機ではなくただのカラクリまで持ち込んでくるのだ。
「依頼なら断る。今し方大量の依頼を受けた。お前の我が儘で魔道機以外の物まで直している余裕はない。帰れ」
リアカーの上にある、普通に取引されていれば、かなり高額になるはずの品々を見せつける。とても複雑で、並の魔動機技士なら、修理どころか何が原因で故障したかも分からないだろう。
「マナラ……前から思ってたんだけどさ、何でお前、自分でジャンク品買って修理して販売とかしないんだ？　そっちの方が儲かるだろ」

「私は細々した作業が好きで修理をしているんだ。そんな商売を始めたら、一人でこつこつ分析して修理なんてしていられるか。店も構えて、従業員雇うのか？　知識が必要な商売だから、従業員探すだけでも大変だぞ」

「じゃあ、助手なんていらないか？」

「助手？　なにそれ」

キーオの唐突な提案に、マナラは眉根を寄せる。

「言い方を換えてみると、弟子」

「それはつまりあれか。側に置く事を許す代わりに、炊事洗濯他諸々の雑務を押しつける事ができる、奴隷と言い換えても支障ないあれか」

「どんな認識だよ」

「職人の世界ではそれが当然だ。しかも技は教えず、見る事も許されないという狭い世界だ」

「見ることもって、じゃあどうやって技術を盗むんだよ」

「見ないように見るに決まっている。もちろん、見ているのに気づかれたら仕置きをされるんだ」

「お前そういうの嫌いだろう」

もちろん好くはずがない。それが嫌いで、独学でここまできたのだから。

魔動機の技術を全部こっそり盗めなどとは親切に言ってもらえない。雑用に使われ、それでもある程度の才能の開花を見せた者には、しっかりと教えられる。ようは技術を他に売る事が

ないように、という事だ。
　しかしマナラの場合は女であり、初めから知識が豊富だった。一時期出入りしていた工房の連中は、彼女を毛嫌いしていた。ああいう職人というのは、女性蔑視が激しいのだ。だから一人でここまでやってきた。
「まあ、炊事洗濯ぐらいは言われなくてもやるだろう。手足が増えたと思って、置いてやってくれ」
「いらん」
　マナラは一言で終わらせた。
　キーオは肩をすくめて、リアカーから魔動機を一つ手に取った。作業台に置くと、指先にわずかに魔力を込めて、封印の蓋を外して中を覗き込む。実はこれが難しいのだが、さすがは教師をしているだけの事はある。
「相変わらず、訳分からんな」
　魔道の知識があろうとも、回路や歯車がついた機械交じりの魔動機について、彼はど素人だ。分かるはずもない。
「私にもまだ分からない。もっとバラしてみないと」
　言いながらマナラはネジも使われていない、ずいぶん古めかしい魔動機をバラしながら、中の様子を見る。

一度分解して組み立てただけでまた動くようになる事もあれば、部品を交換しなければならない事もある。魔石が砕けていたり、魔力補充式で魔力が空になっているだけだったりと、動力が原因の場合もある。

原因を突き止めるよりも、分解する事が楽しい。組み立てる事が楽しい。だが、原因を探るのも、やはり楽しい。

「……これを、どれぐらいで直すんですか」

「こいつなら数時間で」

教え子と教師は人の作業を覗き込んで囁き合う。

「帰れ」

「まあまあ。この狭い業界、安心して任せられるレベルの職人が指で数えられるほどしかいないんだ。しかもそのほとんどが偏屈で弟子がいない。いてもお前が言った通りの奴隷扱い」

「だからって修理屋の弟子にしてどうする。誰もやりたがらないから数が少ないんだ」

修理出来る知識があれば、簡単な新品を作る事が出来る。技術があれば、誰だって自分の作品を作りたがる。よほどの好き者でない限り、こんな仕事は長く続かない。だったら最初から普通の工房に行けばいい。

「お前も弟子はいないし、いいじゃん弟子とれ」

「馬鹿だな。むしろ私がまともな師匠が欲しいぐらいだよ」

弟子をとるなど、まともな弟子になった事がないマナラにはどうしていいのかよく分からない。師弟関係というのは、分からない。

「まあまあ。お前ももう世界に通じる職人なんだし」

「言っておくが、私をいくつだと思っている？」

「二十歳だったっけ？」

「まだ十代だ。弟子などとれるか。教えを請いたいのは私の方だ」

キーオは陽気に笑いながら、マナラの肩に手を置く。気安いその手を打ち払い、睨み付けると彼は真剣な顔をした。

「ウィーゲムって、聞いた事がないか」

「知らな……いや、確か……太陽神の怒りを買い、魔法を封じられた一族だったか」

思い出し、魔力は高い少年を見つめた。彼の頬には朱が入り、悔しげに唇を噛んだ。

「実在したのか。都市伝説の類だと思ってた」

「したんだよ」

神とは実在する存在だ。実在すら疑う者はいるが、神を名乗り、それに相応しい力を持つ者が実在するのは間違いない。彼らは時に慈悲を、時に絶望をまき散らす存在である。

ウィーゲムは神に関わった中でも、不幸な一族だ。元々有名な魔道貴族の一つであったが、呪いのせいで子孫が魔道士ではなくなった。

可愛らしい男の子なのに、難儀な一族に生まれてしまったものだ。

「こいつの家系は魔力すら持たないようになっていたが、こいつは魔力を持って生まれた。だから一族の期待を受けて来たんだけど……どうも、魔力を放つことができても、それを魔法として発動させる事が出来ないみたいらしくてさ。魔力が多くて筆記の成績かいいから特別クラスなんだけど……」

魔法が使えないのに特別クラスにいたら、苛められそうだ。彼はいかにも気が弱そうで、叩きがいがありそうに見えた。

「だからってどうして私の所に？　魔力だけでも利用価値はあるし、嫌なら実家に帰ればいいだろ」

その言葉に、少年はびくりと震えた。

「帰るのはいいけど、そうするとこいつんち貧乏だから、色々と困るんだ」

「じゃあ、塔で働けばいいだろ。もしくは他の職に就け。何で私がこの年で、それほど年の違わない弟子をとらなきゃならない？　弟子といったら住み込みだろう。何で男を住み込ます若い女がいる。私はこれでも女だからな」

キーオはくつくつと笑いながら首を横に振る。

「こいつ、女の子」

「女の子？」

可愛らしい顔立ちだが、その艶やかな金髪は、男の子のように短い。
女でも髪を短くする土地もあると聞くが、少なくともこの周辺でそのような習慣はなく、髪の短い女の子というのはほとんど見かける事はない。
「何かあったのか？」
「事情だけでも聞いてやってくれるか？」
マナラは腕を組んで舌打ちし、仕方がないと椅子に腰掛けた。

イゼアはじっと見つめられて、居心地の悪さを感じた。
マナラというこの女性は、見た目が少し怖い。
手入れが疎かにされた長い髪を三つ編みにまとめ、分厚い眼鏡で隠れているが、目の下にはクマが出来ている。不健康そうなほど痩せていて、とても神経質そうだった。服装は修理屋というだけあり、工具がたくさん入るエプロンをしている。
元々はお嬢様だったらしいが、今ではすっかりその面影はない。十代にも見えない。
しかしこの乱雑としているように見えて、物を置く位置がはっきりと決められている、工房の主には相応しい、職人の雰囲気があった。帳箪笥には、全ての引き出しに何が入っているか

書かれており、ネジや歯車、導線の種類も数多く取り揃えていた。
女性の工房には見えなかったが、この工房からは、実用重視の線引きを感じた。
「その髪、どうしたんだ？」
「えと……その……」
マナラに問われ、イゼアが頭を押さえて言葉に詰まっていると、担任のセファインが代わりに答えた。
「学用品を買うために切って売ったらしい」
マナラが意表をつかれたような顔を見せた。
あまりに恥ずかしい理由で、イゼアは顔も合わす事が出来ずに俯いた。顔が熱くて、とても面を上げられなかった。
「お前って特別クラスを受け持ってるんだよな？」
「ああ」
「この子魔法使えないんだよな。家の力とかもないよな？」
「魔力と筆記だけでうちのクラスにいる努力家なんだ。相談してくれればどうにかしたのに、何事も自分で解決してしまう子だから、気づいたら髪がなかったんだ。綺麗な髪だったのに」
「……」
マナラは額を押さえて息をつく。

「でも、だからと言ってどうして私に？　努力してクラスにいるんだろ？　ある意味稀少だからどうとでもなると思うが……それに魔動機が好きなら、卒業後にどこかの工房へ弟子入りすればいいし」

「いや、女の子だし、せっかく才能があるからお前の所が一番かなって」

「女性の多い工房もあるにはあるのに？」

「普通の工房じゃ、お前が言ったみたいに奴隷みたいに使われるだろ。それにそんな所の工匠よりも、お前の方が魔動機の事をよく知ってる。こいつには、お前みたいなタイプの方が合うと思ったから連れてきたんだ。せっかく好きな事なのに、人間関係で嫌いにさせたくないしな」

マナラは頭をガリガリと掻きむしる。彼女の機嫌はあまりよくない。やはり迷惑だったのではないかと不安になる。

それでも、イゼアは彼女の弟子になりたかった。この工房を見て、魔動機を見て、強くそう思った。

「だから、私は修理屋だって言っているだろ。なんで修理屋が滅多にいないか分かるか？　無駄にその道が険しいからだ」

「ああ、知ってる。なぁ、ウィーゲム」

問われて彼女は顔を上げた。

「は、はい」

「本当に分かってるのか？」
マナラは足を組み、眼鏡を指で押し上げながらイゼアを睨め付けた。
「はい。普通の工房は、技術を他の流派が盗みにくくするために、無駄な作りをしている場合が多いから、製造元以外での修理は難しいんです」
マナラは無表情に頷いた。その鋭い眼光に、イゼアの焦りは募る。
「わ、私、魔法が使えない分、勉強ばっかりしてて、その、えっと……お小遣い稼ぎに色々と直したりして、好きなんです、こういうの」
「好きなの？」
意外そうに言われて、イゼアは二度頷いた。
「他に出来る事がないですし」
「ちょっと好きぐらいの気持ちで足を踏み入れるなら、普通の工房に行った方がマシだよ」
「ついて行ける人が少ないから修理の専門家が少ないのは分かります」
通常、自分達の技術を隠そうとするから、他人が修理するのは難しい。工房は自分達にだけ中身が分かりやすいよう、中身が系統立てられている。他の流派が盗みにくくするために、単純な物も複雑に見える作りをしている場合が多く、暗号を解読しているにも近い。
だから普通にブランドを持つ工房に弟子入りした方が、求められる知識は少なくてすむ。盗みやすい環境で、盗めばいいのはたった一流派なのだ。しかし修理屋は盗む相手は実物だけ。

請うても誰も教えてくれない。しかも流派は数え切れないほどあり、それぞれに癖がある。それを見抜けるようになれば簡単だが、一つの流派の癖を解明するまで時間がかかる。

自分の作りたい機能、デザインがあるなら、どこか専門にしている工房に弟子入りすればいい。教科書通りに作れるようになり、それを応用して、一端の技士を気取る方が簡単である。ただそのほどんどは、技士としては凡庸に終わる。

「言っておくけど、私のは半分趣味だぞ。仕事と割り切ってたら出来ない」

マナラは胸を張って堂々と、普通の人が仕事を語る時とは、逆の事を言った。

そう、趣味の域だ。生活のためならここまでしなくてもいい。

仕事と割り切らないと出来ない事と、趣味と割り切らないと出来ない事がある。

そこまでの覚悟があるかどうか、聞かれているのだ。

「十四歳なら、別にエムラドを卒業するからってわけではないんだろ？　進路相談なんて、卒業が見えてきた頃で十分だろ。それだけ魔力があるなら、儀式にも重宝されるだろうし、バイトなら他にいくらでもあるんじゃないのか？」

大きな魔力を必要とされる儀式は多く、魔法を駆使する者よりも、大きな魔力を持つ者の方が少ないため、需要はある。

「残念ながら、呪われた魔力を使いたがる奴は少ないんだ」

セファインの言葉を聞いて、マナラは首を傾げた。

「そんなの儀式の結果に影響するのか？」
「影響したことは今まで一度もないな。だから魔動機に影響を与える事もない」
「偏見がそんなに強いのか？」
「もちろん強いけど、それ以上に興味がある奴もいるんだよ」
マナラはイゼアを見た。頭のてっぺんから、テーブルに隠れるヘソの辺りまでを視線が往復する。
「この子の呪いに興味があるのが、どうしてもいるんだよ。太陽神って言えば最も力がある神と言われてるだろ。その呪いに興味がある奴が、偏見のない奴に交じってさ」
「なるほど……見分けがつかないのか。たまに目的のためなら手段を選ばない外道がいるからなぁ」
マナラは頬杖をつき、テーブルを指先で叩いて思い悩む。
イゼアは魔力を貸してくれと言われてのこのこ一人で出向いたら、縛り付けられて服を脱がされそうになった事もある。研究者は腕力がないから、授業で体術も習っているイゼアは自力で叩きのめして逃げられたのでよかったが、あれ以来、魔力を貸すのは怖くなってしていない。
「何より、こいつは速やかに独立したいと考えている」
「成績が落ちたの？」
「親に売られそうなんだ」

再び穴が開きそうなほど見つめられ、イゼアは視線を逸らした。
イゼアは、少なくとも卒業するつもりで、真剣に将来を考えていた。魔力さえあれば、研究者としての道は閉ざされていない。
時間はあると思い込んでいた。
「売られる？　親が娘を研究者に売るって言うのか？」
「さすがにそこまではしないけどさ、こいつを妾にしたいって奴がけっこういるらしくてさ」
「妾？　愛人って事？　確かに綺麗な子だけど……まだ早いだろ。そんなに実家は金に困ってるの？」
「見た目とか年齢とかそういう問題じゃないんだ。この太陽神の呪いってのは、魔力すら持たずに生まれるほど強いもんなんだ。で、イゼアは家族の中で唯一の魔力持ち。期待されてエムラドに来たけど、結局どういうわけか魔法は使えなかった。で、次の代で封印が解けるかもしれないって言われ始めてさ。今まで魔力を封じられてきた反動とばかりに魔力の強いイゼアを見て、魔道至上主義の奴らがどう思うかって、そういう話だ。お前もそういう世界のことは分かってるだろう」
マナラはため息をついた。
「それで、次代で封印が解けなくても問題ないように、正妻じゃなくて愛人として囲っておこうと」

「そうだ。稀代の魔道士が生まれる可能性は、俺も五分五分じゃないかと思うぐらいだから、金持ちがどんな手段に出るかなんて、火を見るよりも明らかだ。見た目も可愛い子だし、儀式の時は魔力が強いのが一人いると便利だし、邪魔にはならない」

事実だが、言葉にされて突きつけられると、胸が抉られるような思いだ。取って付けたような『可愛い』を含めて。

本当に可愛いのだったら、髪を切っただけで男扱いされる事はないはずだ。

「ほら、今ウチにルフィルの長男がいるだろ。こいつんちは昔からあそこに援助してもらってるんだ」

ルフィルは魔道士内では、有名な魔道貴族だ。この都市に住む者なら、耳にした事のある者も多いはずである。

幼い頃から当たり前のようにイゼアをこき使い、魔道学院エムラド内でもほとんどお抱えの使用人のような扱いを受けていた。それまでなら耐えられた。

「ルフィル家は、お前の実家エルーシア家に並ぶ家だ」

「私は勘当されている……が、うちを基準にして考えると、確かにやりかねないな」

「こいつの兄が手紙で知らせてくれてな、金銭のやり取りをする前に、進路を決めなきゃならないんだよ。弟子入りしたら保護者は師匠になるから、家は容易に介入出来ないしな。特にお前なら安心だろ」

「下手な所に弟子入りさせたら、売られるって事か」
「お前金に興味ないし、同性だし、似たような境遇だし、趣味が同じだし、ちょうどいいだろ」
セファインは軽い調子で言った。
マナラの家系も有名な魔道貴族で、無能者には用はないという一族だとセファインは言っていた。そういう家系に生まれ、才能がなかったから、こうして独立しているのだと。
身内とはこの街にいる者を除き、何年も顔を合わせておらず、親の顔ももう忘れたらしい。
だからこそ、イゼアは賭けてみようと思ったのだ。
魔動機いじりは好きだが、その道に踏み込むための思いきりが少し足りなかった。背中を押したのは、セファインから聞いた彼女の生き方だった。彼女も好きでそのような生き方をしているわけではないのは分かる。だから、一歩踏み出そうと思えたのだ。
そしてこの物に溢れた落ち着いた雰囲気の工房を見て、希望が強くなった。散らかってはいるが、設備は整っているし、年季の入った道具は大切にされている。
マナラはため息をついて、再び頭をガリガリと掻きむしる。
突然やって来て、無茶なことを頼み、思い悩ませてしまったのは心苦しかったが、今のイゼアには彼女しか見えなかった。
「炊事洗濯は？」
唐突に問われ、イゼアは背筋を伸ばした。

「で……出来ます。うち、広いけど使用人はいなかったから」
一族は過去の栄光にしがみつき、未だに広い屋敷に住んでいる。
「パズルは好き？」
「……した事ありません」
高価だから。
「ああ……魔動機はどれぐらいバラした事がある？　作った事があるんじゃなくて、他人の作った物をバラしたのに限って」
「あんまり……多くはありません。ただ、他の人が捨てようとしていたのを、自分で直して使ったり、頼まれて直したりしてました」
魔力しかないから、それでも出来る魔工科を第一科目にして、実技をクリアしていた。それでたまに小遣い稼ぎで修理を受け付けていた。
「で、短絡的に私の所に？」
マナラはセファインを睨み付けた。
「俺だけの意見じゃないぞ。ちゃんと塔長様とか女性教師とかに相談したし、お前なら大丈夫だろうって事になったんだよ」
自分で自分の魔力を有効活用出来て、自立する事も出来る。師匠が女性なら、身の危険もない。師匠候補であるマナラも、優秀でいい人だと、セファインや他の複数の教師から聞いた。

少し変わり者だと付け加えられ、実際に会ってイゼアも同じ印象を受けたが。
「事前に相談もなく？」
「二度手間だろ？　ここで断られたら、塔長様直々に来るぞ。お前が塔長様の頼みを断るはずがないからな」
マナラはのっそりと立ち上がり、リアカーに積んだ魔動機をあさり、封を開いて中身を確かめる。何度もそれを繰り返し、一つの箱を手にして頭を上げた。
「……だったら、これを直してこい。出来たら、弟子にしてやる」
そう言って、マナラは魔動機をテーブルに置いた。
「中身を見てみな」
イゼアは彼女に言われた通りに中身を見る。そして顔を顰めた。
「なんて細かい……」
少し間違えば、修復不可能になりかねない、繊細な作りをしている。
「一時期流行った音が鳴るだけの魔動機だ。中身は綺麗なもんだし、単純だ。ただし、手先の器用さが求められる。塔で習った事をちゃんと覚えてて、手先が器用なら、時間をかければ直せない事もないだろう。それが出来ないなら、才能ないから諦めな。他人から預かったもん壊してたら、商売にならないからな」
イゼアは急に不安を覚え、セファインを見上げた。

するとへらへらとして間の抜けた笑みを浮かべる。
「大丈夫だ。間違って壊れても弁償しろなんて言われないよ」
イゼアはほっと胸を撫で下ろす。自信がないわけではないが、完全に壊してしまったら、とても弁償できない。そう思うと手が震えそうだった。
「これを、直せば弟子にしてもらえるんでしょうか？」
「それが最低条件だね。私は暇じゃないから、一から教えるなんて出来ない」
リアカーに積まれた山を見て、イゼアは納得した。寝不足になるほど、忙しい人なのだ。理にかなったテストだ。
「あの、いつまでに？」
「……これを直す事が出来たら、また来るといいよ」
イゼアは首を傾げた。期限を設けないテストなど今までなかったのだ。それだけに、緊張で身がすくむ思いだった。期限を設けてくれれば、分かりやすい。しかし仕事に期限があるとは限らない。一つの物にずっと手こずっていては、商売にならない。
「その時は、荷物一式持ってきてもいいよ。覚悟があったら、の話だけど」
覚悟。こんな物を毎日いじり続ける覚悟。甘えが許された、学生生活を抜け出す覚悟。親の命令に背いて自立する覚悟。生活だけは出来るだろう、安定した未来を切り捨てる覚悟。
イゼアの顔に笑みが浮かんだ。

「はい、分かりました。頑張ります」

家から解放されて、自由になるためなら、厳しい師匠の元での日々は、願ったり叶ったりだ。

イゼアは嬉しくて何度も頷いた。ルフィル家に売られなくてすんで、この少しわくわくする空間で自分の仕事が出来るなら、むしろ天国だ。イゼアはセファインへと笑みを向けた。その笑みを受けて、セファインはイゼアの頭をくしゃくしゃと撫でた。

彼はお前は出来ると無茶な事を要求し、出来ないと分かると罵り、ついには売るような両親とは違う。両親はこんな風にしてくれた事はない。いい親には恵まれなかったが、いい師には恵まれた。

「そこまで喜ばれると、ちょっと複雑だなぁ」

「せ、先生の事はエムラドを出てもずっと恩師としてお慕いしていますよ？」

「そうじゃなくて……まあ、あいつの自業自得だけどな。ウィーゲムはやりたいように頑張れ」

彼の言葉は軽いが、その分面倒を見てくれるいい教師だ。

「用が済んだらさっさと帰れ。私は忙しい」

「そうだな。その前に……」

マナラに邪険にされながらも、セファインは床に置いてあった、やけに大きな荷物を作業台の上に置き、中から麻の袋を取り出した。

「お前、また仕事ばっか入れてちゃんと食ってないだろ。あと眠れ。肌の手入れぐらいしろ。

女のくせに、見られた顔じゃないぞ」
「余計なお世話」
「お前は暇があっても料理はしないだろうから、保存食を買ってきたからな。お前が最低限生きていけるよう、塔長様に監視を言いつかってるこっちの身にもなれ」
「ああ、そうか。じゃあ、それを置いて帰れ」
「ミルクは毎日飲んでるな？　あと、ちゃんとパンも食えよ。せっかく運んでもらってるんだから、腐らせたりするなよ」
「はいはい。さすがの私も餓死するほど没頭する事はないから、安心して帰れ。お前は生徒の事だけ心配してればいいんだよ」
セファインはマナラにしっしっと手で追い払われ、肩をすくめる。
「お前の好きな蜂蜜漬けも入ってるからな」
「分かったから帰れって」
イゼアは魔動機を腕に抱えて、満足そうに工房を出て行くセファインに続く。マナラの工房から少し離れた所で、空になった袋を肩にかけ直し、セファインは少し遅れていたイゼアを振り返った。
「どうした。疲れたか？」
「あ、いえ、その……先生は、あのマナラさんとどういう関係なんですか？」

同窓であった以外に接点が見えなくて、しかも邪険にされているような関係だから、どうしてマナラの事をよく知っていて、信頼しているのか気になった。

「家の都合でよく会ってた幼馴染みだよ。色々とあってさ……ああ、お前とアーソルドに似たような関係かな」

「先生はアーソルド様とは全然違いますよ。天と地ほど違いますよ。アーソルド様が先生みたいな人なら悩んでませんよ」

セファインはくすりと笑い、イゼアから荷物を取り上げた。

「ま、何にしても、素直で可愛いお前が、マナラみたいにならないかだけが心配だよ、俺は」

冗談めかして言うが、イゼアは少しだけそれが心配になった。そうならないように、イゼア自身が気をつけなければならないのだ。

もちろん、そんな事を考えるのは、これを直してからでも遅くない。

市の片隅の木陰の下で、折りたたみの椅子に座り、スカートなのに片方の足首を膝の上に乗せて組み、魔動機を修理する女がいた。腰にはポケットの多いエプロンとポーチがあり、手にする工具を度々取り替えて、細かな作業を進めていく。

修理しているのは魔動玩具だ。ただし、魔石内蔵のかなりの高級品だ。魔石は名の通り魔力を持つ石で、自然に発せられる魔力を利用する分には、半永久的に動作する。その分高価になるので、玩具に使われる事は滅多にない。

金持ちの息子が友人に玩具を自慢していたら、乱暴に扱ってしまい動かなくなり、こうして修理屋を頼ってやって来たようである。

金持ちの息子とはいえ、高価な玩具を壊してしまい、さすがに怒られると恐怖して隠し、友人と一緒にマナラの噂を聞きつけてやって来た。

マナラに叱られて先ほどまでは大泣きしていたのだが、今ではそれが嘘のように涙を引っ込めて、興味津々と作業を見つめている。

「いいか。こういう玩具は、けっこう繊細に出来ている。乱暴に扱えば、中身が壊れて魔石の力があっても動かなくなる。しかもこれの製造元はこの国じゃない、手に入りにくい高級品だ。直すには時間も金も掛かる。せっかくプレゼントしてもらったんだから、大切に扱え」

子供達はこくこくと頷いた。

「もう壊すな」

再び動くようになった玩具を見て、子供達は再度首を縦に振った。

「ありがとう、おばさん」

「お姉さんだ、お姉さん！　今回はサービスしてやるけど、今度やったらお前達の親に言いつ

けるからな」
「げぇ」
「あと、ちゃんと盗んだお金は返しておくんだよ。買い食いなんてしてたら、親に言いつけるからな」
「うん、分かった」
子供達はこくと頷き、次の瞬間には忘れて玩具を抱えて去っていく。
彼女の手元にあるのは、子供達自身の小遣いだ。本当は親元からくすねてきた銀貨を何枚か持ってきていたのだが、初めにそれを叱って、次に玩具を乱暴に扱った事を叱って、彼らの持っていた自分たちの小遣いを出させた。
その様子を遠巻きに見ていたイゼアは、隣に立つセファインを見上げた。彼は苦笑し、一人になったマナラの元へと歩いた。
「お前は人がいいな。代金ぐらい受け取っておけばいいのにさ。どうせ金持ちの息子だぞ」
「親の財布から盗んだと知って受け取れるか」
マナラは顔を上げてセファインを睨んだ。
「お前は、そんなんだからいつまでたっても、あんなボロ工房なんだよ。本気で商売すれば、すぐにでももっと街中に工房が開けるのによ」
セファインはイゼアが抱えていた魔動機を取り上げ、投げて渡した。

「今日で一週間だったか？」
「作業自体は三日で終わってたよ。でも色々と手続きとか準備とかあるだろ」
「ふぅん」
マナラは立ち上がり、荷物を片付け始めた。
「あ、お前が忙しいと思って、引っ越しは勝手にすませておいたからな」
マナラはセファインの言葉を耳にし、目を見開いた。
「し、信じられない。荷物は持ってこいって言ったけど、普通はこっちに来てから運び込むだろ？」
「二度手間だろ」
「だから、女の家に勝手に入るな！　高価な物ばかり置いてあるんだぞと、何度言えば分かるんだ」
「ははは、誰も盗らねーよ。あんな罠くぐり抜けてさ」
マナラは舌打ちして立ち上がる。彼女が不機嫌になるのは当然だ。イゼアは止めたが、手伝ってくれた他の教師達も、いいからいいからと言うので流されていた。
「まったくお前は」
マナラは敷物をリアカーに載せて、周囲の露天商に挨拶をする。それが終わるとイゼアへと視線を向けた。

「帰るぞ……ええと？」
「イゼアです」
「イゼアか。じゃあイゼア、おいで。今日は寄る所があるからもう帰る。リアカーを一緒に押してくれ」
「はいっ」
イゼアはリアカーを後ろから押すために移動した。
マナラはそのまま振り返らず歩き出した。
「マナラ、ありがとな。また様子見に来るわ」
セファインは手を振りながらそう言う。
「……勝手にしろ」
マナラはそう言ってから、照れを隠すように、小さく舌打ちした。

# 2章　花街での副業

意気揚々と後ろからリアカーを押していたイゼアだが、徐々に焦りが募ってきた。マナラとの関係に不安を覚えたとか、そのような理由ではない。

現在二人がいるのは、アンセムでも有数の歓楽街なのだ。

目抜き通りから二本ほど外れた、娼館が立ち並んでいるその区画の存在は知っていても、足を踏み入れたのは初めてだった。女が――学生が一人で来る場所ではない。

相手がマナラではなく別の人物なら、売られるのではないかと怯えていただろう。セファインの紹介で、子供達の玩具をタダ同然で直してやるような女性だからこそ、安心していられるが、落ち着かないのは、マナラに対する信頼とはまた別の次元の話だ。

途中、派手に着飾った女性に男と勘違いされて声をかけられた。髪を切っただけでこうも男と間違えられると、少し自分について考え直してしまう。

マナラは上の空のイゼアに気づき、振り返って言った。

「無視してろ。ガキに声をかける馬鹿にろくな奴はいない」

「いや、私は女の人は……」
「男もいるよ。ま、縁がないに越した事はないけどね」
マナラはそういう男と縁があるのだろうか。彼女は病気かと思うほど顔色が悪い。先週会った時よりも目の下にはクマが色濃く染み付いて、骨と皮しかないほど痩せている。油で汚れた肌は荒れており、髪だって長いには長いが、毛先はかなり傷んでいる。それでも、肌の傷み具合に比べると、少しは気を使っているようにも見えた。
娼婦の中には痩せている者も、顔色の悪い者もいるが、彼女ほどではないだろう。マナラという女性は、とにかく容姿に頓着がないのだ。
初めに見たときは室内が暗いからだろうと思っていたが、あの時からこんな風だったのだろうか。それとも、本当に食べも眠りもせずに仕事に打ち込んでいたのだろうか。
「ここだ」
マナラが迷いもなく入ったのは、派手な外観の建物――娼館の敷地だった。怯みながら後に続くと、外から見る限りは、意外に明るく清潔で驚いた。もっと暗いかと思っていた。
「なんでこんな所に……」
「昔世話になったんだ」
「しょ……娼館に？」
この場所で、それを生業にして生きている女性達の中で、驚くのは失礼なような気がしたが、

驚かずにはいられなかった。彼女は元々裕福なお嬢様だったから、この商売に対する嫌悪感のようなものは強いものだと感じたのだ。

「昔、半年ほど寝床を貸してもらった。医者の真似事が出来たからな」

「ああ、そっか」

それを報酬としていたのだろう。厄介な性病を癒すためには魔法医の治療を受けるのが一番だ。彼女も昔は理力の塔にいたのだから、知識があっても不思議ではない。

「でも、治癒は高等技術ですよ？」

知識や技術とは別に、魔力も必要だ。彼女は魔力の低さが原因で魔道士を諦めたと聞いた。

「癒しの魔法っていうのは、道具とそれなりの儀式をすれば、魔力も式もそう必要ない。手間を惜しむか惜しまないか、頭を使うか使わないかだ」

と、彼女は頭を指さした。師であるセファインが認めるほどの知識を彼女は持っている。彼女が理力の塔の学舎『エムラド』にいた時は、筆記で常にトップだったらしい。そしてイゼアのようにまったく魔法が使えないわけではない。魔力が足りない分、知識で補おうとして、勉強したのだろう。彼女なら学者や開発者としてでも塔に残れただろうに、中退したという事は何か家の事で理由があるのだろうか。

マナラはリアカーがぎりぎり通れる程度の通路へと入り込み、通路の途中にあった関係者用らしき扉を迷う事なく開いてさらに進み、わずかなスペースにリアカーを置いた。魔動機を布

で覆い、大きな革のカバンを持って裏口から建物の中へと入る。
マナラはすれ違う女達に『ただいま』と言った。そして奥へと進み、娼婦達が身支度をしている、控え室のような場所に入ると、わずかに笑って言った。
「ただいま、姉さん達」
娼婦達がマナラを見て、笑みを浮かべて立ち上がった。
「おかえりなさい」
娼婦達の歓迎を受けて、マナラは初めてはっきりとした笑顔を見せた。
この娼館は決して安い場所ではないだろう。建物は立派であったし、立地もいいはずだ。そして娼婦達は皆よい服を着て、肌も艶やかで、美人ばかりだ。
このような場所に出入りして、なぜマナラはこうも——後天的不美人なのだろうか。
これほど磨けば変わりそうな人は、他にはいない。目鼻立ちや顔のバランスが悪いわけではないので、彼女の努力によって人生も変わるはずなのだ。なのに彼女は……。
「また痩せた!?」
娼婦達が驚き、顔色の悪いマナラを取り囲む。
やはり、痩せたのだ。仕事をしすぎているようだから、痩せて当然だ。先週見た魔動機の数は異様に多かった。セファインが食料を差し入れるほどだから、よほど熱中して仕事をしてしまうのだ。イゼアは熱中しすぎても手持ちにある魔動機はせいぜい一つか二つなので、そのよ

うになる心配はなかったが、もしもあのような環境にいれば時間を忘れてしまう可能性は否定出来なかった。

「ちょっと仕事が……」

「もう、ほどほどになさい。ちゃんと食べてる？」

「ちゃんと寝てる？」

「治療はいいから、ちょっと寝なさ……って、あんた、その男の子どうしたの!?」

赤毛の女性がイゼアを見て目を丸くした。やはり、男の子扱いだった。娼婦の目から見ても、男の子なのだ。

イゼアは髪をもう一度伸ばそうと、心に決めた。

あの時はどうしてもお金が必要で、お金になるのが髪しかなかったから売ってしまったが、その髪を見て教師達に叱られた。他の生徒達からは、哀れむような視線を向けられた。

だから綺麗に長く伸ばして、可愛い髪飾りを買い、可愛らしく結おう。服も、お金が出来たら可愛いのを買おう。それが今のところ、一番の願望となった。イゼアは制服以外に着られる女物の服を持っていないのだ。イゼアには兄はいても姉はいない。

「……あら、よく見たら女の子じゃないの。どこで拾ってきたの？」

男の子と言った娼婦が、イゼアを見て訂正してくれた。フリルがいっぱいついた服を買おうかと思っていたところだったが、普通のワンピースに格下げしておいた。無駄遣いは貧乏人の

敵である。それにフリルは似合わない。
「キーオに押しつけられた」
「え、あの先生がうちへの斡旋？　あんたがここに出入りするのでさえ、あんなに嫌がってたのに？」
「違う。私の弟子に」
彼女たちは一瞬きょとんとして、イゼアとマナラを見比べる。何度も何度も視線を往復させ、一番年長の女性が言った。
「あなた、生き物なんてちゃんと育てられるの？」
言われてみれば、この痩せ細った不健康な姿をしている女に、弟子の面倒が見られるのか不安になる。
娼婦達は「そうよそうよ」と便乗してマナラへと詰めかかる。
「食べ物を一日三食、いえ、最低二食は食べないと、子供は大きくならないわよ」
「それに、ベッドでの睡眠も必要よ」
「食べ物だって、与えていればいいってわけじゃないのよ。バランスよく必要なの。生ものにはちゃんと火を通さなきゃダメよ」
ひどい言われようだ。彼女たちの言葉が本当なら、セファインが保存食を手みやげにしたのも理解できる。腐りやすい物では、食べる前に腐らせるのだ。

「それぐらい分かっている」
「嘘よ。じゃなきゃ、面倒だからって、小麦をそのまま食べてみるなんて挑戦はしないわ」
そんな事をすれば腹を壊すだろうに、それ以前に食べられた物ではないのに、なんてずぼらなんだろうか。
「家事が出来るらしい」
マナラのその一言に、娼婦達はざわめいた。
「って事は……ついでにマナラが夕食を食べる事もあるってこと!?」
「それどころじゃないわ。朝食も、昼食も食べるかもしれないじゃない。だって、作られて目の前に出されたら、食べるのが面倒だとか言えないでしょ」
「すごい！」
何がすごいのだろうか。
この師となる女性は、人として当然行うべき事をしないほど、仕事熱心なようだ。話には聞いていたが、ここまでとは思いもしなかった。マナラは金には不自由していないのに、夢中になって仕事をしているのだ。
ほんの少し、別の意味で先行き不安になってきた。
「お嬢ちゃん、マナラをよろしくね」
「ああ、これで来ない日に餓死したんじゃないかと様子を見に行かなくてもすむのね」

娼婦達の極端だが、切実な喜びようを見て、イゼアは己の未来に暗黒の霧が掛かっているような気がした。

慣れた人達から見ても薄汚いと思われたらしいマナラは、娼婦達によって風呂に連行された。油で汚れた顔や身体を洗われ、木綿の清潔なワンピースに着替えさせられ、肌の手入れをされ、食事が出された頃には、日は沈みかけていた。

その頃には、客が続々と入店し、マナラに構っていた娼婦達も半分は働きに行ってしまった。

彼女たちも好きでこんな仕事をしているわけではないだろう。売られたか、家族のための犠牲か。中には楽に稼ぐため、という女もいるだろうが、もちろん少数派だろう。

運が悪ければ、イゼアもそれに似た将来が待っていたのだから、他人事とは思えない。

湯気の立ち上る美味しいスープを飲みながら、イゼアはため息をついた。食事は悪くないし栄養価も申し分ない。そんな食事が用意される理由は、娼婦達が美しい容姿を保つために、健康には気を使っているからだというのが、少しばかり複雑だった。

イゼアは食べられるだけ、自分の力で生きていける可能性があるだけ、幸せなのだと思った。飼い殺しになるはずだったのに、手を差し伸べてくれた教師達に、セファインに感謝する。いつもはだらだらとした雰囲気の教師だが、誰よりも親身になって相談に乗ってくれた。塔長にも穏便にすむように、手を回してくれるよう、話をつけてくれた。

将来の事など分からないが、せっかくもらったチャンスは有効に使わなければならない。努

力を怠った時、囓る親のすねはないのだ。むしろ親にすねを囓られているのだから。

「この子も、昔は普通だったんだよ。独立するまでは」

娼婦の一人が、マナラを見つめて突然語り出した。どうやらイゼアに向けて話しているようだった。

「絶望的に家事が一切出来ないからねぇ……」

やはりマナラは家事が出来ないのだ。出来なければ出来ないなりに努力するのが普通だが、彼女はそれらを全て放棄し、好きな事だけに熱中した。

この結果が今目の前にある。

「掃除や洗濯はあたしらが月に何度か順番でしに行ってるけど、丸一日必要だよ」

他の娼婦が言った。

主治医の自宅がゴミ屋敷では、患者も安心できないに違いない。

「マナラ、もっと美味しそうに食べなさい」

「でも、味なんてどうでもいいし」

「あんた腐っても貴族の——金持ちの娘だろ。いい物食べて育ったんだろ。理力の塔も、食事は美味いんだろ」

おそらく、何度も言っている言葉なのだろう。

何度も言いたくなるほど、マナラは無感動に食事をしている。咀嚼するのが面倒なのか、具

をスプーンで潰して、パンを中に投入して、ふやけた頃に口にかき込み、サラダには手も付けない。流し込めるスープと違い、咀嚼するのが面倒なのだろう。

「お野菜も食べなさい」

「……はい」

言われるがままに、渋々野菜をほとんど噛まずに腹に詰める。素直だが、そのようにして食べられては、作った百姓が可哀相である。

そうまでしても、あまり食が進んでいるようには見えない。彼女に出されたのはイゼアの半分ほどである。日頃から食べていなければ、胃袋が小さくて当然だ。それでも胸元はイゼアよりは膨らみがある。すとんとしている自分の胸と比べると、少し悔しくなった。

イゼアはこれからの事が不安になる。ちゃんと、食べさせてもらえるのだろうか。食材を買わせてくれるのだろうか。そんな不安が頭に過ぎる。

しかし娼婦達はそのような事は少しも心配している様子はなく、食料を買える事を前提に、

「イゼアちゃん、本当に、この子をよろしくね」

と次々とよろしくね、と言われた。まともな身体にしてあげて、少しぐらい女の子らしい体つきにしてあげて、と。

それはつまり、ちゃんと食わせろ、寝かせろ、という意味だ。そのために、弟子としての努力をしなければならない。

もし彼女に真人間の生活をさせようと思えば、どれほどの時間と努力が必要なのだろうかと考えて、それでもアーソルドの愛人になるよりも気楽だと思い直す。

食べるのが面倒臭い物は食べないらしいから、分厚いステーキはダメだ。よく煮込んだ蕩けるようなタンシチューなら食べてくれるかもしれない。魚なら骨を取るか、骨まで食べられるようにしなければならないだろう。

食材費は常識の範囲内なら、出してくれるよう強く進言してもいいのだろう。皆の様子を見ていると、それを望んでいて、マナラはそれに反発していないのだ。

「よし、食べた。イゼアも食べたか？」

食べ終えたマナラは、イゼアを見た。

もちろん、イゼアはまだ半分しか食べ終えていない。マナラのような量では足りないし、彼女のような食べ方をしていない。

「治療するんですか？」

「検査する。準備はしているな？」

「もちろんよ」

娼婦に確認を取ると、マナラはカバンを手にとって立ち上がる。もう移動してしまう気らしい。イゼアは慌ててパンを口に詰め込む。

「これはお前には関係のない仕事だ。ゆっくりしているといい」

そうは言われても、見てみたいという気持ちもある。魔力の少ない者がする治療なら、かなり複雑な儀式が行われるはずだ。そういう儀式は、見るだけの価値がある。

知的好奇心が刺激され、想像するだけで胸が躍った。

残念だが、スープも、サラダもろくに咀嚼せずに胃に押し込め、イゼアは立ち上がった。

「……ああ、第二のマナラが生まれるかも」

そんな声が聞こえたような、聞こえなかったような。

実に失礼な言葉である。イゼアは食べる事を人生の喜びとしているのだから。

魔法陣の上を、女達が一人一人、ゆっくりと歩いていく。一つの娼館にしては人数が多いので、近隣の娼婦達が来ているのだろう。

魔法陣は床に直接彫ってあり、インクで書いたりするのとは違い劣化しないため、頼めばかなり高額になるはずだ。病院でもなければ、普通は見られる物ではない。これをやったのはマナラだろう。器用さと知識と根気が要求される。確かにこれがあれば、魔力の少ない彼女でも治療は大げさな儀式などなくても行える。

つまり手間暇と知識を惜しまなかった結果である。

「お嬢ちゃんストップ」

呼び止められたのは、イゼアよりも少し年上の少女だった。まだ子供扱いされそうな少女が身体を売っているなど、と考えるのは彼女に対して失礼だろう。

彼女の頬は少し赤く上気し、ぼんやりとして、焦点が定まっていない。

「少し風邪気味？　客に移しても何だから、こっちにおいで」

「マナラ姉さん、でも私は十分……」

「身体が資本だろう。さ、こっちにおいで。休むのは一晩だけでいいから、ここで無理をしてはダメだよ。お客さんに迷惑をかけたら、叱られてしまうしね」

マナラは少女を手招きして、彼女の額に手を当てる。

「誰か、冷やす物持ってきて。あんたは隣で休んでおいで。終わったら薬を出すから」

隣の部屋を指さした。

「大丈夫。ちょっと診察して、温かい物を食べて、滋養のある薬を飲んで寝るだけだから」

女達のほとんどはまだ食事を取っていないらしい。腹が出てはみっともないから、仕事前にはあまり食事は取らないのだそうだ。だからこの中で満腹なのはマナラとイゼアだけだった。

「一日休んだところで、賃金に大した差は出ない。こじらせた時の方がまずいよ。今なら薬代は店が出してくれるけど、後からだと自費だからね」

少女はこくと頷き、奥の部屋に行く。何か、事情があって働いているのだろう。

「じゃあ次の人いいよ」
と言ってマナラは魔法陣に踏み入れる女達に異常がないか、次々と検査をする。
今客を取っているのは、前回検査をした者ばかりらしい。前回受けていない者は、全員検査を受ける事になっている。そうして、最低一ヶ月に一度の検査によって、病気の早期発見に心がけているらしい。
だからマナラは月に二度ここに来ていると娼婦が教えてくれた。報酬は食料。自分で食料を仕入れに行くのが面倒で、しかしさすがに食べないと死ぬからだそうだ。
検査を終えた女達は、ほっとしたように仕事に出て行く。病気になるのは嫌だろう。今は厄介な風邪も流行っている。
それでも一番彼女たちが怯えているのは、花柳病――性病なのだが。
自覚のある者は、自主的に検査で止められた女達が入る部屋に向かっている。
病気を移せば、罪に問われる事もある。病気持ちの多い娼館など、客足が遠のくのは当然だし、逆ならば常連が付く。常連が多ければ、質が上がり、女達の給金も増える。この娼館の女性オーナーは、女達の扱いがこの街で一番いいそうだ。マナラを拾ったのも、そのオーナーらしい。
「姉さんも」
「はいはい」

最後まで残っていた娼婦も魔法陣を通り、無事抜ける。はねられたのは、十人ばかり。ただの体調不良で引っかかった者の方が多いが、中には性病を患っている者もいるだろう。命に関わる病も多いので心配だ。

「じゃあ、後はよろしくね。あたしは表に行かなくちゃ」

「ああ、適当にやっとく」

イゼアの相手をしてくれていた娼婦は、くすりと笑い部屋を出て行く。マナラは奥の部屋に行き、用意されていた少し高めの椅子に、まず一人目に座るよう指示をした。

見るからに顔色が悪く、咳をしている。彼女は目に見えて一番辛そうなので、真っ先に診療する事にしたらしい。

「口開けて」

光を指先に生み出し、舌圧子を口に差し込み、喉の様子を見る。

「腫れてるな。喉痛いだろ。薬用意するから、うがいしろ」

端的な言葉を口にしながら、診察を進める。

「治るまでにちょっと時間が掛かりそうだ。他の女達に移ったらまずいから、すぐに部屋に戻って温かくしてもらえ。薬は後で運ばせるから、毎食後飲むように。さぁ、今すぐに部屋に戻って寝ておいで」

女はこくと頷き、ふらふらと部屋を出て行った。

それから先ほどの風邪気味の少女を診て、荷物の中から取り出した調合済みの薬を渡し、また次の患者を診る。ある程度予測して、事前に作っていたのだろう。確かに今は風邪が流行っている。

そうして、残り二人になると、マナラは用意されていた桶で手を洗い、荷物から手袋を取り出した。

「下着脱いでるか」

「ええ」

ただ感心して見ていたイゼアはたじろいだ。

言われてみれば、患部を診なければならないので、そういう事になるのだと。

顔から火が出そうだった。女同士である。他人の裸は見た事がある。しかし、足を広げる様はさすがに直視できない。何というか、そういうものに縁がなかった。もちろんそりゃあ、女性には縁がないだろう。しかし男性にも縁がなかった。それゆえに、最低限の知識はあっても、実際にそういう生々しい現実が目の前にあると、目を背けてしまう。

正直、ドキドキした。

相手は同性なのに鼓動の音が耳に響くほど、彼女の動悸は激しくなっていた。

「ああ……まったくこんなの移されて。魔力含有の病気だぞ」

魔力を持つ病原体というのがある。そういうのは、通常の薬で治す事は難しい。魔法医によ

る治療や、高価な魔法薬を用いる必要があり、下手な田舎だと不治の病と言われるものだ。ここアンセムは土地自体に魔力が溢れているため、そういう厄介な病が少なくはないのが、この都市の問題点らしい。ただし、魔力を持った病原体は、魔道士がいれば不治の病でも何でもない。今のところ、全て治療が可能である。不治の病に魔力を持たせるという研究もされているほどである。

「やぁ、ごめんねぇ。だって見た目じゃ分からないんだもの」

カラカラと笑う女性を見上げ、マナラはため息をついた。女性の足下に、用意されていた粗末な桶を置いて、胡座をかく。

娼婦が座る椅子の下には、また別の魔法陣が彫られている。こんな物は、この都市でもそうお目にかかれるものではない。マナラ独自のオリジナルの魔法陣なのだろう。魔道理論に関しては、彼女が教師達も含めて一番だったとセファインが言っていた。それは本当らしい。職業柄、魔石の粗悪品も安く手に入るだろう。魔法陣を維持するには、普通は魔石を砕いた物を水に混ぜて、それで磨くのだ。魔石は高いが、医者にかかるよりは安い。手間が掛かるのは、彫るときだけだ。魔法陣二つで娼婦の健康を管理できるのであれば、マナラが魔法医だったとしても、娼館側が払う金額は安くすむ。マナラは正規の医者ではないので、さらに安くすむ。安くどころか、食料品や生活用品が報酬なのだから、破格である。

なぜこんなところで埋もれているのか、イゼアは理解に苦しむ。

裕福な彼女なら、学者として成功すれば家族だって納得したかもしれないのに、こんなイバラの道――というよりも、獣道のような人生を歩んでいる。

「流るる者よ　清き乙女よ」

彼女は水精に呼びかける。癒しは地か水の属性の魔法である。病気の場合は、水の魔法を使う場合がほとんどだ。

彼女の手元に、うっすらと黒い帯状の輪が現れる。魔法式と呼ばれる帯だ。これを多重に展開するのは難しく、魔法が高度になるほど式を多く展開させなければならなくなる。

下の魔法陣が、本来ならば三重の魔法式が必要なところを、一重の式ですむように補助しているようだ。この魔法陣の式を売れば、一財産になりそうなものなのだが、彼女にそのつもりはないようだ。その気があるならとっくに出回っている。出回れば、イゼアも彼女の名前を聞いていただろう。

「病む者を清めよ　穢れを払い清浄を」

自身で作り出す魔法式が足りない分は、すべて魔法陣で補っているので、彼女の呪文は短かった。

感染症を和らげる術で、それで完治するわけではない。何度か掛けて、ようやく完治する。普通なら一度掛ければ、後は薬と自然治癒力に任せるものだ。

普通は口に向けてするのだが、患部に向けてするというのもありだろう。特にそこは口と同

じで体内に通じているのだ。

清めるごとに水は穢れていき、そして最後にはどす黒い水が桶の中に落ちた。

「いつ見ても、嫌な色ねぇ」

これが彼女の抱えていた穢れ、というものなのだ。

「それだけ水が頑張ってくれたって事だ」

「ありがたーく、お清めしないとね」

こうして穢れた水は、魔力が強い者なら魔法を使うついでに清めてしまうが、マナラの魔力では難しい。

清めは魔力などなくても出来る。簡単な手順で清めの儀式を行い、最後は地面に穴を掘って捨て、土で埋める。自然に帰して、清められるのだ。

もう一人の娼婦にも同じように魔法を施した。魔法を使えないイゼアには真似できないが、参考にはなった。

最初の風邪ひき娼婦のために薬を調合した頃には完全に日も沈み、娼婦達も本格的に働き始めていた。

マナラは薬を渡すついでにもう一度様子を見てくるから、ここで待っていろと言って、荷物を抱えて行ってしまった。

廊下に一人残されたイゼアは、初めは男性に絡まれたりしないか心配だったが、ここは関係

者以外通らない場所らしく、女性としか顔を合わさない。
目を伏せて、息をついた。いきなりとんでもない場所に連れてこられて混乱していたが、落ち着くと考える事は山のようにあった。将来の事、自分の事、家の事。
ふと、喧噪に気がついた。男女の言い合いだ。方向は——入り口の方。
少し迷い、イゼアはそちらに向かう。イゼアも訓練を受けているので、一般人相手なら何とか出来る。それに魔道士だとしたら、仲裁に入れるかもしれない。無理そうなら、引っ込んでおけばいい。
静かに忍び寄り、こっそりと覗き込む。
洒落た玄関口に、一人の少年と、娼婦数人が何か押し問答をしていた。
「お前達では話にならない。いいから通せ」
そう偉そうに言う少年は、顔見知りだった。
「ちょ……何してるの!?」
思わず飛び出し、娼婦達の前に出る。
少年の名は、アーソルド＝ルフィル。
イゼアの幼馴染みで、攻性魔法を得意とする魔道貴族の長男だ。危うくイゼアが売られそうになった男でもある。
「イゼア!?」

怒りに満ちた彼の声に、思わず怯みかけた。アーソルドはいつもイゼアの頭を押さえつけた『ご主人様』だった。ウィーゲム家は、ルフィル家の支援でかろうじて存在しているようなものだ。太陽神の呪いを観察したいという、ただそれだけの理由で、飼われている。

彼の前に立つと、怒鳴り付けられると、身がすくみそうになる。長年の習性は怖い。

だが、今の彼女には関係のない事だ。生きて行くだけなら十分な資産がある実家の事などどうでもいいし、娼婦達を侮るこの男は大嫌いだ。

「アーソルド様、なぜこんな所にいるの？」

彼を軽蔑の目で見上げた。彼は背も高く、顔もよく、優秀な魔道士で、家柄もよく、女に不自由するような男ではない。なのに、だ。学生の身分でこんな所に来るなど、ふざけている。だから追い返されそうになっていたんだろう。

彼はイゼアを見ると、冷え冷えとした強張った顔で、イゼアの髪を引っつかんで引き寄せた。

「うあっ」

アーソルドの力に容赦は感じられない。彼は喧嘩を売られれば平然と他人を半殺しにするような事もある、なんだって出来てしまう男だ。今まではそれほどひどい暴力を受けた事はなかったが、生まれて初めて逆らった今、彼がどうするか予想もつかなかった。

「お前……僕の許しもなく、なぜこんな所にいる」

冷たい色の瞳で見下される。しかしここで怯んでいては、イゼアは前に進めない。彼の手か

ら逃げるために、こんな所にいるのだ。
「あ、アーソルド様には関係ありませんっ」
「ふざけるな。誰が許可した？　外に出る時は僕の許可を取れと言っているだろう！」
人を見下した、冷たい目だ。彼のこの目が、大嫌いなのだ。人を道具としてしか見ていない。金持ちで、魔力もあり、それを使いこなす才能もある。それらが彼を傲慢にしているのだ。
「はした金で売られたか？」
「違います。私の意志で来たんです」
冷え冷えとしたアーソルドの目に、急に炎が宿った。
「こんな小汚い場所に、自分から来たと？」
「小汚いって、アーソルド様だって来てるじゃないですか！　学生の身分でこんな所に来るなんて、何考えていらっしゃるんですか!?　見損ないました」
「べ、別に女を買いに来たわけじゃない！」
「じゃあ、何しに来たんですか!?」
「それは……」
アーソルドは言葉に詰まり、それから有無を言わさずイゼアの髪を引っ張って外に出ようとする。
そこにきて、ようやく彼が怒りをぶつけに来たのではなく、イゼアを連れ戻しに来たのでは

ないかと思い至る。彼は彼女を心の底から自分の所有物だと思っていたのだろう。所有物が勝手な行動を取ったのが許せないのだ。彼の性格はそれなりに把握している。それ故に、この行動の真意が読めてうんざりとした。

彼は十五歳にもなって、小さな子供のように我が儘なのだ。

「ちょ、待ってください！　私はもうエムラドをやめました！　塔から除籍したんです！」

イゼアは連れ帰ろうとするアーソルドに向かい、戻る事ができないのを説明する。

「魔力があるのに除籍？　されるわけがないだろう。大きな魔力は使い道がある。塔が本人に使いこなせない、利用しやすい魔力を手放すはずがないだろう」

「そうお願いしました」

自分で出てきたと言ったのに、人の話を聞かない男だ。

一番大きなきっかけは、この男なのだと、まったく自覚がない。自分が理不尽な命令をイゼアにしてきた自覚がない。幼い頃は帽子を落としたから取ってこいと川に蹴り落とされたし、林檎の木に蛇がいるから追い払えと命令されたし、髪は引っ張るし、身の回りの世話をしないと援助を打ち切ると脅すし、いい思い出がない。

出てきてよかったと、改めて思った。

「ふざけるな。僕の承諾なく、そんな事が出来ると思うな」

「うぐっ」

髪を引っ張られ上を向かせられて、痛みに目をつぶる。
ひどい男だ。なのに彼は彼女が持っていない物、全て持っている。
それを見るに見かねて、娼婦の一人が声を上げた。
「ちょっとあんた、さっきから聞いてれば勝手な事を！　女の子に何をするんだい！」
「黙れ。娼婦風情が僕に話しかけるな」
伸ばされた手を叩き、アーソルドはイゼアの髪を掴んで外へと向かう。仕方がないので、一度戻ってから、セファインに説得してもらう事にした。ここにいないマナラには、誰かが事情を説明してくれるはずだ。彼は制服を着ているから、娼婦達も察してくれるはずである。そう思った矢先、アーソルドの足が止まった。
閉じていた目を開くと、彼の前にマナラが立っていた。彼女の腰には剣がある。魔剣だろう。だが、アーソルドは実戦体術では常に上位の成績だ。つまりこの男は、魔力に身体能力に家柄に優れているという、性格以外は完璧に近い男なのだ。これがまた憎らしくてならない。たまに悔し涙が出そうになる。
「その子に何している？」
マナラは腕を組み、片足に体重をかけて立つ。
彼女が出てきてもどうしようもない。彼女がどれほど頭脳明晰でも、強力な魔法は使えないのだ。体術と攻性魔法に長けたアーソルドを説得できる要素を持っていない。無関係の女性相

手に怪我を負わせるような事はしないと思うが、ひょっとしたら見知らぬ女性にでも乱暴する可能性はある。彼は自分自身に加えられる攻撃には、自分に自信があるのでそれほど怒らないが、所有物に手を出すと、怒りで周囲が見えなくなるのだ。

「構わないでください、この人危険人物ですっ！」

「だったらなおさらほっとけるか」

言われてみれば、人として当然の事である。もしも弟子となる女の子が、粗暴な男に捕まっていたら、無茶をしてでも取り戻そうとするだろう。

「ルフィルの坊や、その子をどうするつもりだ」

「……なぜお前のような不気味な女が、僕の事を知っている」

あまりにもの率直な言葉に、マナラも傷ついたように俯いた。女性にそのような事を言うなど、本当にひどい男だ。事実だとしても、言ったらおしまいだ。もう少し包み隠して言うべきだ。

「まあそれはいいとして、その手を離せ。その子はお前の所有物ではないだろう」

彼女はイゼアを指さして言う。

「金か？　いくらで買った？」

「金などもらっていない。手に職を付けてやれと言われただけだが」

彼は目を見開き、信じられないと首を横に振る。

「手に職？　娼婦が？」

一瞬目を見開いたマナラは、次の瞬間得心が行ったとばかりに頷いた。
娼婦達の間から、くすくすと忍び笑いが漏れる。興味津々の男性客達は、心得た娼婦達にさっさと連れて行かれる。
「つまりお前は、イゼアが娼婦になると思って、慌てて連れ戻しに来たと」
そう聞くと別な誤解を受けそうだが、結果的にはそうなっている気がした。だが、髪を引っ張られている立場としては納得できない。
「確か前も見たわねぇ、こんなの」
「懐かしいわねぇ」
「あら、先生はもっと紳士的だったわ」
「彼の方が激しくて情熱的ねぇ」
娼婦達がひそひそと囁き合う。
イゼアはセファインを思い出した。似たような関係だと言っていたからだ。アーソルドと性格は全く違うが、こういう意味で似ていると言っていたのかもしれない。
「……マナラさん、そう聞くとなんかいい人みたいじゃないですか」
セファインはお嬢様だったマナラが娼館に出入りするのが心配だったのだ。アーソルドとは違う。
「そうだな。これが夫になったら、家庭内暴力で苦しみそうだな。どのみちその子はやれないよ」

これで普通の男が相手だったら、マナラの言葉に喜んでいたのだが、相手はなにせ短気のアーソルドだ。この後どうなるのか、不安でたまらない。家族が正式にイゼアを彼に売る前に逃げてきたのに、これでは何の意味もない。マナラを巻き込むつもりなどなかったのに、誰も巻き込みたくなかったのに、結果的には騒動を起こしている。

「さっきから聞いていれば、お前は人を危険人物やら、いい人じゃないやら、失礼だな」

無自覚のアーソルドは不機嫌にイゼアを睨み付けた。いい人はここで、掴んでいる髪の毛を手放すものだが、彼にそのつもりはないらしい。

マナラは上から下までアーソルドを眺めていた。マナラには彼がどう映っているのだろう。彼は背が高く細身で、しかし筋肉はついている。どの科目も成績がよく、塔の中でも天才と呼ばれている内の一人だ。彼を止められるのは、塔長や一部の教師と、生徒の中でもごく一部の天才達だけであり、ここにいない人達には期待できない。

だからイゼアは自分で何とかしなくてはならない。

マナラに迷惑をかける事だけは出来ない。彼女は護身用の道具は持っているようだが、強力な魔法は使えず細く力もない。

「問うが坊や、イゼアを連れ帰ってどうするつもりだ？」

「どうもこうもない。お前には関係がない事だ」

「関係はあるよ。私はその子の保護者になった。その子に仕事を教えるのが私の役目だからな。

それをイゼアも望んでいる」
「望むだと？」
彼は怒りにまかせてイゼアの髪を強く引っ張った。
「そんな虐待を受ければ、そう思うのは当然だ。その子を連れ帰るというなら、せめてその子を納得させるといい」
と、マナラは言葉を切り、せせら笑う。
「まあ、無理だろうがな」
その時、アーソルドはイゼアの髪から手を離した。その隙にイゼアはささっと壁際まで下がり、じりじりと出入り口の方へ向かう。自然と進行方向にいるマナラの方へと向かうように見えるだろう。
「ほら、嫌われている。お前は世間から見て、どう見えるか分かっているか？」
マナラはニヤニヤ笑いながら首を傾げて見せた。この人は、投げやりだったり優しかったりするが、かなり気も強いらしい。
「ストーカー」
言ってしまった。
イゼアも少し異常だと思っていたが、そこまでは誰にも言えなかった。しかし、彼女は言ってしまった。

「きっさまっ！」

さすがに切れたアーソルドは、いきなり魔法式の展開を始めた。

攻撃魔法を使うつもりだ、あの馬鹿は！

「ちょ、アーソルド様!?」

「短気だな。振られたのに気付かず仕事先に押し入って連れ帰ろうなんて、ほんとうに恵まれた環境でしか育っていないんだな」

呆れた様子で彼女は言い、そして手の平を前にして顔の横に持ち上げ、合図をするように手首を曲げた。

「まったく、気づいてたのか」

完成間近の魔法を阻止せんと、アーソルドの後頭部を殴ったのは、アーソルドを止められる数少ない教師、キーオ＝セファインだった。アーソルドの用意していた魔法は、セファインが軽く魔力を込めて打ち消したらしく、バチリと音を立てて紫電が爆ぜた。下手な魔道士がすれば、爆発しかねない荒業である。

娼婦達にも馴染みなのか、「先生素敵」と、きゃーきゃーはやし立てる。

セファインに後頭部を殴られたアーソルドは、殺意すらまき散らし振り返り——顔を顰めた。

「……教師がこんな時間に娼婦を買いに来ていたのか。不謹慎な」

「それはこっちの台詞だろう！　だいたい、ここに来たのもお前の行動が不審だと生徒達から



苦情が来たからだろう」

アーソルドの渋面がますます険しくなる。誰がそんな苦情を出したのかと、他人のせいにしているのだろう。彼は自分の非を認めない男だ。

「しかし、よくここがわかったなキーオ」

マナラが三つ編みの先端をいじりながら言う。

「お前の家の方に向かっていなかったらしいからな。ウィーゲム連れてここに来ているなら、かなり迷惑かけるんじゃないかって走ってきたんだよ。裏口から入ったら、ここに連れてこられて何とかしてくれだぞ。驚きを通り越して呆れた」

マナラとの付き合いが長いだけはある。そしてアーソルドの性格もしっかりと把握している。教師とは大変な仕事だ。

「で、何をしているんだルフィル。ここが何だか分かっているな？」

「お前は、知っていてイゼアを？」

「ん？　ウィーゲムを紹介したのは俺だからな」

「生徒を娼館に紹介する教師がどこの世界にいる!?」

実はまだ誤解したままの彼の言葉に、周囲からはくすくすと、アーソルドを挟む元師と、現在師である二人が爆笑した。

「馬鹿だな、お前！　この都市じゃあ、ウィーゲムはまだ娼婦として働けないぞ」

そう、年齢が足りない。イゼアはまだ成人していない。この都市で十四歳以下は娼婦になる事が出来ない。

「ウィーゲムは医者として来たその女についてきただけだ」

「医者？」

アーソルドはマナラを上から下まで見回す。医者の不養生を絵に描いたような外見に、不信感を抱いているようだ。

「その女は実質アンセム一の技術者、修理屋のマナラだよ。医者はただのボランティアだ」

「しゅ……修理屋？」

何だそれは、とばかりに彼は眉を寄せて眉間にしわを作る。そんな商売の存在すら知らないのだろう。塔の中に専用の修理室がある事も知らないのかもしれない。彼は壊れたら新しい物を買うからだ。

「そうだ、魔動機の修理屋。最近は塔長様の周辺で壊れた物は、全部こいつに回される」

アーソルドは胡散臭そうにマナラを見た。

「修理屋ってのは、一目見て理解できるだけの知識を要するから、一つの流派を作り上げるよりも難しい。立派な職業だ。引く手あまたで食うにも困らない。お前が阻止できる立場にはないぞ。ああ見えて、あいつの口座には俺の貯金の数倍の額が入って……」

それを口にして、セファインはうちひしがれたように口を手で覆う。

なぜ彼がマナラの口座の中身を知っているのだろうか。
「先生、何無駄遣いしてるのかしら？」
「通ってくれないのにねぇ」
娼婦達が口元に手を当てて、ひそひそと囁き合う。
「とにかく、イゼアは持ち前の魔力を最大限に生かせる職に就くべく、一から勉強し直すんだ」
アーソルドはむぅ、と唸り、セファインを睨み付けた。
「聞いていない」
「……ああ、知らないのか」
当事者なのに、何も知らないようだ。両親達が勝手に話を進めていたらしい。
「何の話だ？」
「まあ知らないなら知らないでいいだろ。とにかく安心しろ。で、一度帰って頭を冷やせ。な？」
「知らないって、何がだ」
「後で説明してやるから。ほら、お前のイゼアは大丈夫だから来い」
セファインはアーソルドの肩に手を回し、半強制的に彼を外に引っ張っていく。マナラは無言で手を振って見送り、セファインもさっと手を振り返す。
去っていく二人の後ろ姿を見てイゼアは呟いた。

「……ひょっとして、怒ってたんじゃなくて、あれでも心配してくれていたんでしょうか？」

「まあ、あれだ。まだまだ子供だって事だよ。ほら、帰るよ。こんな所にいつまでもいたら商売の邪魔だからね」

「はい」

イゼアはマナラに手を引かれ、リアカーが置かれた場所に戻った。

とりあえず、今日の所は無事に嵐が去った。

だが、セファインが詳しい説明をしてしまったら、何が不満だと因縁をつけてきそうで怖かった。

## 3章　具神と技士

アーソルドという、一番の悩みの種は去ってくれたが、彼女にとっての問題はまだまだ山積みだった。いや、今日のアーソルドは天災のように予定外の問題であり、予定通りの問題こそが彼女にとって越えねばならない峠である。

「キーオの奴、また仕掛けを外したままじゃないか」

マナラは玄関の仕掛けを見て、眉をつり上げた。

「ごめんなさい、先に私の荷物を運んだから……。後でいいって止めたんですけど、いいからって」

「問題はそこじゃない。外せるくせに、何度教えても元に戻さないことが問題なんだ。ここは高い物や危険な物がたくさん置いてある。外せるのに戻せないなんてふざけてると思わないか？」

「先生……器用なんだか不器用なんだか」

イゼアは大ざっぱな部分のある元担任の、ほがらかな笑顔を思い出した。あの笑顔で「い

やぁ、すまん」と、いい加減に謝るのだ。彼はいい教師だが、とても大ざっぱな部分があった。
「後で仕掛け方教えるから、外に出る時はちゃんと戻しておくように」
「は、はい」
マナラは工房のドアを開きイゼアはリアカーを後ろから押した。上には娼婦達からもらった報酬代わりの食材や日用品も載っているので、かなり重い。マナラが使うはずのない小麦などはなく、干物や、日持ちする果物、そのまま食べられる野菜などが多い。
「なんだ、いらしていたのか」
先に入ったマナラが、娼婦達に話すような柔らかい調子で、いつもより丁寧な言葉で言う。
イゼアは誰だろうと好奇心を膨らませ、部屋の中で椅子に座っていた男を眺めた。
よく見ればハンサムだが、不思議な色合いの灰を被ったようなくすんだ銀髪は、櫛を通した様子はなく、着ている服も薄汚れ、マナラに並ぶずぼらさだ。顔立ちのよさがそのずぼらさで全て殺されている。まさにこのまま食事を忘れれば、男版マナラの出来上がりである。
「だ……誰ですか？」
男版マナラ一歩手前を凝視してイゼアは呟いた。
「ゼイレム様だよ。具神ゼイレム様」
具神――神。
記憶の中からそのマイナーな神の名を引きずり出す。

器神とも呼ばれるその神は、つまり道具の神だ。二級神であり、昔太陽神の不興を買い、心と力を封じられたと教科書にあった。邪神まではいかないが、あまりいい印象のない神だ。

いい印象はないが、考えてみれば道具を修理するマナラにとっては一番に信仰しなければならない神様だ。太陽神の怒りを買って、魔法を封じられた一族としては、瞬く間に親近感を覚えた。

それがここに、目の前にいるぼーっとした男なのだ。

「か……神様なんですか？」

「ああ、神様だ。あれでも」

あれでもというのは、意識ここにあらずという呆然とした体だからだ。威厳畏怖の念はまったく感じなかった。

「なんで神様がこんな所で待ってるんですか!?」

「こういう場所にしか現れないからだ。神っていうのは、意外と心地のよい場所にはホイホイ現れるんだよ」

「ほいほい……」

イゼアはドギマギしながらその男性を見つめた。虚ろな目をしているのは、感情が封じられているからだ。彼は視点の定まらぬ目をこちらに向けて、ただぼーっと何を見るでもなくじっとしている。

そんな神様に、マナラは優しく微笑んだ。
「また壊れた物を持ってこられたか。貴方の持ってくる物はとても魅力的だが、厄介な物が多くていけない」
マナラは作業台の上に置かれた魔動機を手に取った。イゼアはリアカーを押し入れてからドアを閉め、鍵をかけると、焦ったようにマナラのその手の中を覗き込む。イゼアは同年代の女の子に比べると少し背が高いため、楽な姿勢でそれが出来た。
その魔動機は時計のように見えた。マナラは魔動機の裏側にある封印を解く。古い魔動機はネジで止められている物は少ない。封印の解き方は、それぞれによって異なり、マナラの手の動きからすると、魔力を込めて封印をなぞるだけのようだ。
マナラは一度魔動機をテーブルに置き、眼鏡を拭いてもう一度魔動機の中を見る。
「うへぇ。見間違いじゃない」
マナラは悲鳴のような高い声を上げて、中身を凝視する。
あまりにも複雑で、イゼアにはどういう具合に複雑なのかすら理解できない。全ての意味が分からないと、かえって落ち着く。
「何ですか、それ」
マナラが困ったように肩をすくめた。
「用途がさっぱり分からない」

だとすれば、イゼアに分からないのは当然だ。安堵の息をつき、そしてそれを持ち込んだ男、ゼイレムを見る。彼はやはり、虚ろな目をしていた。

「……ゼイレム様には、聞くだけ無駄だからなぁ」

マナラはガリガリと頭を掻き、そして再び魔動機を見る。

「そうなんですか？」

「ああ。感情を封じられて、まともに考えられないからな。精一杯努力して、壊れた魔動機の声を聞き取り拾って、直せそうな奴のところに届けてるんだ。具神っていうのは、道具の神だからな。道具の悲痛な叫びに応えるのが精一杯で、人間の気持ちを察する事が難しいんだ。だから私が何を疑問に思っているのか伝えにくいし、疑問に思っている事が理解できないんだと思う。出来る者の所に来ているから、分かるのが当たり前だと思っているんだ」

ゼイレムは『簡単に出来る』と、『一生懸命やれば出来る』の違いが分からないのだ。

「それでもお行儀よく待ってくださってるから、無碍にも出来ない。初めていらした時はどうしようかと頭を抱えたよ」

もしも知らない男性と、いきなり睨めっこする事になったら頭を抱えるだろう。しかも敵意もない、ぼーっとした男性だ。警邏に突き出すのも気が咎める。

イゼアは何も考えていない死んだ魚のような目を見つめた。しばらく見つめ続けて、イゼアは先に目を逸らした。

「……最悪な呪いにかかってるんですね」
「そうだな。人の心を考えられないと、自分の心も分からない。習慣だけは覚えているようだが、自分で直してやる事は出来ない。ここに来ているのは彼なりの、精一杯の努力なんだ」
そんな呪いを掛けられても、必死に自分が司る道具のために動いているのだ。なんて立派な神様なのだろうか。並の神経なら仕事など忘れて意識を手放しているだろうに、彼は仕事人の鑑である。
それとも、それほどまでにこの道具は嘆いていたのだろうか。
「ゼイレム様、確かにお預かりしました。時間はかかるでしょうけど、仕事の合間に考えておきますよ」
マナラはそれだけ言うと、リアカーを移動させ、作業台の上にいくつか預かった魔動機を載せる。その間ゼイレムはぼーっと視線を泳がせ――再びイゼアの方に固定した。やはり虚ろな目だが、首が固定して動かない。
（……み……見られてる？）
自覚して、嫌な気分になった。
「どうなさいました。いつもならすぐ帰られるのに」
マナラの言葉を無視して、彼はぼーっとイゼアを見る。あまりにも気の抜けた瞳は、ボケた老人を思い起こした。言っては悪いが、強制的にボケさせられたというのが、一番分かりやす

いのだろう。

「気になりますか？　これはイゼアです。私の初めての弟子。将来は、あなたが通う技士の一人になるでしょう」

彼はじっとイゼアの方を見て虚ろながらも視線を動かさない。焦点が合っていなくても、彼はイゼアを見ている。

理解できない。

なぜ見るのだろうか。

「ゼイレム様は、イゼアのような娘がお好みですか？」

「……む……す……め？」

彼はわずかに首を傾げた。

ボケた神様にまで男と間違えられたのだろうか。だとしたら傷ついた。深く深く傷ついた。この神様だからこそ、繊細な心はズタボロにされた。立ち直るには時間が掛かるだろう。

「むすめ」

ゼイレムはもう一度この言葉を、舌の上で転がすように口にした。

そして何度も何度も呟いた。

「さらば」

呟くのをやめたかと思うと、突然それだけを言って姿を消した。

「変なゼイレム様」
イゼアが男だと思い姿を消さなかった。女だと知るとすぐに姿を消した。
その現象の先にある事実に辿り着き、イゼアは驚愕のあまり気が遠くなりかけた。
具神ゼイレムは、このマナラに気があるのだ。恋心かどうかまでは分からないが、本人がそこまで自覚していなくとも、呪いの呪縛をわずかにふりほどく程度に、マナラの事を気にしている。
その事実が、とてつもなく大きくて、この先を思い本当に気が遠くなった。
「どうした、イゼア。ふらふらしてるぞ。疲れたなら寝てこい」
「いえ、まだ疲れてません。ちょっとびっくりしただけです」
イゼアは持っていたカバンを抱きしめて、慌てて否定する。
「まあ、びっくりするわな、神様だもんな」
そう言ってマナラはリアカーの荷物の整理をする。
「私は少し作業してるけど、イゼアはどうする。荷物の整理とかあるならしてくればいいし」
「いえ、マナラさんが作業するなら、私もお手伝いします」
「ふーん、じゃあ」
マナラは課題を出した時とは違い、次々と魔動機をテーブルに載せていく。
「はい、これ」

と指で指し示す。イゼアはその中の一つ、魔動ランプを手に取った。中を開くと魔石などという高価なものは使われておらず、定期的に魔力を補給しなくてはならない初歩的な魔動機である。その定期的というのが、二年に一度ほどで、それを忘れて明かりがつかなくなると壊れたと勘違いする者が多く、時折イゼアも相談されていた。今思えば、それをセファインに見られていたのだろう。

イゼアは魔力を両手に込めて、二つ並んだ極に触れる。そこから魔力を流し込むのだ。それが終わると、封をしてマナラを見る。

「さすがに魔力が多いと手早くすむな。羨ましい」

「これぐらいしかできませんから」

少しでも魔法が使えるマナラが羨ましい。その上、飛び抜けて頭がいいのだ。イゼアは己が情けなく、ため息をついた。

「この調子で、その手の補給系を頑張れ。私がやると無駄に時間が掛かるんだ。今は数を減らすのが先決だ。減らせば余裕も出てくる。そうしないとゼイレム様から預かった魔動機が溜まる一方だ」

先ほど見た、素晴らしい魔動機。イゼアにはさっぱり分からなかったが、胸が躍る一品だった。

「直す時は見てていいですか？　きっとすごい物なんでしょうね」

「すごい物もあれば、しょうも無い物もある。半々かな。イゼアでも直せる物もあると思うから、好きに見るといいよ。お客さんから預かったものだったらともかく、ゼイレム様が持ってきた物は、修理の対価として頂いた物だからね」

「は、はい」

と返事をすると、マナラはイゼアの前に、さらに魔動機を積み、小さな山を作り上げた。

イゼアの頬を汗が伝う。簡単とはいえ、多い。さすがにこれは疲れそうだ。

「ちなみに、今までは人に頼んで魔力をわけてもらっていた。浮いた分と修理代はそっくりお前の物だ。稼ぎたければ張り切れ」

「は、はいっ」

小遣い程度がもらえればいいと思っていたイゼアは、破格の待遇に目を白黒させた。服が買える。頑張れば古着ではなく、新品が買える。兄のお古ではなく、女物の服が買える。髪の短さを隠せるような可愛い帽子も買える。これで男と間違えられる事がなくなる。アーソルドに男女と言われる事もなくなる。

「イゼア、明日は買い物に行くから、買いたい物があれば言え」

「買い物……ですか？　食料品はあるのに？」

「食い物買いに行くのが買い物ってわけじゃないだろ」

「マナラさんでも、普通に買い物するんですね。皆さんの様子を見ていると、普通に生活して

いるのが奇跡みたいな感じだったんで、少し驚きました」

マナラは手袋をはめた手で前髪を掻き上げながらイゼアを見た。機嫌を損ねてしまったようだ。

「滅多にしないが、たまにはするよ」

「そ、そうでよね」

食料品以外でもたまには買い物ぐらいしないと、困るはずだ。

「それに、お前の物を買い揃える必要があるだろう。道具も自分一人分しかないし、制服のある所にいたから私服も少ないだろう。もっといい作業着もいる。爆発しても平気なようなヤツ」

「……爆発ですか」

「ああ。万が一の事がある。一番いいのを買う」

「ええ!?」

一番いい作業着とは何だろう。確かに魔道士も危険な時は魔石が織り込まれたローブを着る。それの作業着版が、販売されているのだろうか。しかしマナラが身につけている中で特殊なのは、ポケットがたくさんあるエプロンぐらいに見えた。

「た、高いんじゃないですか？」

防御力が高くて、普通に見える服は値段が高くなる。性能が高いと、どうしても素材が分厚くなり、動きにくくなりがちだ。

「気にするな。預かると決めた以上、お前の身の回りの物を揃えるのは私の義務だ。それに、金なら余っている」
「で、でも……」
「そこの棚はゼイレム様が持ってきた物を並べてるんだがな」
マナラは古めかしい魔動機が並ぶ棚を指さす。
「それをどれか一つ売れば、アンセムの中心部に屋敷を持てる」
「……」
魔道都と呼ばれるこの都市は、他の都市と比べると地価も家賃も高い。そこに屋敷を持てるにはどれだけが必要か、貧乏人には縁が遠すぎて分からない。考えるだけでも恐ろしくなる。
「そういうのを、ゼイレム様が定期的にタダでくれるんだ。壊れているけど、壊れたままでも高く売れる物がたまに交じっている。直せばどれも高額な物だよ」
「……」
「イゼアも気に入られたみたいだから、きっともらえるようになる」
ゼイレムの行動が『感情』によるものか、神としての『本能』によるものなのか、イゼアには判断がつかなかったので、反論せずに次の魔動機へと手を伸ばした。
マナラという女の事を、この事実だけを話すとすれば、とんでもない悪女と世間は言うかもしれない。神をたぶらかして貢がせる、とんでもない悪女。

本人がこうだから誰も思わないだろうが、深く考えると、とにかく恐ろしかった。
イゼアはそれを振り払うため、深夜になるまで作業に没頭した。

翌朝、目を覚ました時、イゼアは自分がどこにいるのか分からなかった。
見慣れた淡い色の天井ではなく、木目が分かる、壁紙も貼られていない天井と壁が見えて、驚いた。そしてすぐに弟子入りした事を思い出して苦笑し、部屋を見回した。
現在はベッドとテーブルしかない殺風景な部屋だ。いつか自分の力で稼ぎ、この部屋程度は物で埋め尽くしてみたい。
まずは服だ。可愛らしい、女物の服。その次はそれを仕舞うためのクローゼット。その次は鏡。その次は、短い髪を誤魔化す帽子。その次は小さな頃から憧れていた、綺麗なお人形。その次は化粧品。
夢見ながら起き上がり、軽くストレッチをする。窓の外を見ると、実に憎らしいほど晴れやかな朝日が出ている。イゼアは太陽に呪われているから、太陽が大嫌いだった。
イゼアはカバンの中から兄のお古を取り出し、マナラを起こさないよう、そっと着替えた。
現状、これが一番ここに相応しい格好だ。

マナラはいつも数時間しか寝ていないらしく、昨夜はイゼアが無理に眠らせた。師よりも早く寝るなど出来ないと、根比べをして勝ち取った睡眠時間だ。絶対に起こさないよう、足音を殺して一階に下りる。

今日は今から朝食を作り、掃除をして、洗濯をする。家事を一通りやってから買い物に行き、マナラの手伝いをする。

そうしろと言われたわけではないが、そうするのが世話になっている者として最低限の礼儀である。それに弟子である以上、言われなくても師の世話をしなければならない。マナラのようなずぼらな人間が師であるのだから、出来る限りの事はしなければならない。

それがせめてもの恩返しとなる。

この家は、元々は店舗だった所らしく、人が生活するべき場所は二階にあり、一階には台所と風呂と工房がある。まずはリアカーに載せたままだった食料をどこかに片付けようと、音がしないよう、そっと工房に入り——もう仕事を始めているマナラと目が合った。

「おはよう」

イゼアは小さく息を吐いた。こうだから、彼女の知人達は彼女を心配するのである。

「おはようございます。本当に早いですね。何時間寝たんですか？」

「三時間ぐらいは寝たな。よく寝た」

イゼアが頑張った意味はあまりなかったようだ。

「せめて七時間寝てください健康のために！　長生き出来ませんよ！」
「でも気になって」
駄目だこの女は。
せめて四時間は寝て欲しいのに、それ以下の睡眠時間で、よく寝ていると言うのだ。先が思いやられた。
「……朝食作りますね」
「朝はあまり食べられない……」
「食べてください。フレークぐらいならミルクでかき込めますよね。あとは果物とか」
「……努力する」
約束したところで、イゼアは台所に向かう。最低限の食材は昨日もらった。卵やベーコンを焼いても食べてくれそうにないので、フレークだけという簡素な朝食の準備をする。さすがに魔動機技士の家だけあり、台所には水道がついている。魔石の力で溜めた水を吸い上げて使うのだ。浄化石と呼ばれる安価な魔石の一種を入れておけば、真夏でもそのまま飲める。さらに冷石を入れれば井戸水のような冷たさを保つ事が出来、逆に冬場は凍結を防いでくれる。風呂の場合は熱石を仕込めば、蛇口をひねると湯が出てくる。
理力の塔の本部にある客室には、これを利用した風呂とシャワーが全室完備されているらしい。学舎にしかいなかったイゼアは、それが本当なのかその目で確かめた事はない。

排水は下水道が通っていて、そこに流れてどこかで浄化されてから川に流されるため、アンセム周辺の水は大都市周辺であるにもかかわらず澄んでいると有名だ。

この家には風呂があるので、毎日お風呂にも入れるのが特に嬉しかった。実家の風呂やその設備は、イゼアが生まれる前に売られてしまってないので、公衆浴場に通っていた。そんな事を思い出しながら、林檎の皮を剥いて皿に盛り、フレークを盛った深皿にミルクを注ぐ。

「出来ましたよ。作業の手を止めて食べてください。手も洗ってくださいね」

「はいはい」

これを食べ終えたら、買い物だ。お古ではない自分の私物が増えるのは久しぶりで、とても嬉しかった。

「そういえば、身長とか靴のサイズとか自分で分かってる？　確かエムラドで測るよな？」

「え、はい。靴もですか？」

「鉄の塊みたいな重い物が落ちたら大変だろ。爆発よりもありがちで、痛いからね。表面だけの怪我なら私でも治せるけど、複雑骨折とかはねぇ」

「う……確かに痛そうですね。マナラさんは落とした事が？」

「キーオがな」

「先生、そんな目にあってるのに、まだあんなに無防備なんですか」

「偶然でもない限りはどうにかなったりしないからね。嫌味な奴だよ。あの時はざまあみろっ

て笑ったね！」

セファインは言っていた。

マナラとセファインは、イゼアとアーソルドに似ていると。

この劣等感などは、確かに似ている部分があった。

「おやマナラ。可愛い男の子を連れてどうしたんだい？」

初めて顔を合わせた眼鏡の老人に、いきなり男扱いされてイゼアは落ち込んだ。

「弟子で女の子だ」

「ああ……よく見れば線が細いね。どちらにしても綺麗な子だ。将来は美人になるな。お前さんみたいに落ちぶれなきゃいいのにな……」

今さら褒められても嬉しくない。本音は男の子みたいな女の子、なのだから。しかも彼の遠い目は、マナラの過去を思い出しているように見えた。イゼアに重ね合わせているのだろうか。

男の子と間違えられて少しばかり落ち込んだが、そろそろ慣れてしまったのか、すぐに立ち直り、周囲の変な道具に集中する事にした。用途不明の物で溢れている不思議な道具屋だ。イゼアはこのような雰囲気の古めかしい店に憧れていたので、見る物全てに軽い興奮を覚えた。

魔動機も多いが、魔具が多い。魔具は機械を使わず、術式が刻まれ、魔力を与えられただけなので、魔動機以上に見た目では用途が分からない。

数々の商品の中に、いかにも子供向けという雰囲気の可愛らしい小物がいくつかあり、イゼアは興味を持った。

「これ可愛い」

そう呟いて、イゼアは可愛らしい陶器のウサギがついた箱に手を伸ばす。宝石箱かオルゴールの類似品だと思って手に取ろうとしたのだが、触れた瞬間指先が痺れ、変な声を上げて反射的に手を引いていた。

「ああ、それは持ち主以外が触れると痺れるようになっているから危ないよ」

「はやぐいっでぐだざい」

たったあれだけの事なのに舌が回らないし上手く動けなかった。倒れないのがせめてもの救いだ。

それを見たマナラが、呆れた様子でイゼアを椅子に座らせた。恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

「子供の玩具だからいいものの、ここの商品は下手に触ると痛い目を見るからな」

マナラは一番最初に必要だった忠告を今頃して、老人へと向き直る。イゼアはふてくされながら、商品に触れぬよう椅子に座ってそれを眺めた。もしも立ち上がって何かに触れて問題を

起こしたら、また笑われるだろう。

「この子の作業用品を用意して欲しいんだ。私と同じでいい。これはリスト。サイズも書いてある」

「ああ……この工具は取り寄せだからしばらくかかるよ。服のサイズはこれよりも少し大きめに作っておけばいいね。子供なんてあっという間に成長する。その子は背が高くなるかもしれないが、どうする？」

「そうだな。少し大きめで。ズボンの裾は折ればいいし、どう成長するか分からないからね」

「了解。ちょっと待ってな。今ある物は今渡すよ」

老人はちらとイゼアを見て、それから奥へと行ってしまう。

イゼアはマナラと二人でしばし待つ。痺れも取れて少し退屈だったが、しかし会話もない。二人の間には盛り上がるような話題がないのだ。それでも長い沈黙に耐えきれなくなり、イゼアは黙って立っている師へと声をかけた。

「マナラさん、どうしてこんなところに依頼に？　どう見ても道具屋とか、骨董品屋さんの類ですし、仕立ては専門外だと思いますけど」

「材料が特殊なんだ。他で買うと馬鹿高い。ここなら一発でエプロンから靴から工具まで揃えてくれるから、便利でね」

「そっか」

と、そこで会話が切れた。
出会って間もない赤の他人と、そうそう長く話など続くはずがない。彼女もおしゃべりには見えないし、これが当たり前なのだ。
イゼアは思い直し、静かな時を静かに過ごす。老人が出てくるまでの、ほんの短い間だけ。きっとこれから、二人の間には沈黙が多くなるだろう。しかし、きっと嫌な沈黙ではない。
「手袋だけはあったよ」
何かの革の手袋だ。受け取って手にはめてみると、細かい作業も出来そうなほど、手に合った。
「他は在庫がないから、注文しておくよ。あと、これサンプルにもらったから持ってきな。それ以外に何か用はないのかい」
老人はサンプルだという布を畳んでカウンターに置いて問う。
「ない。代金は？」
「今度でいいよ。診察の帰りにでも寄りな」
「そう、また来る。行くよ、イゼア」
イゼアは老人から荷物を受け取り、頭を下げた。
「はい。あ、おじいさん、ありがとうございます」
「その呼ばれ方は好きじゃないね。私はモロだ。覚えておきな」

「え、す、すみませんっ」
イゼアは慌ててもう一度頭を下げた。
「何してるんだ、行くよ」
「はいっ」
イゼアは慌ててマナラを追って店を出る。振り返ると、モロはカウンターに肘をついてひらひらと手を振っていたので、もう一度頭を下げた。
注文が終わったので、あとは日用品の買い出しだ。ついでに調味料なども買わなければならない。マナラは料理など塩と砂糖と胡椒さえあればいいと思っているのか、他に調味料がないのだ。ハーブも欲しいので種か苗が必要だ。小さいながらも花壇らしきものがあり、丈夫な植物なら土を変えなくても育ちそうだった。
服は欲しかったが、買う物がたくさんあるので、後回しになりそうだ。まだ我が儘を言える立場ではないし、こうして気にかけてもらえるだけで、世間の弟子より優遇されているのだ。成長したら、必然的に必要になるので今は言うべき時ではない。
あれほど高い物をぽんと買ってもらい、日用品が揃わないのに、服が欲しいなどとさすがに言えない。
ふっと息を吐いて荷物を持ち直し、イゼアは先の事を考える。
夕飯をどうしようかと。

「マナラさんは、夕飯は何が食べたいですか？」
「別に何でも」
「じゃあ、お肉を買って食べましょう。マナラさん、肌が乾燥していますから、もっと脂をとらないとお肌に悪いです」
　取りすぎても悪いが、取らないのも逆によくない。マナラには、ゆっくりと普通の食生活に戻ってもらう必要がある。
「食べやすいように、チキンスープにしましょう。パンと野菜はあるから、肉と調味料を買えばいいですね」
「好きにしてくれ」
「じゃあ、お肉屋さんに寄りましょう。この先にありますよね」
　イゼアは商店街で、保存しておける程度の数種類の肉と、いくつかスパイスを購入した。帰ったらきっとマナラは仕事に戻るだろうから、イゼアはさっさと調理をすませなければならない。手間暇かけて味の追求をする必要はない。どれだけ調理時間を短縮させ、健康的に過ごすかが大切だ。
　マナラは不摂生で代謝が下がっているだろうから、いきなり高カロリーのものを食べさせると太りすぎてしまってそれはそれで良くないだろう。基本はヘルシーで栄養価の高い料理を作らなければならない。毎日同じ物を出しても、不味くても、文句も言わずに食べそうなのでプ

レッシャーはまったく感じない。

セファインのためにも、娼婦達のためにも、何よりもイゼア自身のためにも、マナラ健全化計画を完遂しなければならない。そうでないと、皆から弟子のイゼアが悪いと思われてしまう。そして彼女が改善しない場合、イゼアも自然とそうなっていきそうで怖い。

明日の夕食のメニューも考えながら、他にどこか寄るべき店がないかと考えながら買い物をして帰路についた。女だけでは入りたくないような裏路地を抜けて街外れの工房に辿り着く。なんでもこの付近までくると、マナラを襲うほど馬鹿な住民は既にいないらしく、気楽に出歩いているそうだ。

「ん？」

一瞬だけ窓から人影が見え、マナラは走り寄り乱暴にドアを開く。

彼女の背後から覗き込むと、つい昨日会ったばかりの男、具神ゼイレムがぼーっと部屋を歩き回っていた。

「なんだゼイレム様か。うろうろしているから泥棒かと思いましたよ」

こうもちょくちょくと現れると、神様としてのありがたみがなくなるのではないだろうかと思いながら、マナラに続いて中に入る。

神とは存在するだけが価値と言われるただの『何か』の化身である。『動けば迷惑、親切は災い』という言葉は、神の事を差した昔の人の名言らしい。

「どうされたんです。昨日の今日でいらっしゃるなんて珍しい」
彼はマナラの存在を確認すると一つ頷き、作業台の上に置かれた木箱を持って近づいてくる。てっきりマナラに用だと思えば、なぜかイゼアの方へと近づいてきた。
「やる」
そう言って、彼は木箱を押しつける。慌てて荷物を床において受け取り中を見ると、なんと包丁がセットで入っていた。この家にはペティナイフと牛刀しかなかったため、ありがたいと言えばありがたい。
「な……なぜこんなものを」
「よく食べる。人間、いい」
人間はよく食べる方がいい。マナラは食べなさ過ぎだから、食べさせろ。そう言いたいのだろう。
マナラは心を封じられた神にまで心配されるようなレベルの生活をしているのだと愕然となった。
「は……はは……頑張ります」
彼は包丁を受け取ったイゼアを見て、ほんの少しだけ満足げな態度で、一瞬にして消えてしまった。
神様から包丁をもらった女など、きっとイゼア以外に存在しないに違いない。

ほんの少し複雑な気持ちで、包丁を置きにキッチンへと向かった。

## 4章　招かれざる客　目で見えぬモノ

イゼアはもらった包丁を眺めた。

一通りの調理用の刃物が揃っているので、これから役に立ちそうだ。どれも実家にあった物よりも素晴らしい包丁である。

チキンを切ってみたのだが、抵抗感など微塵も感じないほど簡単に切れた。人間に斬りつけたら、さくっと簡単に斬れそうだ。調理よりも人殺しに使った方がいいのではとすら思う。

「普通の包丁じゃないんだろぉなぁ」

調理台を包丁で突いてみたが、これはまったく傷一つつかない。目的の物だけを確実に切る能力を持っているのだ。

埃を被っていた鍋を綺麗に洗って作ったスープは、もうすぐ出来る。パンはパン屋に届けてもらっているし、サラダも作った。マナラの食事としては、これだけ腹に入れさせれば上出来だろう。明日のためにスープは多めに作ってある。明日になれば野菜が溶けてもっと美味しくなる。

まずは破壊された味覚を取り戻すべく、水をよく飲ませ、薄味で美味しい物だけ食べさせるのだ。イゼアの家は使用人を雇えない生活水準なので、食事は母が作りそれを手伝っていたので、他の貴族の令嬢と違い何でも出来る。

「でも……なんだか宝の持ち腐れだなぁ」

イゼアは料理人ではない。ただ家庭料理を作る事が出来るだけで、プロの腕にはほど遠い。味付けとかではなく、見栄えを整える能力が低い。

先の事を考えると、普通の包丁でよかったのにとも思う。しかし普通なら切るのに苦労しそうな大きな肉の塊も、真っ二つにできそうなので便利と言えば便利だ。すっぱりと自分の指を切らないかだけが心配なので、慎重に使わなければならないが、ひょっとしたら指は切れないかもしれない。もちろんそれを試す度胸はない。

調理器具を洗い、頃合いを見て火を止める。水だけでも感動ものなのに、かまども魔石の力で火を発する物だ。こんなに楽でいいのかと思うが、設置すれば半永久的に使える物なので、無駄とも言い切れない。きっと壊れた物を修理したのだろう。しかし、ずぼらな彼女がこんな物を設置した理由が理解できず——すぐに思い至って呟いた。

「……薪を燃やすなんて、面倒だもんね」

マナラもさすがに冬場は温かい物を飲みたいはずだし、肉は食べていたのだ。

肉はあるが火をおこすのが面倒となると、マナラならそのまま食べないで腐らせてしまいそ

うだ。しかしこれがあれば、渋々肉を焼くに違いない。それでも滅多に使っていなかっただろうが、ジャンク品を買い取って修理してみようと考えてもおかしくはない。手を抜くためなら彼女は努力しそうな人間に見える。

スープはタマネギが溶けていい感じだ。味を見るが、やや薄めだがダシが出ていて美味しい。マナラにはこれでいい。

「マナラさん、夕飯出来ましたよ！」

イゼアはスープ皿片手にマナラに声をかけ、スープをよそうと、パンとサラダをトレイに載せて、すぐ隣のダイニングへと運ぶ。マナラはなかなか作業台から離れたがらないが、懇々と説き伏せていたからか、一度呼んだだけで移動してくれていた。工房で食べてもいいのだが、もしもスープをこぼして壊したら大変だ。水気厳禁の魔動機も多い。壊れるだけならともかく、火を噴く事もあるらしい。

のろのろとやってくるマナラに笑顔を向けて、イゼアは椅子を引いた。

「たっぷりありますから、たんと食べてください」

どうせかき込んで食べるだけだろうが、今は食べてもらえるだけでいい。

マナラがスプーンを手にした時、玄関のドアが乱暴に打ち鳴らされた。

イゼアは料理用のエプロンを外しながら玄関に向かい、ドアを開けて後悔した。

乱暴者の正体は、昨日会ったばかりのアーソルドだった。背後にはセファインと、さらにも

う一人。

ある意味有名人の、ヤバイ系魔道士と言われているアラン＝トールが立っていた。

なぜ彼がヤバイ系なのかというと、死霊術士なのだ。死霊術で貴族の地位を手に入れた不思議な一族で、死霊を友とし、死霊に恋をするような一族である。塔の中でも近づきたくない魔道士上位に食い込んでいる。

実害はないが、存在が怖いのだ。

しかも、どういうわけかイゼアはやけに気に入られていた。いや、どういうわけもこういうわけもない。理由は一つ。

「元気そうだな」

指をくわえて悔しげに言う彼は、まるで『早く死んで欲しい』と言っているようであった。

彼は出会った時から『死んだら死体をくれ』とか『きっと偉大な悪魔にしてみせる』とか言い募った。端から見れば熱心に口説かれているように見えるらしいが、好奇心から近づいて会話の内容を聞いて逃げ出す者がかなりいた。もちろん誰も助けてくれなかった。

初めの頃は、端から見れば馴れ馴れしいアランの態度に荒れたアーソルドも、アランが熱心にイゼアに囁く言葉の内容を聞いて、静かに後ずさりしていったものだ。

だから死霊術という魔道士から見ても得体の知れない術を得意とするアランを、アーソルドは苦手としていたはずだった。

「な……なんでアーソルド様……彼と？」
「愛用していた魔動機が壊れたそうだ」
「え、でも、わざわざ揃って来なくても……」
アーソルドの背後でセファインが笑っている。彼はきっと、マナラに会いたかったのだろう。しかしアーソルドがなぜこんな時間にわざわざ訪ねてくるのか理解できなかった。まだ連れ帰ることを諦めていないのかもしれない。
「ああ、いい匂いがする」
セファインは家の中を見て、くんくんと匂いを嗅いだ。
「今、夕飯を食べようとしていたんです」
「マナラも？」
「当然です」
「確認していいか？」
「……どこまで信用がないんですか」
「信用してたら、もっと痩せるぞ、あいつ。人として必要な欲求がないんだ」
「はい、そうですね」
信用したら負けと、心に刻んだ。あれだけ親身にしてくれる娼婦達を裏切っているのだ。弟子も裏切るだろう。今こうして目を離している隙に、全部食べずに作業に戻っているかもしれ

ない。

「どうぞこちらに」

イゼアはきびすを返しダイニングへと向かう。工房の横を通りマナラがいない事を確認して、奥にあるダイニングに入った。

マナラは無気力にスープでふやけたパンを咀嚼していた。

「いや、せっかく作ってもらったのに、辛気くさい顔して食うなよ」

マナラの食べる姿を見て、セファインが腰に手を当てて言った。

「何だ。先日来たばかりだろう。私は忙しい」

「そう言わずに、こいつの探知機を直してやってくれよ」

「探知機？」

マナラは興味を示し、手を出した。渡された箱形の魔動機を見ると、女の子が甘い物を見た時のように目を輝かせた。

「珍しい、死神の紋章があるってことは、死者に関する物か」

と呟いて蓋を開け始めた。

「微量な霊気を探知するための道具で、アーライン家に伝わる魔動機だ」

「アーライン。死霊術師の？」

「そうだ。こいつはアラン＝トール。トールはアーラインの分家だ」

「ふぅん」
マナラは工具を取り出しさらに進めようとしたので、イゼアはその工具を取り上げた。イゼアも気にはなったが、我慢できないほどではない。
「食べてからです」
「……」
マナラは無言で魔動機を脇に避けて食べるのを再開した。その姿を見て、セファインの腹が鳴る。
男子生徒二人の視線がセファインに突き刺さった。
「あの……先生、お夕飯まだなら食べていきますか？」
「いいのか？」
「まあ、ただそこに立たれても、食べにくいので」
セファインが遠慮なく工房の隅に重ねてあった椅子を引っ張ってきたから、イゼアはキッチンに向かった。まだ温かいスープをよそい、パンとジャムとピクルスを運ぶ。ピクルスは娼館の料理人にもらった物らしい。簡単につまめる漬け物類は、マナラの好物だという。
「イゼアはいい嫁さんになるなぁ。マナラと違って」
「はいはい。マナラさんに比べれば、深窓のご令嬢の方がずっとマシなんじゃないですか。彼女たちはやり方を知らないだけですから」

「はは、そうだな。追い込まれれば普通はするからな」
マナラは本当に、まったくしない。飢えてもしない。それが慣れてしまう程度に、何もしない。イゼアには絶対に耐えられない生活だ。
ほがらかに笑いながらスープを飲むセファインと、胡散臭そうに中の野菜をつつくアーソルドに、無言で食べるアラン。
「嫌なら食べないでください。明日食べます」
「こんな味気ない食事をしているのか。お前ならもっとマシな物が作れるだろう。僕のために料理を習っていたんだから、僕の口に合わないような物を作るな。僕の趣味が疑われる」
アーソルドが自己中心的な考えを押し付けながら、不服そうにスプーンを置いた。
「無茶苦茶な言いがかりを付けないでください。だいたいこれは、マナラさんのための料理だから、アーソルド様に合わせる必要なんてないじゃないですか。このスープは栄養のバランスがいいんです。ダイエット食ですよ」
「薄い身体を薄くしてどうする」
「ちょ、薄いとかっ！　これはマナラさんを太らせるための食事です！　薄くなりません！」
適度な体重を保つというのは、肥えた人間が痩せるだけではなく、痩せた人間が適度に太る事も意味するのだ。
「嫌なら食べないでください。マナラさんのための献立しか考えていないから、食べ盛りの男

性は外食に行くのが一番ですよ」
　自分はこれで十分だと、パンを咀嚼しながら強く思う。金持ちのお貴族様が、こんな所に来るのが悪いのだ。
「マナラさんは、そんな物をちらちら見てないで先に食べてください」
「そ、そんな物。飯の種だぞ」
　マナラは唇を尖らせて抗議した。
「健康第一です。マナラさんに何かあったら、弟子の私が路頭に迷うんですからね。健康管理はしっかりさせていただきます」
　マナラはため息をついてスープを飲む。疎ましいと思われようと、これだけは譲ってはならない。
「ウィーゲム、なんて頼もしいんだ。ああ、お前だけが頼りだ。これで俺はマナラがいつ餓死か過労死する心配をしなくていいんだな。夢のようだ。もう悪夢を見なくてすむんだな」
「餓死って……心配しすぎですよ」
　そんな事で夢に見るまでとは、彼はどれだけマナラを心配して生きているのだろうか。
「何言ってるんだ。一人暮らしで栄養失調で倒れて、三日も誰も来なかったら餓死できるぞ」
「……あぁ」
　マナラの一人暮らしは、実はとても危険と隣り合わせだったようだ。だからセファインと娼

婦達が交互に見に来ていたのだ。仕事を頼むというのは口実で、生きているかの確認をしに来ていたに違いない。仕事の事でないと、マナラは忙しさを理由にすぐに追い出すだろう。

「倒れていたと思ったら眠ってただけってのがあったけどな。こいつの場合は胆が冷える。見に来ようと思ってた時用事があって先延ばしにした日の夜なんて、俺は毎回悪夢にうなされるんだ。俺が行っていれば助かったのにって……。ああ、なんで俺はこんなめんどくさい女と幼馴染みなんだ……」

「先生……苦労を」

離れているから心配になるのだ。彼のそれが恋心なのか、それともただ友人を心配しているだけなのか、イゼアには判断がつかない。

しかし彼が本気で心配しているのは確かだ。誰だってこんな知り合いがいたら、人として心配するだろう。貧しくても心配してパンを持ってきそうだ。

「ああ、これで俺は悪夢にうなされる事はなくなるんだな。神様ありがとう！」

そんな事で神に激烈感謝する姿のセファインを見ていたら、イゼアはなぜだかとても胸が切なくなってきた。脳裏に浮かんだのは、ホイホイ現れてありがたみのないゼイレムの姿だ。

食事を終えるとマナラは探知機の中身を調べ始めた。普段はやる気のないひょうひょうとした人物だが、仕事となれば目つきが変わる。真剣なその目を見れば、彼女が生半可な気持ちでこの仕事をしているとは誰も思わない。職人の目をした彼女は、自然と唇がつり上がる。

「面白い。初めて見る構造だ。無駄がない。イゼア、いいお手本になる。見てみろ」
誘われるままイゼアは覗き込んだ。
無駄がないというのは、引っかけがないという意味だ。つまりは秘密を守るための仕掛けが無く、とても素直に作られているという事である。これなら、素人に毛が生えた知識しかないイゼアでも、目で追う事が出来た。もちろん、理解など出来ない。素直だが、高度な魔動機である。
「ここが探知した特定方向の魔力を増殖させる。ここが複数の存在が発する魔力の特性を見分け、ここでその方角を決定する。そしてここで持ち主へと体感的に伝えるんだ。ここまでのものが、これほどあからさまに作られるのは珍しい。いい物を見た」
説明をしてもらって、分からないなりにイゼアは頷く。いつかこれを見ただけで理解出来るようになるのだろうか。イゼアに分かるのは、これの中身がずいぶんと汚れている事だけである。汚れを隅々まで綺麗に落としたい衝動に駆られた。
「アーラインの技士が作った物だ。ただ霊気を探知するだけで、隠すような重要な技術ではないからな」
「そうか？　ここの持ち手の部分はかなり高度な技術なんだがなぁ。まあ本人が言うんならいいけどな。わざわざ複雑にして隠したがるのは、技術者のいやらしさの表れだしな」
マナラはドライバーに似た工具をくるりと回し、本格的に作業に没頭し始めたので、アラン

は手持ち無沙汰になり、工房をうろうろし始めた。落ち着かないのか、時折びくりと振り返っては首を傾げる。気にしないでおこうと思うが、次第に彼の行動は怪しくなっていく。これが、皆に恐れられる理由だ。彼の何気ない日常が、周囲に不安と恐怖を与えるのである。

その様子に不安を覚えたアーソルドは彼に問う。

「そわそわしてどうした？　ま、まさか何かいるのか？」

アーソルドが周囲を見回して怯えた。気が大きいが、胆は小さいのだ。特にオカルト系は苦手らしく、まだ幼い頃、友人に肝試しに誘われた時は、呼ばれてもいなかったイゼアを連れ出し、イゼアが怖いだろうと決めつけて、守るふりをして盾にされた事もある。

「……ここは、どういうわけか太陽神の気配がある。イゼアとは別の太陽神の気配だ」

「太陽神？」

アーソルドが思い切り顔を顰め、うろんな物を見る目を向けた。セファインがひくりと頬を引きつらせ、信じられないとばかりにアランを凝視した。マナラでさえ作業を中断して彼を見る。

「よく分かったな。さっきまで、具神様が来ていた。太陽神様の配下で、力の干渉を受けているはずだから、気配が似ていてもおかしくはないが……太陽神の気配を知っているのか？」

「太陽神は知らないが、気配ぐらいは分かる。寒気がする。輝く存在は苦手だ」

生きているくせに、神様で寒気なのかと、イゼアは少し引いた目線で彼を見てから、彼を気にしないためにも、マナラがバラしたパーツを雑巾で拭いた。手伝わないと、マナラの睡眠時

間が減るのだ。それに変わった形の魔動機のパーツに触れるのは楽しい。部屋は可愛くしたいが、このようなパーツも飾りたい気持ちも生まれた。

これからゼイレムが持ってきた魔動機の中身をいくらでも見られると思うと、ため息が漏れる。

「すぐに直りそうか」

アランの声でイゼアは現実に引き戻された。

「そんなもの、時間のある日に取りに来ればいいだろう」

焦るアランに、アーソルドは彼の気持ちを考えずに言う。

「そんな、困る。これはなくてはならない大切な物なんだ」

冷たい言い方をしたアーソルドに対して、アランは心外だと言わんばかりに、詰め寄った。

その様子にアーソルドはますます困惑する。

「なぁ、エムラドにいるのに、こんな物がなくて何に困るんだ？　死霊術の授業があるならともかく」

「とにかく困る。素晴らしい出会いを逃がしたらどうするんだ」

「せめて生身の人間との出会いを求めろよ」

一般人には理解不能な理由でせかすアランに、聞けば聞くほどどうでもよくなってきたアーソルド。

アランはともかく、時間がある時でいいと思っているアーソルドは、なぜこんな夕食時に来

たのだろうかとイゼアは訝しむ。それほど学舎から出るのが好きだった記憶はない。知らないだけで、夜遊びぐらいしていたかもしれないが、教師同伴でこんな所に来たがるような理由はないはずだ。

「イゼア、少し魔力を」

「は、はい」

マナラに呼ばれて、イゼアはパーツを置いて駆け寄った。さんざん繰り返しやったので、魔力をどこに吹き込めばいいのか即座に分かるようになった。

「ゴミを吹き飛ばせるぐらい強くな」

「はい」

言われた通り強く魔力を流す。やりようによってはこれで攻撃できるほどの威力があり、調節は難しい。しかしイゼアが出来る唯一の魔法っぽい事がこれである。

マナラがいいと言うまで、だんだん力を強めつつ魔力を放つ。イゼアの短い髪がなびき、唇を引き結んで力を強めすぎないように力を込める。

「そろそろいいか」

マナラの言葉のまま、イゼアは魔力の放出を止めた。マナラは魔動機を持ち上げふっと息を吹きかける。一定の魔力を放ち続けるだけの魔石を手にして、魔力の流れを見る。魔力の少ない彼女は、魔石を使わないと検査が出来ないのだ。それから少し中身をいじり、バランスを整

えてからイゼアが綺麗にしたパーツを元に戻してを繰り返し、最後のパーツを組み込んで魔力の流れを見終えると、アランに返した。

「少し試してみろ。私は霊感ないから試しても正常か分からん」

「なるほど」

用途のよく分からない魔動機は、こういったよく分からない要素が組み込まれている場合が多い。今回の場合は死神信仰が分かるデザインなので、何に使われるかの予想は立てやすいが、何も特徴のないシンプルなデザインだと、用途特定が難しいのだ。直ったはずだが何に使うか分からない魔動機の、専用の棚が出来るほど、そういった用途不明の魔動機は多い。

アランは喜びをまき散らしながら、蓋が開いた魔動機を手にして外に飛び出る。皆は彼の後を追い、闇に支配された外に出た。光源は夜空の月と星々と、家々から漏れるランプの光と、離れた所にぽつんとある街灯だけだ。

「家の中にはいないのか？」

「いない。太陽神は死神様の対の存在。そんな気配がある場所に居着く死霊などいるはずがない。生の気配が強すぎる」

この家の中には怪しい存在はいないと判明し、イゼアは少し嬉しくなり、マナラもどこかほっとしている。イゼアはどちらかと言えば平気な方だったが、出ないに越した事はない。

具神ゼイレムが低級霊除けになっていて、悪霊の寄りつけない素晴らしく澄んだ家だと判明

して、ここが前よりも少し優良物件な気がした。アランが喜ばない家こそ、まともな人間にとっては住みよい場所である。

アランが喜んで走り出した時、イゼアは強くそう感じた。

「よく反応するな。前よりも精度がよくなった」

「え……そんなに反応するほどいるのか？」

さすがのマナラも、慣れていないため、身をすくめて周囲を見回した。家の中の安全は保証されたが、家のすぐ近くには気配があると思うと不気味さは残る。彼が見ているアパートの住人が、少し不憫だった。知らない方が幸せなこともあるため、実害がない限りはそっとしておくべきだろう。

「そんなにはいない。ただ反応がよくなった。これなら死体が埋まっている正確な位置も判明する」

「し、した……」

マナラは動揺し、両手で頬を叩いて自分を落ち着かせた。慣れてくるとこのぐらいでは驚かなくなるが、慣れないうちは当然の反応だ。

「まあ、死体云々はともかく、それが元来の精度だよ。アランだっけ？　大切ならたまには中の物理的な掃除をしてやれ。蓋を開けて息を吹きかけて埃を飛ばす程度でもだいぶ違う。汚れが魔力の円滑な動きを妨げる事もあるんだ。魔力が停滞し始めると、汚れを巻き込んでこびり

つき、強い魔力で押し流さないとどうしようもなくなる」
アランは魔動機を見つめて頷いた。彼はきっと大切に扱ってくれるだろう。
「よかったなアラン」
「ああ。連れてきてくれてありがとう。あの老人に任せるべきか悩みすぎて夜も眠れなかった」
アーソルドの言葉にこくこく頷き、頬ずりする。
どうやらアランは、アーソルドがそうと気づくぐらい狼狽していたようだ。皆がアランを嫌がるから、アーソルドはアランを気にかけるように頼まれている。並の生徒なら孤立していても問題はないが、彼の場合は突拍子もない事をしでかすため、誰かが監視している必要があるのだ。
死霊探知機が直った時の反応とは思えないほど無邪気に喜ぶアランを見て、マナラはやや引きながらも、どこか満足げな顔だった。客が喜ぶ姿というのは彼女でさえも嬉しいのだ。
「じゃあ蓋をするから貸して」
マナラは寒くもないのに、腕をさすりながら言う。アランが近づくとやや腰が引けていたが、顔には笑みを貼り付けて受け取った。
「マナラでも幽霊は苦手なのか……」
セファインが及び腰のマナラを見て呟き、それを聞いたアーソルドが腕を組んで不愉快そうに口を挟む。

「得意な人間の方が少ないと思うぞ。それを人に押しつける教師とか最悪だと思わないか？」
「色んな人間と付き合うのはいい事だぞ。アーソルドは視野が狭いしな。人の気持ちも理解できるようになるだろうと思ったんだよ」
マナラはセファインとアーソルドをちらりと横目で見ながら、魔動機の蓋をしてアランに返す。
「代金はそうだな……イゼアの服でも買ってやってくれ」
「服を？」
「ああ。なんか男物しか持ってないみたいだからさ。私じゃよく分からないし、この周辺は若い子の服があまり売ってないし、古着屋が閉店していたんだ」
イゼアの服や日用品の事を忘れていたのではなくて、近所にないから買わなかったようだ。気にかけてもらえている事に、イゼアは気恥ずかしさを覚えた。両親ですら、こんな気遣いをしてくれた事はない。
「いや、お金だけもらえれば自分で買うんで。アランと一緒に買い物なんて行ったら、怯えられて買い物になりません」
「そこまでなのか。じゃ、まあ服一着分ぐらいでいいや」
アランはポケットから財布を取り出し、貨幣を一枚イゼアの手に置いた。
金貨だった。
「金持ちめ、金持ちめ、金持ちめっ」

イゼアは金貨をポケットに仕舞い込みつつ、格差というものを痛感した。
「まあ、ほどほどの服を買ったらそれじゃ足りないからな」
「どんなほどほどですか。これだから金持ちは」
アーソルドとの金銭感覚の差も実感し、金持ち二人を睨み付けた。いや、セファインも金持ちの息子だ。
「何にしても、これで解決したな。じゃあさっさと帰れ」
マナラは笑顔すら浮かべて容赦なく言った。
「マナラ、お前は客をもてなす気はないのか」
いつものように追い払われ、セファインは不服そうに言う。
「ない。そんな暇があるなら私は寝る」
その瞬間、セファインは軽い電撃を受けたような顔をしたかと思うと、家の中に走って戻り、生徒二人の荷物を抱えて勢いよく出てきた。
「お前らとっとと帰るぞっ！　マナラが寝るのを邪魔するな！」
よほどマナラが寝ると言い出したのが珍しいのか、セファインは興奮気味に叫んで二人を追いやる。
「ちょ、待て。まだ僕はイゼアに」
「いいから帰るぞ。もう遅いんだ、学生は寝ろっ！」

あまりの剣幕に、我が道を行く二人も戸惑いながら素直に従っていた。

結局、彼がマナラをどう見ているのか、よく分からなかった。少なくとも、世間ではあれを『恋』とは呼ばないだろう。では何かと問われると悩む。

マナラはどこまでも不思議な女性だ。

彼女がセファインをどう思っているのか聞いてみたかったが、三大欲求が全て見当たらないから、それ以前の問題かもしれない。

「さて、もう一仕事するか」

「そうですね」

イゼアの方も、現実はこんなものだ。アーソルドのせいでろくな恋もした事がないので、マナラの事は言えない。

手つかずの魔動機は山のようにある。睡眠時間確保のためにも、こんな事をしている暇はないのだ。

今はそんな事よりも、自立するための力を手に入れる事が肝心である。

なのに、それから度々、アランとアーソルドが遊びに来るようになった。

余程暇なのか、それともイゼアを連れ戻そうとすることをまだ諦めていないのかもしれない。

迷惑な話だ。

# 5章　動けば迷惑

早朝、朝日が少し顔を出したほどの時間だ。
イゼアが一階に下りて工房に足を踏み入れると、椅子にふんぞり返って座っている知らない男と目が合った。
突然、なぜだか首の後ろが痛くなり、我慢できず鎮痛剤を飲もうと思って、薬を取りに来て、彼に遭遇したのだ。
普通ならここで大騒ぎして当然なのだが、イゼアはまたかと思う程度に、ここに来てからの一ヶ月で、こういう事には慣れてしまった。
彼は非常識なほど顔立ちが整っていて、不思議な光彩の長い金色の髪を無造作に背中に流し、端厳でいて、光り輝いているのだ。神々しいとはこの事である。しかも下々を見下すかのような上から目線。これで人間だったら神を呪うしかない。いや、目の前の男が神かもしれないのに、呪うも何もないが。
少なくとも、これを泥棒や変質者の類だと思える人間はあまりいないだろう。

「マナラさんなら、寝たばかりだと思うので昼過ぎにもう一度来てください」

神様かもしれないと思った相手に対して失礼だが、女性の家にこんな早朝から来る方が悪いのだ。何よりも、まだ本人が名乗っていないため、本当に神かどうかも分からない以上、畏まる必要はない。神とは自分の配下でもなければ、言葉遣いには頓着しないと本に載っていた。ごく普通に話して構わないのだ。神はそんな事は気にしない。言葉よりも大切なのは態度と心である。

マナラには変な知り合いが多いので、気は進まなかったが、アーソルドに頼み込んで本を借りて勉強した。

「待て、と？」

彼は顔を顰めた。マナラが寝ていると言っているのに、むっとしたのだ。その反応にイゼアは驚いた。

今までマナラの睡眠を邪魔しようという知り合いは誰一人としていなかったのだ。

「……あなた、マナラさんの知り合いじゃありませんね。どこでここを知ったかは知りませんが、忙しいので修理は来週になりますよ」

「修理？」

彼は視線を巡らせ、転がる壊れた魔動機の山を見る。

「このがらくたを修理しているのか」

「そうですよ。ここは魔動機専門の修理屋です。修理が目当てでないのなら、マナラさんの知り合いでもないのに一体何をしに来たんですか？」

彼はふんと鼻を鳴らし、見下している事を隠そうともしない嫌な目でイゼアを見つめる。

「無礼な小僧だ」

「……私は女です」

もうそろそろ、開き直った方がいいのだろうか。これではドレスを着ても女装少年に見えるのではないだろうか。ひょっとしたら今まで誰も言わなかっただけで、髪が長い時から男の子のようだと思われていたのだろうかと、打ち震える。

きっとそうに違いない。そうでなければ、ただ髪を切っただけでこの扱いはないだろう。

イゼアは自分でも、なんだか凛々しい顔立ちだなぁと、鏡と向き合うと思う時がある。それでも男臭さはないと思うが、人はそう思わないらしい。

「……お前がゼイレムの女か？」

男は不審げな目をイゼアに向ける。

ゼイレムと言った。具神の名を出した。やはり神族の関係者なのだ。

呼び捨てという事は、同等以上の神だ。ゼイレムは落ちぶれたとはいえ二級神である。同格の神の数も百はいないはずだ。上にいる一級神はたった六神しかいない。

「……貴方は神様……なんですか？」

「私が聞いている」
「違いますよ。ゼイレム様とは何度か会っただけです。ゼイレム様は私の師にいつも壊れた物を直すようにと、色々持ってこられるので」
「それではない。あれが女に『物』を贈ったと聞いたが」
「贈っ……ああ、あの包丁」
彼女の呟きに、男は疑うように目を細めた。神様に贈られるなどもっと素晴らしい物だと思うのが普通だ。それは神様にも言えるのか、彼は間違いなくイゼアの言葉を疑っていた。
「私の師は放置すると何も食べない方だから、健康管理をしろという意味で頂きました。包丁セットを」
「……」
「お持ちいたしましょうか？」
彼は何とも言えない複雑な顔をした。綺麗な顔はどんな表情でも似合うのだなぁと、その様子を観察する。
白かと思えば金色にも輝く不思議なローブを身に纏う神は、何かを吹っ切ったように顔を上げた。
「中身はどうあれ、お前に贈ったのか」
「まあ、健康を維持して、もっと効率よく直せという意味だと思いますけど」

「……お前があれの心を動かしたのか」
「いや、私は数えるほどしか顔を合わせていないんで、動かしたってわけじゃありません。元々はマナラさん目当てで通っているだけですから」
「その女が、ゼイレムを動かしたのか」
「さぁ。よく知らないんで、私には何とも……。マナラさんはしばらくしたら起きてくると思いますから、出直すかお待ちください」
珍しくイゼアの方が早く起きたのだ。可能な限りそっとしておきたい。イゼアも眠いが、三時間は眠っているので問題ない。本当は二度寝しようと思っていたが、これを放置するのはまずいだろう。
「起こしてこい」
「ダメです」
「なぜだ」
「口で言っても分かりませんけど、後で見たら分かります」
「いいから、起こしてこい」
なんて横暴な神だろうか。神が迷惑の権化と言われるだけはある。
「貴方は結局、どういった方で、どういった用なんですか？　ようやく朝日が出てきた時間に押しかけて、寝てる人を起こせと言うだけの大切な用があるんですか？」

こんな早朝、女性だけが住む家に押しかけてくる方が悪いのだ。神でも持っていて当然の常識であり、それすらないこの男が非常識なのである。

「私はラーハだ」

「は？」

今、よく知っている単語を聞いたような気がした。

首の後ろがズキズキ痛む。

心臓を氷の手で鷲掴みにされたように、悪寒が走った。

「ラーハだ」

「え……と」

「太陽神、ラーハだ」

たった六神しかいない一級神の一人が、太陽神ラーハだ。

イゼアは、生きてきた中で一番慌てて遮二無二走ってマナラの部屋へと向かった。

部屋に入ると、彼女は身を起こしてあくびをしている所だった。

「どうした」

「太陽神ラーハが出ました」

「は？」

寝起きに何を言ってるんだこいつ、という目でマナラはイゼアを見上げた。

「太陽神ラーハが出ました」
「お前の一族を呪ってて、引きこもりで有名な太陽神が？」
「それが今、下に、工房にいます」
マナラの頬が引きつった。額に手を当ててしばし悩み、しぶしぶといった様子でガウンを羽織って部屋を出た。不自然でない速度で階段を下りて、工房の中に入った。
「おお、まさしく太陽のような方！」
太陽神を見て、マナラの第一声がそれだった。
イゼアは自分が生まれた時から苦労をしている一番の原因を改めて目の前にし、工房の入り口から、恨みがましく睨み付けた。
首の後ろはまだ痛む。痛んでも不思議ではない。呪いをかけた本人が目の前にいるのだから、ひどくなってもおかしくはない。
太陽神さえ先祖を呪わなければ、イゼアはこれほど苦労する事もなかった。実家への援助を理由に、アーソルドにいいように使われる事もなかった。
そして当の太陽神はマナラを見つめ、神様のくせに目を手で覆い、もう一度見て、今度は目をこすってもう一度見る。
「……悪趣味な」
否定できないところが、弟子としては悲しい。しかし彼の予想を裏切る事が出来たという事

実が少しばかり気を晴らした。

ラーハと名乗ったその男は、値踏みするようにマナラを見た後、ため息をついてイゼアを見た。

やはりこっちだろうと言わんばかりの視線に、マナラの背後に立つイゼアは、思い切り首を横に振った。

「私じゃないですよ。ゼイレム様は私になんて興味ありません。初めは男の子だと思ってましたし、マナラさんに食べさせるために包丁もらったんですから」

イゼアは失礼かとも思ったが、畏まらずに普段通りに話した。神様とよく遭遇した男の書いた本の中に、神官でもなければ神に対して王を相手にするように畏まる必要はなく、むしろそうと知って態度を変える事で戸惑いや不快を与えてしまう場合がある、と書いてあった。

神様との付き合い方マニュアルというのは少なくないが、どれも似たような事が書いてあるので、参考にする事にした。

「寝起きにいきなり何をなすりつけられてるんだ、私は」

マナラは納得いかないと腕を組む。

彼女には悪いが、イゼアはラーハの視界に入るのも嫌だ。マナラの背に隠れているから部屋にも入れるが、一人だったらここに戻るのも難しかった。

彼に卑小な自分を見破られそうで嫌だった。彼は自分が呪いをかけた者の子孫など知らない

だろう。
「ほら、ゼイレム様が自主的に包丁なんて持ってくるから、封印が揺らいだって怒ってるんですよ」
「ゼイレム様……ラーハ様が直々に乗り込みに来るほどお前の事を……」
「マナラさんの事に決まってるじゃないですか！　どこの世界に初対面の相手にこんな大事になるほど惚れる人がいるんですか。男だと思われたの……に」
己の自虐的な言葉に、自分で傷ついた。ものすごく悲しくて、涙が出そうになる。
神様なのに、ただ男物の服を着ているだけで、見抜いてもらえなかった。神様を騙せてしまった。そのつもりはなかったのに。
人間相手の時よりも辛かった。しばらく立ち直れそうにない。
「ラーハ様……何の用で来たか存じ上げませんが、何も罪のない少女に癒しがたい傷を負わせなくともよろしいでしょう。これでも本人は気にしているのですから」
「醜いと言ったわけではない。人にしてはよい見目の部類に入るだろう」
でも男に見えるのだ。男に。神様が見てもそう見えるのだ。
「だそうだ。イゼア、泣くのはやめろ。成長すればそのままの格好でも、誰も男だなどとは思わないようになる……きっと」
「きっと……ですか」

「それに、アルスのような女もいる。あいつだって、女装すれば女に見える」

彼女が知る中で男装の美女と言えば、エムラドの付属魔法と実戦体術教師のアルスだけだ。彼女は本当に男性のように背が高くハンサムな、女生徒に人気の女性だ。あれぐらいになれば吹っ切れる事も出来るだろうが、イゼアの場合は髪の長さだけで男呼ばわりされるようになったのだ。

「いいんですけどね。顔の作りなんか生きるのに大した問題じゃないですから」

「髪はそのうち伸びるぞ。伸びすぎれば鬱陶しいけどな。イゼアの髪は綺麗だから、男と間違えられる事もないと思うぞ」

マナラは前髪だけは自分で切って、後ろ髪が重くなると娼婦達に切ってもらっているらしい。髪を三つ編みにしているのはおしゃれ心ではなく、実用性の問題だ。

それでも、イゼアよりはよほど女性らしいというのが、ひどい現実である。どれだけ痩せていても、不健康でも、例え髪が短くても、彼女は誰がどう見ても女性にしか見えないだろう。イゼアと違って服の上から分かる程度には胸もある。

「落ち込むな小娘。醜いわけではない。大人になれば女らしくもなるだろう。これでもつけていろ」

黙ってそのやりとりを見ていたラーハは、そう言ってイゼアの髪に何かを差し込んだ。

「ああ、綺麗じゃないか。うん、女らしくなったぞ」

マナラがいい加減な事を言いながら手を叩く。もちろんはなから期待などしていないので、傷つく事もない。

どんな物を頭につけられたのか分からないが、返すというのも失礼だしと、深々と頭を下げた。

「ありがとうございました。一生の宝物にします」

ラーハにもらった物だから、恨み言を言う相手には向いていそうだ。

「大したものではない。渡し損ねて捨てるに捨てられなかった物だ。道具とは、役に立ってこそ喜びを覚えるらしいからな」

髪飾りを、渡し損ねる。

その言葉にイゼアは少し寒気を覚えた。

誰に渡し損ねたのか、聞くに聞けなかった。

「今日の所は帰るが、また出直す」

彼はとんでもない事をさらりと言って、ゼイレムのように忽然と姿を消した。

彼がいなくなったとたん、首の後ろにあった痛みは消え、イゼアはほっとした。これが後遺症のように残ったら最悪だった。

「……また来る気か、あの迷惑男」

マナラが頭を掻いて、ため息をつく。

出来ればこのまま忘れて一生来ないで欲しい。そう願いながら、イゼアは髪飾りを外して手に取った。

銀色の、花のモチーフが彫られた高そうな髪飾りだ。

「綺麗だけど、どうしよう……」

自分を呪っている男からもらっても、ちっとも嬉しくなかった。

嫌いだからと、いなくなれとも言えないし、神とは実に厄介な存在だ。存在する事が仕事なのだから、大人しくしていてくれればいいのだ。

「ん？」

イゼアは髪飾りに違和感を覚えて、首を傾げた。マナラはイゼアの様子に気づいて、手元を覗き込む。

「んんっ、色が……ちょっと貸して」

マナラはイゼアの手から髪飾りを取り、朝日にすかす。

「硬い……おかしい……ちょっとまって、これ……」

マナラは髪飾りをテーブルに置き、近くに転がっていたハンマーを手にした。

「え、ちょ、マナラさん」

「ちぇいっ」

マナラはハンマーを振り上げ、迷わず振り下ろした。

甲高い音がひびき、イゼアは背を丸めて身をすくめた。マナラはハンマーを置いて、髪飾りを持ち上げる。
「やっぱり……」
「何が、やっぱりなんです？」
「これオリハルコンだよ。傷つかないし、軽いし」
イゼアはじっと髪飾りを見つめた。
オリハルコンと言えば、頑丈で、魔力を通しやすくて、稀少で、値段が高い事で有名な金属である。
「高いんじゃ？」
「半端なく高いな。しかも魔具っぽいから、何かしらの効果があるはずだ」
「ど……どーしよう」
もらった髪飾りを前に、師弟は本気で悩んで腕を組んだ。
これを売ればイゼアは生活に困らなくなるが、さすがに売るなどという恐ろしい事は出来ない。しかし持っているのも気が引ける。高くてどんな効果があるか分からない髪飾りなど、怖くて身につけられない。
「……素直にもらっておけ。捨てる事も出来ないし、身につけないのも何だし、部屋に飾っておくとか」

「でも……こんな曰くありげなものはちょっと……」

「確かに、女に贈るつもりだったっぽい言い方してたもんなぁ」

太陽神は昔、自分の女を月神に奪われた事に腹を立てて女を呪い、月神を人間の中に封じてしまった経歴を持っている。その日以来、三つの月のうちの一つは、輝きをなくし、うっすらとしか見えなくなってしまったらしい。

そのエピソードからも分かるように、短気で嫉妬深く自己中心的な神というイメージが強い。実物を見て、短気であるのはイゼアも実感した。しかし太陽という世界に欠かせない物の化身のため、どこの国に行っても神殿の一つはあるものだ。

つまりは、化身の性格がどうあれ、いなかったらいなかったで困る存在である。

そういう扱いを受けている神が、自分を裏切った女に贈る予定だった、呪われていそうな髪飾りである可能性がとても高い。

ラーハの意味ありげな言葉を思い出すと、身震いした。

ずっと持っているという事は、まだ未練があったはずだ。そんな呪われそうなほど思いの染みたものが、家の中にあるだけでも恐ろしい。

「よし、いつでも取り出せるように、封印しておくか」

マナラは髪飾りを持って、金庫の前に立った。深呼吸をしてからしゃがみ込んで、金庫に手を掛ける。

「せーのっ」

素早く金庫を開けて、中に投げ入れると、金庫のドアを叩き付けるようにして閉めた。そして金庫の鍵をかけて、一息つく。金庫が開いた一瞬、イゼアの耳には、中から変な音が聞こえた気がした。悲鳴のような、分からない音。あの金庫は何があっても開けないと心に決めて、イゼアは椅子に腰を下ろした。

マナラは小さく息を吐き、一仕事終えた後のような、爽やかな笑みを浮かべていたので、追及はしないでおこうと決めた。

「なんか、封印しても呪われそうですよね。彼氏が一生できないとか」

「彼氏はともかく、もう呪われているだろ。今さらじゃないか？」

「そうですけど……うう、思い出したくもない。もう来ないといいですね。ラーハ様が来てた時、首の後ろがすごく痛かったんですよ」

イゼアの言葉を聞いて、マナラは背中に回ってパジャマの襟を引っ張った。

「ちょ、なんかすごいアザがあるぞ」

「子供の頃から、弱ると浮かんでくるんですよ。ラーハ様の守護下にないという印、光を封じる紋様らしいです」

生まれた時から、世界で最も偉い神様の一人に意味もなく拒絶されていると知った時はかなり傷ついたが、その張本人が気づきもせずに元恋人に贈る予定だった装身具らしき物をくれる

とは、傷つくのを通り越して、ただただ呆れるしかない。
「ふぅん。それ、塔の連中には見せるなよ。研究対象にされるからな」
「そんな無謀な事しませんよ。私だって自分が可愛いですから」
呪いの事は知られているが、この印の事は知られていない。知っているのは幼い頃から恐怖を与え続けてくれたアーソルドだけだ。
アーソルドはこの呪いに興味が無いのでいいが、下手な相手に知られたら、拉致監禁されて人体実験される可能性も高い。身内も狙われるかもしれない。
塔の魔道士は、それが出来る程度に財力を持っている者が多く、そして他人の事は気にしない思考回路のおかしい者が稀にいる。研究はそれだけ楽しくて金になるらしい。研究のためなら何も惜しまないのが研究者なのだ。
イゼアは少し早いが朝食を作り、マナラは花壇に植えたハーブに水をやった。
あくびをかみ殺し、パンを温めて野菜と卵を挟む。
「おーい、イゼア、客だよ」
「え、また？」
工房のドアが開いて、マナラがじょうろ片手に戻ってくる。
「おい、来てやったぞ。太陽神が出たらしいな」
尊大な物言いをして胸を張るアーソルドと、すっかりマナラに懐いたアランが、マナラの後

から入ってきた。
「な、なんで二人がこんなに朝早く!?」
「アランがこの家の方から恐ろしい気配がすると言うから、駆けつけてやったんだろう」
「なんであんなに離れてるのに、そんな事が分かるの!?」
「知るか。まったく、朝早くからアランに起こされて散々だった」
「本当に太陽神の気配に敏感なんですね……」
勘の鋭いアランが察知し、部屋が近くて理解してくれるだろうアーソルドを叩き起こしたようだ。下手な相手では、アランが寝ぼけたか嘘をついていると、信じてくれないだろう。
「しかし太陽とは勝手気ままなものだな。僕は我慢してアランが用意したアンデッドの背中に乗ってきたというのに」
アーソルドはぶつぶつと言いながら、勝手に台所に向かい、手を洗う。死霊術で動く何かに乗ってきたようだ。
「イゼア、喉が渇いた。茶を出せ」
彼は手を拭くと、当たり前のようにふんぞり返って命令する。
その姿を見て、なぜだか先ほどまでいた太陽神を思い出した。
「ひょっとして、心配してきてくれたんですか？」
イゼアは太陽神と関わりの強い一族だ。知っていれば、知り合いなら心配になるのは当然だ

が、アーソルドも相手を知っていながら駆けつけてくれたのだ。
「駆けつけてやったと言っているのに、今さら何を言っている。お前の一族を面倒見るのは我が家の習慣だからな。何かあったら主人として目覚めが悪いだろう」
相変わらずどこまでも偉そうで、イゼアを所有物として扱っているが、それでも今日の所は許してやろうという気持ちになった。彼がいてどうにかなるような相手ではないが、駆けつけてくれた事には、感謝するべきだろう。

太陽は毎日昇る。
日が昇れば、イゼアの一日も始まる。その習慣が、まるで太陽に支配されているかのようで、たまに憎らしくすら感じる。
今日の憎しみは、さらに別の意味もこもっていた。
心なしか、首の後ろが痛いのだ。
昨日の今日で泣きそうになりながらベッドから出て階段を下りると、案の定、我が物顔のラーハと無表情のゼイレムが工房でくつろいでいた。接客しているマナラは、イゼアが来たのを見て目を輝かせた。

マナラのこれほどまで切迫した、何かにすがるような表情を見たのは初めてで、気持ちは理解できるが複雑な心境だった。弟子に初めて期待したのがこれとは、情けない。弟子として、人として。

マナラはお金持ちの貴族のはずだ。イゼアよりもしっかりした接客ぐらい叩き込まれているのに、身分も能力も格下のイゼアに頼らないで欲しい。

しかし彼女もこれからは、弟子の願いを裏切って、弟子よりも早く起きるのを改めてくれるかもしれない。

それよりもと、イゼアはなぜ昨日の今日でこのような事になっているのか考えた。

最近はずっと寝不足だった。マナラに付き合って、睡眠八時間が、五時間になったのだ。

だからきっと、これは夢に違いない。痛いのは気のせいだ。ただのコリだろう。最近俯いている事が多いから。

「二度寝してきます」

「待て、お前はどれだけ寝るんだ!?」

「目が覚めるまでです」

「私だって寝たいさっ！」

「だってだってぇ……」

ラーハが呆れ顔で師弟を見ている。おかげでますます首の後ろが痛くなってきた。

体調が悪いので休ませてくださいと言いたかった。イゼアは我が身が可愛いのだ。

「ゼイレム。お前はあれのどこを気に入った」

「……」

ラーハの問いに、ゼイレムは虚ろな目をしたまま沈黙で答える。

「ご自分で感情を封じられたんでしょう。ゼイレム様にそんな高度な質問に答えられるはずがない」

マナラがゼイレムを庇うように言う。

「封印が薄れたというわけでもないのか」

ラーハは何のためにこんな所に来たのだろうか。まさかゼイレムの反応観察でもあるまい。そこまで暇だとは、思いたくない。

「ラーハ様はまたこんな狭くて汚い場所に、何をしに来たんですか」

狭くはないし汚くもしていないのだが、謙遜してマナラが言う。ちゃんと掃除は毎日しているから、清潔な家だと言っていいほどだ。マナラ一人の時に比べたら、ゴミ溜めと一般家庭ほど違う。さすがのマナラも、工房の備品だけは綺麗に整頓していたのだが、今はそれ以外も改善され、女性の工房らしくなっていた。

「ゼイレムの反応を見に来たのだが、いつもと変わらないな」

暇人だったようだ。

確かに、いつもの通りのゼイレムだ。包丁の時が、特別だっただけで、彼はいつもこの調子である。

「思い返せば、封じる前からこんな物だった気がする」

イゼアは頭を抱えた。

こんな太陽神はもう嫌だった。暇神出て行け、賽銭返せと、出来る事なら面と向かって言ってみたい。呪いが軽くならないかと、貧しいながらに神殿の賽銭箱にお金を入れたのに、こんなひどい目に遭うなんて理不尽にも程があるのではないだろうか。

「お前はあの痩せた女を本当に好いているのか？」

ラーハの期待のない問いに、ゼイレムはぼーっと視線をマナラに向けた後、頷いた。

確かに頷いてしまった。

「それは分かるのか。では、この女に惚れているのか？」

さらにずばりと切り込んだ。さすがは天上天下唯我独尊、身勝手我が儘、我が道を行き迷惑をまき散らす暇神である。

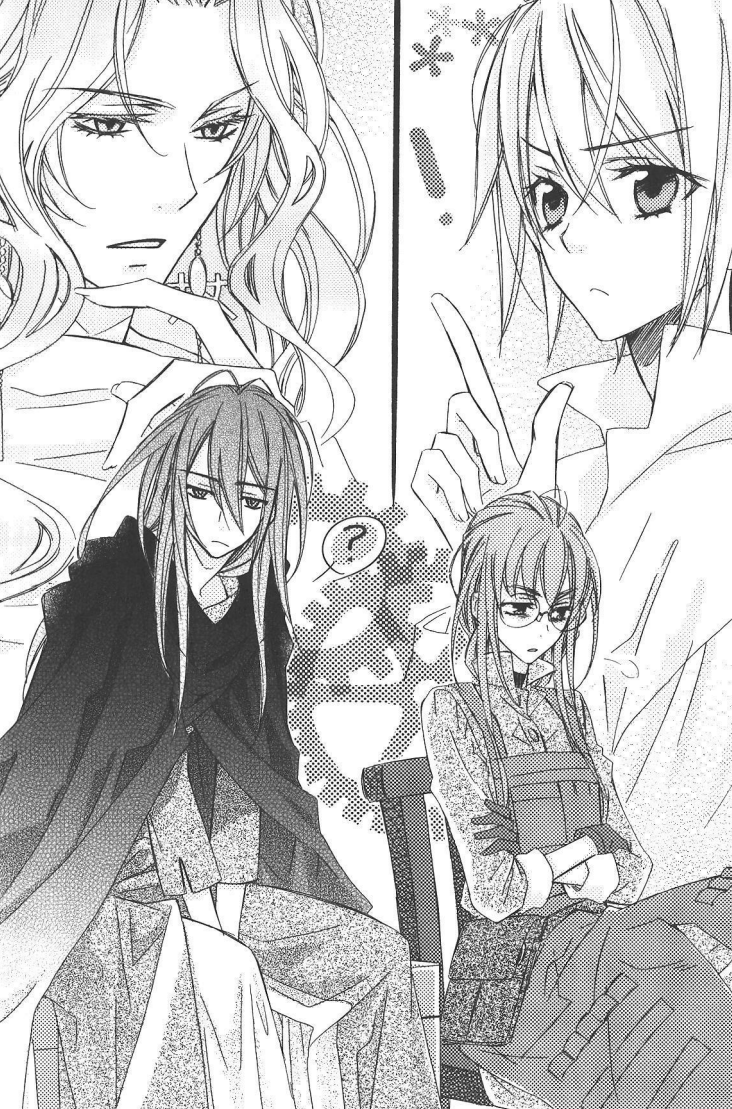
そしてゼイレムは再びこくりと頷いた。

「ゼイレム様、好きと惚れるは微妙に違いますよ」

「違……う？」

イゼアが指摘すると首を傾げた。やはり、そこまで高度な思考はない。

「どう違う。あれが初めて執着する女だぞ」
ラーハは安直な考えを持って尋ねてきた。男と女の間の『好き』には、恋愛しかないと思っているのだろう。
「ゼイレム様が本当に誰かを好きでも、今、ラーハ様に問われて答えるのはまた別の感情ではないですか？　恋愛のような感情を表現できるようになるのは、きっと呪いなど打ち破った時だと思います。今の彼の好意が、そこまで深いとは思えません。彼を動かしているのは、道具への、自分を信仰する技士への思いではないでしょうか。真面目なお方のようですから」
「なるほど。一理ある」
イゼアの言葉を聞いて、ラーハは少し考えた。
もちろん、それは今の彼の場合だ。もしも呪いが解けたらどうなるのか分からない。
「それに、好いた惚れたで片付けられる無粋な関係じゃありませんよ。とってもストイックなんですから」
「ストイック？　感情を封じられてこれ以上考えられないだけだろう」
失礼な男だ。だから女が嫌気を差したに違いない。綺麗な関係を色眼鏡で汚して見るなど、絶対に付き合ってみるとげんなりするタイプだろう。アーソルド並み、いやそれ以上に女心を分かっていない。
その様子に呆れたのか、マナラは足を組んだ。



「ラーハ様、なにもそれに直結させる必要はないでしょう。部下がどんな恋愛しようが勝手ですしね」

低レベルな会話のためか、すっかり開き直ってしまったようで、いつもの態度になった。

「何より、うちのイゼアはいい子ですから」

「マナラさんの事ですよ！」

「冗談だ。お前にはアーソルドがいるからな」

「あの人だけは嫌です。ぼーっとしていてもゼイレム様の方が仕事熱心だし、ずっと素敵ですっ！」

恋愛感情とは別だが、ゼイレムの事は尊敬できるし好きだ。ほとんどを封じられているからこそ、彼の誠実さが際立つ。

「本当に封じる前とあまり代わりがないのでしたら、出来れば封印をゆるめていただけませんか。今の状態は私の負担が大きすぎます」

マナラの大胆な言葉に、ラーハの目つきが変化した。しかしマナラは続ける。

「具神とは死神様にも似た役割を持っています。使われる道具の歓喜の声、捨てられる道具の怨嗟の声、壊れた道具の嘆き声を聞くお方。今のままでは壊れた道具を拾い集める事しかできません。本来の力があれば、手をかざしただけで道具は救われるはずなのに、それを私のような人間の手に任せるなど、本来はあってはなりません。一体、彼が何をしたというのです

か？」

マナラの落ち着いた声に、ラーハは目を伏せた。

「ゼイレムの呪いは、私だけの意志で施した物ではない。四神の連中に、ターラも納得している。道具など助ける必要はない。それよりも、ゼイレムの力を封じる意味の方がはるかに大きい」

「なぜですか？　こう言うのも何ですが、たかが道具の神をそこまでして封じるなど、人の目から見れば奇異です」

言い方は悪いがその通りだ。たかが道具の神。年季の入った道具の声を聞き、時に直し、時に新しい主を探してやる。それだけの神だ。性格もおっとりしているようだし、危険な神とは思えない。

「禁忌を犯した。これは巻き込まれただけとはいえ、役割的には要となった。言われるがままに、使い道によっては、世界を滅ぼしかねない物を、作ってはならない物を作り出したのは、間違いなくこの男だ」

二人は驚いてゼイレムを見た。ぼーっとしている。元からぼーっとした神様だったのだろう。人がよくて、付け入られた。しかも力は強い神だから、大概の要望には応えられてしまう。

そんな風に利用される姿が容易に思い浮かぶ。

「力も問題だが、道具を使う術を知る知識と意識こそ封じなければならない。たかがという思

いが神の奢りだった。人間が口を挟む事ではない」

何を作ったとは、マナラもさすがに追及しなかった。道具を知る彼女は、俯き爪を噛む。

「知識が問題なのでしたら、力だけというのは？」

「私一人の問題ではない。説得したければ、一級神を全て相手にすると思え」

「わかりました」

マナラはため息をついた。ゼイレムが戻ればマナラの負担は減る。それに、道具達も自分達の神の救いが欲しいだろう。

だが、ただそれだけだ。

「……では、せめてこの子の呪いを」

マナラはイゼアを指し示す。初めてラーハがここに来た時よりは痛くないが、視線を向けられると頭から首にかけて、ズキズキとした頭痛のような痛みがある。

「呪い？」

ラーハがイゼアを見た。

急に首の後ろがとても痛んだ。睨み付けられて、怖くて怖くてたまらない。

それでもイゼアはマナラに倣い、何でもない振りをして微笑んだ。

この痛みで、自分が小さな存在だと思い知らされる。

神の前では、人の存在など些末なのだと思い知らされる。時折起こる痛みが、諦めも無価値

さも教えてくれる。
物心ついた時から、太陽の下は好きではなかった。無価値な自分の全てをさらされる。しかし太陽はイゼアが太陽の下にいても、気づきもしない。
今、その太陽の化身の目の前にいて、視線を向けられている。ようやく、太陽の呪いを持つ女として、彼の前に立つ事が出来た。
極力顔には出さないように努めたが、足が震え、手が震えた。太陽を嫌う事で誤魔化していたものが、噴き出しそうだった。
とにかく太陽が恐ろしい。
「ラーハ様は以前、この子の先祖に呪いをかけました。それが一族を縛り付け、この子の魔法を使う力を封じ、今も痛みを与えています」
ラーハは立ち上がり、身をすくませるイゼアへと手を伸ばした。頭を掴み、その手は後頭部を滑り落ち、首に触れる。
「いっ」
火を押しつけられたような熱を感じ、イゼアはしゃがみ込んで首を押さえる。
痛みに熱が加わった。太陽の熱の片鱗が流し込まれたかのように熱い。少しでも痛みを除こうと後退する。
「なぜお前がアシュターにかけた呪いを受けている」

首を押さえ、熱いのを我慢して仰向いた。涙で霞む目を拭い、太陽のように綺麗なラーハを見上げた。

「アシュター……月神？」

ラーハの恋人を奪う形になった、月神の一人。殺すわけにもいかず、肉体という枷を背負わせ――つまりは人として転生させられている。

しかし女の目線から見れば、この性格の男から逃げて、他の男に走るのは当然だ。愛する二人は引き裂かれ、八つ当たりでひどい目に遭っている。

「ご先祖様が月神だったから、私は呪われているんですか？」

そうだとしたら、月も嫌いになってしまう。

昼間も。夜も嫌い。好きなのは雲が彼らを覆い隠してしまう時だけなど、悲しいではないか。

「違う。これはアシュターにかけた呪いだ。血縁者に残るとしても、このような形にはならない。人間であれば、せいぜい力を削ぐだけだ」

力は別に削がれていない。発動しないだけで、力そのものは中にある。神からすれば微弱かもしれないが、人にしてみれば大きな魔力だ。これで削がれているのだとしたら、イゼアは人間の域を超えている。

「でも、私は月神じゃないですよ……ね？」

「そうだとしたら、痛めつけている」

月神が哀れでたまらない。恋人同士を引き裂き、封じ、さらに追い打ちをかけるこの執拗さ。
よほど愛していたのか、よほど悔しかったのか。
どちらにしても、そのように思われてしまった相手が可哀相だ。愛されるのはいい。しかし束縛されるのは耐えられない。
マナラは床に座り込んだまま震えるイゼアに手を差し出した。
「イゼア、ラーハ様ってアーソルドに似てるな」
引き上げられた時、耳元で囁かれ、イゼアは頷くしかなかった。
「どちらかというと、アーソルド様がラーハ様に似てるんですけど」
「ああ、ラーハ様の方が上だしな」
アーソルドも自分の所有物を取られれば烈火の如く怒って暴れるだろうが、ここまではしない。
こういう性格の存在が力を持つと、周囲は不幸だ。
しかしラーハの人格云々は、この場では一番どうでもいい問題だ。器の子孫にまで恨みが向くのなら、イゼアはすでにもっと不幸になっている事だろう。
今大切なのは、自分自身の事。
「ラーハ様。どうして私にかけられた呪いは月神様にかけたのと同じなんですか？」
「私が知るか」

「……」

かけた本人が知らないのなら、イゼアに分かるはずがない。神のみが知るどころか、一番の当事者の神様が知らないなどふざけた話だ。

「私の先祖が呪われてから百年はたっていませんが」

「最近だな。転生体を見つける度に、力を取り戻さないように削いでいたから、そのうちのどこかで失敗したのかもしれない」

「……」

ウィーゲム家は、そんな軽い失敗でこのような目に遭っているらしい。頬が引きつり、殴りかかりたいのを必死で堪えた。

「失敗した上に、イゼアの魔力が人間にしては多すぎたから、残っていた呪いが歪んだってとこでしょうか」

「そんな事が……あるのだろうか？」

マナラの問いに、逆にラーハが尋ねる。

マナラはこめかみを押さえて、何とか耐えた。

神は力を持っているが、研究者ではない。何となく出来る事を何となくしているのが神だ。出来るからやる。その後それがどうなるのか、神は知らない。

何かの本で読んだその内容を、イゼアは実は少し馬鹿にしていたのだが、まさにその通りで

あった。心の中で、偉大で勇敢な筆者に謝罪した。
「魔力はあっても魔法としては使えないし、ラーハ様が来るとものすごく痛んで大変なんですけど。時々、日の光でも痛みますし」
「それは難儀だな。子供は日の下で遊べ」
初めてまともな事を言い、ラーハはイゼアの首に手を伸ばした。
（え、解いてくれる!?）
あまりの事に思考が停止し、次第に胸一杯に喜びが広がる。ついでに首も熱くて痛いが、一時の我慢だ。
そう、これでアーソルドと完全に縁を切れる。イゼアの念願が叶う。むしろ魔法が使えるなら、アーソルドを越える事など容易いのではないだろうか。
イゼアは期待を胸に、転げ回りたいような激痛と熱に耐えた。
「――おかしいな。消えない」
「は？」
「いつもはこれで消えるのだが……」
ラーハは意地になった様子で、ぐいぐいと首を押して力を注ぎ込んでくる。
「痛い痛い痛い痛いっ!!」
「我慢をしろ」

「いったい！」

イゼアはあまりの痛みに、ついラーハの胸を手で押して、さらに腹を蹴る。

彼がどんな顔をしたのか気にする余裕もないほど痛くて、うずくまり、それでも耐えきれずに床に額を擦りつけて首を押さえた。

冗談ではないほど、息が出来ないほど痛い。

涙を流し、額を床に打ち付けるように痛みを堪え、なんとか息を吸い、痛みが過ぎ去るのを待った。

「もう……いいです」

それだけ絞り出し、イゼアは目を伏せる。

「よくはない。自分でかけた呪いを解けないなど、無責任ではないか」

彼のような、残っている全ての逸話が身勝手我が儘大爆発な神にも『責任感』があったのだという事実に驚きながら、これ以上実験台にされてはたまらないとはいつくばってその場を離れる。

「次はきっと解ける。安心して任せろ」

「嫌、死ぬ。マジで死ぬっ」

「大丈夫だ。死なない。生かさず殺さずが基本だ」

「いやぁぁあ！」

イゼアは気力を振り絞って走り、なんとかぜイレムを盾にした。これが一番マシな盾である。
「ラーハ様、サイテー！」
「むっ」
「女の子に拷問まがいの事するなんて、良識とかないんですかっ!?」
「見た目は男みたいなのだから少しぐらい我慢しろ」
「ひどい！　そんなんだから女の人に振られるんですよっ！」
言ってから、血の気が引いていく。
つい興奮して本音が出てしまった。
「……」
互いに沈黙して見つめ合う。ラーハの顔色は変わらない。
怖い。痛い。怖い。どうしよう。
頭の中にぐるぐると、それだけが駆け回る。
「帰る」
予想に反して、ラーハは低く小さくそれだけ言って、光と化して消えてしまった。
彼も思ったよりは、短気ではなかったようだ。
完全にいないと判断できる頃になると、マナラが頭を掻きむしって腰掛けた。
「たぶん、十年ぐらい寿命が縮んだ」

「ちょっと今死ぬかと思いました」

イゼアは昔から、アーソルドに対しても時々切れて暴言を吐いていたような気がする。もちろんその時は殴られた。

「これからは……発言に気をつけます」

# 6章　少女達の憧憬

イゼアの買い出しは週に二度行われる。
いつまでも娼婦達の善意に甘えていてはいけない。医療行為という対価は払っているが、彼女たちも身体を張って稼いでいるのだ。田舎の貧しい家族を食べさせるために、まだ年若い女性が働いているような事が、当たり前のようにある。そんな彼女たちの負担を増やしてはいけない。
そう思い、イゼアは一人で買い物に来ている。
「モロさん、この怪しげな薬は何に使うんですか」
モロの店にやって来たイゼアは、差し出された毒々しい紫色の液体の入った小瓶を眺めて、扱いに不安を覚えて尋ねた。
「毒にも薬にも。詳しい事はマナラに聞けばいい。師弟だろう」
「そうですね……あ、これ代金だそうです」
代金とは言っても、現金ではない。魔動機、計算機だ。

「ああ、直ったかい。よかったよかった」
「摩耗してたパーツも取り替えておいたから、何かオマケしろって」
「じゃあもう一本サービスしておこうかね」
そう言って、薬の入った小瓶を、もう一本カウンターに載せる。
「わぁ、ありがとうございます」
「作り手が亡くなってるから、正規に修理も出せないし、新しく買うと高いからね。何よりも使い慣れた物が一番いいんだよ」
モロは計算機を弄って調子を見て、満足そうに笑った。
イゼアは小瓶をハンカチに包んでカバンにしまう。
「これから食料品の買い出しかい？」
「はい。しっかり食べてもらわないと」
「くくっ、あいつもそのうち塔の外に出てきたばかりの頃のように戻るのかねぇ」
「……昔はちゃんと食べてたんですね」
「そりゃあ貴族のお嬢さんらしい、箱入り娘だったよ。性格と目つきは今と一緒だけどね」
イゼアはお嬢様姿のマナラを思い浮かべようとしたが、どうしても無理だった。
「……想像がつきません」
「暫くしたらわかるんじゃないかい」

「それもそうですね。頑張ってみます」
「ああ、頑張りな」
イゼアはモロに手を振り、店を出た。
塔にいた頃には絶対に近寄らなかった道幅が狭くて暗いこの辺りにも、今ではずいぶんと慣れてしまった。
女の子が一人で来るのは危険なのだが、イゼアはボーイッシュなので心配はないと、モロにも太鼓判を押されている。慣れていない女が男装もせずに一人で来るのは無謀とは分かってはいるが何度言われても悔しく――。
「離してくださいっ！」
どこからか、女性の声が聞こえた。気になって声の主を捜すと、さらに細い路地で三人の男性に一人の少女が絡まれていた。
無謀な行いをするとこうなる。
イゼアは少し悩み、腰に下げた剣に手を置き、マナラにもらった魔動機を確認する。学生の時に開発した、マナラの数少ないオリジナルの魔動機で、全自動で動く攻撃用の物だ。これさえあれば子供が魔物の出る森に行っても安全だという代物である。
悩んでいるうちに男が少女の腕をひねり上げ、袋をかぶせようとしていた。
「ちょっとそこの人達。それは不味いんじゃないですか？」

イケナイお店への詐欺まがいの勧誘だけなら騙される方が悪いのだが、これは止めるべきだ。うかつな場所に入り込んだ彼女も悪いのだが、うかつと見逃すには可哀相だ。

「その人こっちに渡してくれれば、何もしませんよ」

彼らを成敗しても意味はないから、引いてくれればいいのだが、その様子は見られない。三人ばかり減らして、変な組織に目をつけられたりしたらたまらないのに、その悩みをあざ笑うかのように、彼らはイゼアに刃物を向けた。

「んだこのガキ」

さすがに腹が立ったので、イゼアは構わず彼らに近づく。

「お、きれーな顔したガキだな。ついでにこいつも頂いてくか」

人をただの落とし物のように言う奴らだ。いかにも頭の悪そうな連中なのに、イゼアを傷つけないためか、彼らは呪文を唱え始める。魔道都と呼ばれるこのアンセムの街にいる以上、女子供も魔法の一つや二つ扱えておかしくない。

彼等の呪文の内容から、教科書に載っているような、簡単な魔法だと分かる。イゼアは魔法を使えないが、知識はあるのだ。いつもアーソルドがこれみよがしに使っている魔法に比べれば、彼等ののんびりとした呪文は子供の遊びの範疇である。

「危害を加えるつもりですね。それじゃあ私も容赦しませんよ」

こんな連中にさえ使える魔法を自分は使えない。

それが無性に悔しくて、イゼアは自力でどうにかしたくなり、魔動機は使わず、魔力を練り上げて単純にぶつけるように解き放った。男達は押されたように後ろに倒れ、イゼアは少女の元へと走り袋を外すと、その手を取って来た道を戻る。

最近は、魔動機に魔力を放つ毎日を過ごしていたせいか、人一人ぐらいなら吹き飛ばせるほどに制御出来るようになった。集団になると足を止め驚かす程度の力しかないが、彼等には十分だったはずだ。素人に毛の生えたような魔道士が、未知の力を前にすれば混乱する。そこまでして追っては来ないはずだ。よほどの愚か者でもない限りは。

何事も上手くなれば役に立つものだと、少し感傷に浸りながらイゼアは走った。

慣れた狭い路地を抜けて大通りに出ると、ゆっくりと足を止めて少女を振り返る。イゼアよりも年下の可愛い女の子だ。フリルの多い可愛らしいワンピースを着ているので、世間知らずなお嬢さんだろう。恐怖のあまり半分放心状態だ。ここまで走ってくれたのも、イゼアに手を引かれて、無意識のうちに身体が動いていただけのようだ。

「あなたはどうしてあんな場所にいたんですか？　危ないですよ」

「こ、この辺りに珍しい薬草が売っているってき、聞いて……」

恐怖が戻ってきたのか、手が震え、声まで震えた。このまま帰れとは言えない状況に、イゼアはため息をついた。

「家はどこ？」

「と、塔……です」
「エムラドの学生なの？」
「はい」
イゼアも同じ場所にいたが、他の全ての生徒の顔を覚えているわけでもない。魔力の量と実技以外の成績のせいで、イゼアもアーソルドと同じ特別クラスにいた。そこは年齢関係なく集められ、他クラスの生徒とはあまり交友がない。
「なら、送っていきましょうか。一人では不安でしょう。その店も心当たりがあります。この辺りはあなたみたいな格好の子には、治安がいいとは言えないから」
「いいんですか？」
「構いませんよ。乗りかかった船ですから」
彼女の顔が明るくなる。赤みがさした頬が可愛らしい。肌が白くて綺麗な女の子だ。世間の事など何も知らないといった雰囲気は、イゼアにとっては憧れだった。こんなお嬢様を一度してみたかった。
彼女が目指していたのは、業界内では密かに有名らしいモロの店だろう。塔もそれほど遠くはない。マナラも遅れて文句を言うような性格ではないし、少しぐらいの寄り道はいいだろう。服装も男物だが、それなりにしっかりした物を着ているので恥をかく事はない。ちなみにアーソルドのお古だ。男装する必要があると知ると、彼がもう小さいからと持ってきてくれた。昔

から、そうやって物をくれる事は多かった。彼は自分の舎弟に物を与えるのが好きなのだ。
この街にやって来たばかりの頃のアーソルドは、とても大きいと思っていた。今ではその時点の彼に追いついてしまったのだ。
「あの、わたくしはリアンナ。よろしければ、あなたのお名前は」
「イゼアです。以前エムラドにいたので、身元については安心してください」
「以前……やめてしまわれたのですか？」
「ええ。つい最近の事ですが」
彼女は驚いたように目を見開き、首を横に振った。
「そんな最近までいらっしゃったんですか？　あなたのような男性に気づかないなんて……」
「髪が長かったんですよ。それに私は女です」
「じょ、女性？」
「こういうところは危ないんで、男装した方が安全なんです」
男装しているのだから傷つく事はないと自分に言い聞かせ、安心させるように微笑む。あんな事があった後では、男性よりも女性の方が信用できるだろう。だから女性らしい柔らかい笑みを心がける。その甲斐あってか、彼女の顔色はさらに明るくなり、紅潮していると言っていいほどの色になっていた。
何かが違うような気がしたが、イゼアは手をつないだままリアンナを送り届けた。

その数日後、イゼアはマナラの口から出た言葉を聞いて胃が痛くなるのを感じた。
「塔に、行くんですか？」
「そうだ。塔長様に塔の色々なシステムが少し狂ってきているから見て欲しいと言われている。ジジイがやればいいのに、下手に職人気取ってるから柔軟性がないんだ」
先日行った時、なぜか人々の注目を集めて少しストレスが溜まった。
まさかあんなに見られるとは思わず、送って行った事を少し後悔したものだ。
「私も……ですか」
「無理強いはしないが、滅多にないチャンスだぞ。普通は見られない物が見れるんだ」
そう言われると見たくなる。見て分かる物ではないだろうが見たくなる。
「行くんなら準備。行かないんなら仕事」
一人で延々と作業などしていたら仕事もはかどらないし気も滅入る。鬱々とした時間を一人で過ごした事のないイゼアは誘惑に負けた。
「行きます」
「なら着替えてこい。作業できないだろうから私服でいいよ」

イゼアは朝食の後始末をして、アーソルドのお古を着た。
さすがにスカートなどはいていけないし、かといって汚れた作業着も恥ずかしい。悲しい事にこれが妥当なのだ。
「でも、なんでいきなり？」
「や、先週言われてたけど、言うの忘れてた」
イゼアは呆れながらマナラの荷物を背負う。少し重いが仕方がない。これが弟子のあるべき姿だ。
「やっぱイゼアは力があるなぁ。羨ましい」
「女の人に力があってどうするんですか」
「腕力があるのはいいぞぉ。こういう職業だとつくづくそう思うよ」
深い深いため息が漏れる。
女を捨てきっている彼女にはその方がいいだろう。しかしイゼアからしてみれば、痩せすぎていてもいいから、彼女ぐらいの女性らしさが欲しかった。
家から出て、鍵をかけて歩き出す。ほんのしばらく歩くと、路地を塞ぐようにして一台の馬車が止まっていた。二つの五芒星がわずかにずれて重なる紋章が描かれている事から、理力の塔の迎えだと分かる。
本当に塔長に依頼されての事らしい。

「あの、何を直すんですか？」
「さあ。何の調子が悪いか分からないから、まずはそこから調べるんだ」
「気の長い作業ですね」
「気の長い人間じゃないと、こんな仕事は出来ないぞ。私としてもこの都市が機能しなくなったら困るしね」
それを聞いて、少しぞっとした。
昔から塔の中で囁かれる未来に起こりえるいくつかの可能性がある。どれも都市伝説的な噂でしかないが、無いと言い切る事は出来ない。
その中で最も頻繁に噂に上るのが、この国に集まり循環する魔素が消えるというものだ。この都市国家であるアンセムは、世界でも有数の魔素の多い土地だ。元々そういう土地なのだろうが、都市設計によってさらに魔素を呼び込んでいるのだ。
主立った通りは、そのための魔法陣の線の役割を果たしている。そして、中心となっているのは理の塔だ。理力の塔の名前の由来になっている塔である。
もしも何かの機能が停止した時、元の平凡な土地に戻るだけならいい。
突然機能が停止して、その時この都市の膨大な魔力どうなるか、イゼアには見当もつかない。何事も無い可能性もあるし、突風が吹き荒れる可能性もある。爆発する可能性だってある。可能性だけなら、いくらでも出てくる。だから皆は怯えるのだ。

その中心である塔はこの都市の要で、入塔するには塔長の許可が必要だ。それ以外の誰も、塔の扉を開く事が出来ないためである。マナラはそこに入って作業するのだ。そんなチャンスを逃す事は出来ない。イゼアは一度でいいから、理の塔の中に入ってみたかったのだ。中がどのようになっているのか、想像するだけで興奮した。

興奮を抑えて馬車に揺られていると、あっと言う間に理力の塔の敷地内についた。馬車を降りると荷物を背負って、マナラの従者よろしくその後に続く。敷地内に入ると、やはり前のように見られている気がした。ここはエムラド側で、好奇心旺盛な学生達が多くいる。

「やぁ、お弟子さんハンサムだから女の子が騒いでますねぇ」

「いつもの事です」

案内の塔員が言い、マナラがさらりと肯定するような言葉を返す。

「そういう意味で見られてるんですか？」

「それしかないだろう」

ついこの前までここにいたのに、なぜいきなりそんな目で見られるようになったのだろうか。髪を切った時も似たような事を感じたが、クラスやその周辺での事だったので、髪を切った事に驚いて見られているのだと思っていた。

そんな事を考えながらとぼとぼと歩いていると、しだいに女の子の人数が増えてくる。塔での娯楽の一つが来客なのだ。それが若い男性だと盛り上がる。それを知っているから複雑だった。

「ああ、やっぱりイゼアお姉様っ！」
名前が聞こえ、顔を上げると先週助けてあげた少女がこちらに向かってきていた。
「ええと……リアンナ」
「覚えていてくださったのねお姉様！　リアンナ嬉しい！」
抱きつかれ、イゼアは空笑いする。
どうやら懐かれたようだ。助けられたのだから、好意を持ってもおかしくはない。
「ええと……あれから無茶はしていませんか？」
「はい。お姉様のお話を聞いて、己のうかつさを痛感いたしました。お姉様が助けてくださらなかったら、わたくしどうなっていたかと思うと……」
小さな彼女はとても可愛らしい。イゼアもこれぐらい可愛らしかったら人生も変わっていただろう。アーソルドももう少し優しかったかもしれない。
「イゼア、女の子の知り合い、いたんだな」
「……先週知り合いました」
まるで同性の友達がいないかのような物言いだったが、エムラド内では確かにその通りなので、否定出来なかった。悪いのはすべてアーソルドだ。彼が束縛するから、やっかまれたり、怖がって離れたりするのである。アーソルドは女性にもてると同時に、恐れられていた。
「今から話を聞いてくるから、遊んでるか？」

「いいえ。仕事の事ですから、私も聞いておきたいです」
ここに一人で置いて行かれるのは耐え難い。この視線は耐え難いのだ。
「お姉様、お仕事なんですか？」
「ええ。魔動機の修理をしています」
「魔動機の。アーソルドお兄様が仰っていた通りですのね」
「……彼の事、知っているんですか」
「ええ。わたくしはお姉様と入れ違いに入ってきたんです。もう一年早ければ、お姉様とご学友になれましたのに」
つまりはイゼアという名前から、アーソルドまで行き着いて彼から色々と聞いたのだ。無謀すぎて、反省しているようには見えなかった。
アーソルドは煩い女の子は嫌いなはずだ。煩いと怒鳴り付けるぐらいのことをしていてもおかしくはない。
「リアンナ、彼にはあまり近づかない方がいいですよ。凶悪な人ですから」
「誰が凶悪だ」
言葉とともに人の後頭部を掴み力を入れてくる。振り返るまでもなくアーソルドだと分かるので、無抵抗でマナラを見つめた。
「……イゼア、大人の話をしてくるから、終わるまで遊んでいろ」

「ああ、マナラさん見捨てないでっ」
しかしマナラは無情にも行ってしまう。師に見捨てられ、心の中で涙した。
しかし、この状況をどうすべきか。
イゼアはアーソルドの手から逃れて、どこに行けば平穏を手に入れられるか。考えどもまったく思い浮かばず、現状に甘んじる事にした。
選択肢が、それしかないのだ。
「アーソルドお兄様、お姉様にひどい事をなさらないで」
リアンナの訴えに、アーソルドの手が離れる。
「なぜお前は女のくせに女に興味を持たれている？」
「知りません」
「なぜわざわざ男装などしてくる」
「別にそんなつもりはありませんが。動きやすい服装をしているだけです。だいたい、くれたのはアーソルド様ですよ」
アーソルドが沈黙する。
「早く髪を伸ばせ。紹介しろとか言われるから迷惑だ」
誰に、とは聞けなかった。もしも男だったら、殴って終わりだろう。彼はイゼアには容赦なく髪を引っ張るが、普通の女の子には、その程度の事ではさすがに手をあげない。

「私だって、好きで髪が短いわけじゃないんです」
髪など自然に伸びる物をどうにかしろと言われても無理に決まっている。
「長髪のお姉様もきっと素敵なんでしょうね」
リアンナは頬を赤らめて擦り寄ってくる。好かれるのはいいが、同性にこんな事をされたのは初めてで戸惑う。女の子同士は気軽に密着するというが、これがそうなのだろうか。
幼い頃から近所に住むアーソルドに、奴隷のように扱われてきたので、普通の女の子との接し方というのが分からないのだ。
悩んでいると、さきほどアーソルドが来た方向からアランまでやってくるのが見えた。
「あ、やっぱりイゼアだ」
「どういう意味ですか」
「金髪の美少年が来たって女子が騒いでいたから、何となくお前を思い出した」
「どういう意味ですか!?」
「男に見えたんだろう」
アランのいいところは嘘をつかない素直なところだ。
「でも、ついこの前までここにいたのに、外から来ると騒がれるというのは不思議だな、なぜだ？」
「そんな事、私に聞かれても分かりません」

それが分かるなら、イゼアはこのように悩んだりはしない。
「外から招かれたエリートだと皆が思っているんです。その上お姉様は本当に凛々しくていらっしゃるから、皆が騒ぐのも当然ですわ」
「り……凛々しい」
「ええ、とっても素敵。理想の女性です。まるでアルス様のようです」
アルスとは実戦体術と付属魔法の教師だ。戦闘特化した魔道士なので、髪を短く切り、上背があるので、男装の麗人と騒がれている、人気の高い教師だ。もちろんみんな女性と知っていて、格好いいと騒いでいる。同性同士の安心感が、彼女たちを気楽に騒がせるのかもしれない。
「イゼアお姉様、カフェでお茶でもしませんか」
「そ、そうですね。ここで立っているのも何ですし」
道の真ん中で突っ立って女の子達に見られるのも何だかおかしな感じだ。マナラの話が終わるまで、何か甘い物でも食べていた方が気が紛れるだろう。
エムラドも人数が多いため、学食以外にもカフェが存在する。ここのデザートは美味しく、イゼアは年に数回のささやかな楽しみとしていた。時々、アーソルドがおごってくれたりした時は、思い切り食べた。
今のイゼアは、ドレスを買う金はないが、甘い物を食べる程の金はある。前から食べたかったケーキと紅茶を自分の金で頼むというのは、なかなか気分がいい。これに関しては気分はい

いのだが、このカフェはいつから人が並ぶほど人気になったのだろうかと疑問に思った。休日で暇だとしたら、普通は街に買い物にでも行った方が健全だ。

リアンナの友人らしい女の子達が周囲にたかっているし、元クラスメイトもいる。

理解不能だった。

「イゼアさんの事はみんな心配していたの。元気そうで本当に嬉しいわ」

「アーソルド様が情けないから、苦労をしたそうねぇ」

彼女達はちらとアーソルドを見た。

彼女達は彼のせいで中退したと思っているらしい。

「た、確かに僕のせいでもあるが、先走ったこいつの兄が悪い。僕の所に来ていたら握りつぶしていたぞ。僕がなぜイゼアを妾にしなければならないんだ。僕はそんな不誠実な事をする趣味は無い。そういう事はもっと、ちゃんとだな……」

言い訳じみた事を言いながら、アーソルドはちらりとイゼアを見た。妾にするつもりは無いから戻ってこいと言いたいのかもしれない。

「……何にしても、皆さんも変わりなく何よりです」

元クラスメイトは頬を染めて顔を背ける。何だろうか、この反応は。

「イゼアは、ますます美しくなった気がするわ」

「……そーですか？」

薄汚れた気がするのだが、アーソルドの服のせいだろうか。兄の服よりも遥かに上等である。
「不愉快だ」
アーソルドが呟いた。
「お前達はこれが女だと知っているだろう」
「だからいいんじゃないですか」
誰かが言う。
なぜ女だからいいのか理解できない。
「……今、男装の麗人が出てくる小説が流行っているそうだ」
アランが天井を見て呟いた。何かいるのだろう。それで少女の何人か離れていく。彼が嫌われているわけではないのだが、彼は恐れられている。幽霊は誰だって怖い。イゼアのいた頃なら蜘蛛の子を散らしたように逃げていたのだが、さすがに慣れてしまったのかもしれない。
「ああ、アルス先生がいらしたわっ」
セファインとアルスが並んでこちらに来ていた。どちらかというと、女生徒に押されてこちらに来るよう仕向けられている。
「イゼア、久しぶりだね。大きくなって」
「目に見えて分かるほど大きくなんてなっていません」
「そう？　しっかりした感じがするからかな。少し大人っぽくなった？」



「不必要な苦労はしていますから」
「マナラの世話はある意味大変だろ。素直な子だけど、言わなきゃやらないというか、手間が掛からないんだか掛かるんだか」
アルスは昔の事を思い出してか、小さくため息をついた。
彼女はセファインと一緒にマナラの弟子入りの事を考えてくれた教師の一人で、マナラともそれなりに交流があるらしい。
「そういえば、そのマナラはどうした？」
「お仕事の事で塔長様とお話し中です」
セファインはマナラを気にして周囲を見回し、イゼアの言葉に落胆の色を見せた。イゼアは色々な意味で複雑な心境になる。本人達は何でもなさそうな事を言うが、とてもただの友人に対する態度ではないように見えるのだ。
「ところで、なんでこんなに混んでるんだ、ここ」
アルスは周囲を見回して言う。
「さあ。新しい菓子でも出たのか？」
セファインも不思議そうに首を傾げた。
「満席みたいだし、帰るか？」
「待ってください！」

女生徒達が帰ろうとしたアルスにしがみついて首を横に振る。
「セファイン先生とアーソルドお兄様達だけ帰ってください。女性ばかりの所ですから」
リアンナが大胆な事をさらりと言う。帰れと言われた男達は顔を見合わせ、アランが再び空を見た。
「男装の麗人の二人は、黒髪と金髪だそうだ」
黒はアルス、金はイゼア。
イゼアは頭が痛くなってきた。
「ごめんなぁ、イゼア。変な事に付き合わせて」
半強制的に輪の中心――イゼアの正面に座らされたアルスは手を合わせて言う。
「先生も、大変ですね……」
「昔から似たような扱い受けてきたからな。私だって、昔は女の子してたんだけどなぁ」
女は恐い。イゼアは何となくそう思う。
結局、男達は追い出された。居たたまれなくなって出て行ったとも、馬鹿らしくなって出て行ったともとれる。巻き込まれたくないという気持ちが一番だろう。
「こ……ここのケーキは美味しいですよね」
「そうだな。美味しいな。イゼアは甘い物は苦手だと思っていた」
「贅沢品ですから」

「……生活はどうだ」
「毎日魔動機と向き合っていますよ。マナラさんみたいにならないように気をつけながら」
「セファインが心配している。次会ったらお前が痩せ細ってクマができていたらどうしようと」
まだ心配しているのだ。やろうと思っても、マナラの真似など出来るはずもないのに。
「食事には気をつけていますよ。女を捨てる気はないですから」
「それがいい。大人になれば女らしくもなるだろうから」
彼女に言われても、ちっとも勇気づけられなかった。
「イゼアも周囲の事はあまり気にしない方がいい。彼女たちは毛色の違う綺麗な物を見るのが好きなんだよ」
「理屈は……まぁ、なんとか分かりますが……、私はこの前までここにいたんですけど、なんで今さらなんでしょうね」
アルスは平気なのだろうか、この扱い。その視線。
昔は女性らしい格好をしていたらしいが、周囲に流されてこうなったと聞いている。
「髪を切ってからの君は人気があったよ。すぐに出て行ってしまったから自覚しなかっただろうけど」
「たかが髪を切っただけで」
アーソルドがいたから絡まれる事もなかったのだが、ほとんど無視されていた。話しかけら

れたのは、ノートを見せて欲しい時か、勉強を教えて欲しい時だけだった。だからここで囲んでいるのは、元クラスメイトでさえ、ほとんど話した事すらない人ばかりだ。ひょっとしたら、その頃から男扱いを受けていたのかもしれない。

「髪型がとってもそっくりなんです」

イゼアの思考を遮るように、リアンナが頬に手を当てて首を振る。

「髪型、ですか」

「そうなんです。輝く金の髪に、剣を下げ、不思議な力を使うんです」

彼女の前で魔力を使った。騒ぐには実にくだらない理由だ。

「あれはただの魔力の塊ですよ」

「アーソルドお兄様にやってもらったら、そよ風のようなものしか出ませんでした」

「魔力と年季が違いますから」

妖魔並みだとか言われた事もある。アーソルドの倍以上は確実にある。魔法さえ使えれば、アーソルド以上の魔道士になるだろう。ひょっとしたら塔長よりもすごい魔道士になれるかもしれない。

しかしその可能性は全て仮定、願望でしかない。太陽神本人にすら、この呪いは解けなかったのだから。

「お姉様は特別な力を持ったために太陽神様に呪われたんですね。素敵です」

「違いますよ。先祖に月神の現し身がいただけです。その呪いが長々と残っているだけだそうです」

「ますます素敵。呪いを解く事は不可能なのでしょうか」

「この前解いてもらおうとしたら無理でした。時間がたちすぎて神様にも解けないほどややこしくなっているみたいです」

本人に解いてもらおうとしたとは、さすがに公表できる事ではない。もしも言ったら最後、彼女たちはさらに熱狂し、サンプル扱いしようとする研究者も後を絶たないだろう。

「アルス先生にも無理なんですか？」

「キーオの言っていた事が本当なら手はない」

太陽神が現れたのは、一部の教師達の間では知られている事なのだろう。事が事なので、マナラがセファインに塔長への言伝を頼んでいる。太陽神が人間に接触するという事は、記録の中はおろか、おとぎ話の中でもそうある事ではないのだ。

これを、世間では特別というのだろうか。イゼアはそんな特別は求めていなかった。ただ不自由なだけの特別など、欲しいと思う方がどうかしている。イゼアの特別は、太陽神の呪いカスに過ぎないのだから。

「気を落とすなイゼア。今の仕事は楽しいだろ」

「ええ。とても楽しいです。魔法など使えなくても、道具が代わりになりますから。魔力の行

き場も出来ました」

魔石がなくともイゼアの魔力があれば動かせる。

無駄にある魔力の使い道。それを使う道具。特にゼイレムの持ってくる道具は大好きだ。複雑で、多くの魔力を必要とする。魔石がなくなっていると、イゼアがいないと動けない物達。イゼアが触れれば簡単に動ける事を証明してやれる。

必要とされているようで、楽しく嬉しかった。

「時々こうして遊びに来て、元気な姿を見せてくれよ。マナラを連れて」

「アルス先生もマナラさんと仲がよかったんですか？」

マナラも数年前に塔を出て独立したのだが、彼女もあまりいい思い出はなさそうな雰囲気だった。

「悪くはなかったけど、キーオを介してしか話さなかったな。彼女は昔、けっこう気が弱かったから。親しくなったのは、独立してあなってから」

昔は綺麗な女の子だったとセファインは言っていた。ああなったのも半分以上は不甲斐ない自分のせいだと。

だからその負い目があるから告白をしなかったのかもしれない。ああなるとは思わずに。

「いつも俯いた頭でっかちのお嬢様が、家を捨てて塔も出て、やりたい事を見つけるなんて本当に尊敬するよ。私はただ流されて今こうしているからな。教師をしているのも、塔長に頼ま

れたからだしさ。引き止められてるのに、何も出ていかなくともって、あの時は思ったよ」

マナラほど優秀な生徒なら、引き止められて当然だ。

「私もマナラさんの事は心から尊敬しています。独学で、あの若さであなれるなんて、信じられない」

特別というなら彼女こそ特別だ。特殊能力などはないが、そんな力がある人間よりも、よほどすごいし得難い気がした。

「塔は才能を引き出すだけでなく、人によっては枷にもなる。マナラみたいに自由になってどんどん高みに行ってしまう人間がいる。塔はそういう特殊な才能を伸ばしてやる事がなかなか出来ない。マナラに塔に戻ってくれれば研究費用を出そうかと提案した事もあったそうだけど、金の問題じゃないと一蹴されたってさ」

実にマナラらしい。

見返してやるとかそういう事よりも、楽しい事を続けられればそれでいいと思っている。

イゼアもそれに異存はない。塔にいるよりもマナラの元にいる方がためになる。それを将来どう使うかは分からないが、今はこれが楽しいと思えるようになった。

周りに集まる少女達の憧憬が向けられるのは小説の中の登場人物らしいが、イゼアにとってはそれがマナラだ。王子様のような男性に迎えに来て欲しいと思っていた事もある。しかし今はそんな馬鹿げた気持ちよりも、マナラのような人間になりたいという気持ちの方が大きい。

もちろん、見た目と生活態度はまったく参考にしたくない。マナラのように仕事が出来て、普通に飲み食いして、普通に睡眠を取って、普通に女らしくもなりたいのだ。

目標があれば、やる気も湧いてくる。

イゼアはケーキの最後の一口分をフォークに刺した。

「イゼア、話は終わったぞ……って何でここにこんなに人がいるんだ？」

戸惑うマナラの声を人垣の向こう側に聞き、イゼアは立ち上がってケーキを口にした。

ここからは仕事兼勉強の時間だ。

「リアンナ、先生。私は行きます」

「お姉様、行ってらっしゃいませ。お仕事頑張ってください」

リアンナは瞳をキラキラさせて手を振った。

マナラがもっと美人だったらよかったのにと言う声も聞こえるが、イゼアもそれは賛成だ。

彼女が美人であるというのは、健康な体つきになるという事を意味している。

もしも彼女が出会った時から美人であれば、マナラはイゼアの中で完璧な、この少女達が物語に夢見るような気持ちで、マナラを見てしまっていただろう。

そう思うと、少しだけ複雑な気持ちになる。

我が師にもう一掴みの憧憬を望む事だけは未だに止められない、信奉者にもなりきれぬ愚かな自分を自覚して。

# 7章　親切は災い

ベッドの中で夢と現をたゆたう心地よさの中に沈んでいたイゼアは、びくりと身体を跳ね上がらせ、文字通り飛び起きた。意識は一気に浮上し、快くもないがはっきりした目覚めとともに、顔を思い切り顰めた。快くどころか、最悪の寝起きだ。

「な、何!?　何なの!?」

痛んだ。

痛んだ気がしたのだ、首の後ろを中心に。

しかし今は痛くない。熱くもない。一瞬の確かな激痛は、飛び跳ねる間に消えていた。いや、消えたのではなく、最初の一撃が強すぎて消えたように感じているだけで、今も痛みはある。

窓から見えるのは、わずかに顔を見せた太陽。

不吉な予感がして身震いする。しかしここで震えていても何も解決しない。

イゼアはベッドから抜け出し、多少はマシな部屋着に着替えて、意を決して一階に下りた。

深呼吸をして工房に入ると、明かりもないのになぜか明るい室内で、踏ん反り返って待ってい

たのは、予感していた通り太陽神ラーハだった。
　見なかった事にして去っていこうかとも思ったが、彼はほんの少しだけしか顔を出していないイゼアをじっと見つめ返してきた。
「……おはようございまぁす」
「おはよう」
　イゼアは怯えながらも、腰が引けないように気をつけて部屋の中に入る。彼の相手をするのは緊張する。一族郎党憎まれているわけではないと判明した今でも、苦手意識はどうしても消える事はない。
「お茶なんてどうですか」
「いらん」
　二人きり。マナラはもう少し寝ているだろう。イゼアが眠るように言ったのだ。
　こんな早朝からは牛乳配達のおじさんぐらいしか来ない。さすがに巻き込めない赤の他人であり、ここは一人で切り抜けるしかない。
「ど、どうなさったんです。まだ何か……」
　彼はゆっくり古びた椅子から立ち上がり、黄金のような、炎のような、不思議な色合いの瞳でイゼアを見据える。こうしていると太陽神としての威厳はある。その太陽神が何の用でこんな所にまたやって来たのか、想像もつかない。ゼイレムに変わった様子はなく、特別な贈り物

も一度だけだ。

「聞きたい事がある」

イゼアは目を見開いて硬直した。

太陽神が人間の小娘に聞きたい事というのは何だろうか。答えられるかどうか不安だったが、とりあえず怒っているわけではなさそうなので、少しだけ安心した。怒っていたらその場で殺されていただろう。

少し自信が持てた。大丈夫だ、うまくやれると自分に言い聞かせる。

「私に答えられる事でしたら」

ラーハは頷き、再び椅子に座る。

イゼアはその向かい側に腰を下ろし、彼の言葉を待った。

「以前、私の事を最低だと言ったな」

「申し訳ありませんでした、申し訳ありませんでした、申し訳ありませんでした。あの時はつい」

「よい」

立ち上がって頭を下げるイゼアへとラーハが言う。あの暴言に怒っているわけではないのだ。怖いが少し安心する。

「だから振られるのだと言っていたな」

「申し訳ありませんでした、申し訳ありませんでした、申し訳ありませんでした。あの時はつい」

「だからよいと言っている」

イゼアはビクビク震えてラーハを見る。怒っているようにも見えないが、そもそも何を考えているのかよく分からないのだから、見た目がどうでも意味はない。

ではなぜこのような確認をしてイゼアの小さな心臓をすくみ上がらせるのか、その理由が理解できない。やはり根に持っているのだろうか。

なぜ普通の人間である自分がこんな目に遭っているのか、運命の女神が目の前にいたらきっと問い質していた事だろう。

誰でもいいからこの状況から助けて欲しいと切に願った。

これからどうなるかと思うと、イゼアはどうしていいのか分からず、つい口をつぐんでしまう。

「なぜそう思った」

「……なぜって」

イゼアは視線を逸らし言葉が見つからずに口を閉ざす。

「本音を聞きたい」

「な、なぜですか」

ラーハはややためらい、ため息をついた。

「以前、他の女にもそう言われた」

どうやら彼のトラウマに塩を振りかけすり込んでしまったようだ。血の気が引いていき、目の前が白くなる。倒れそうになったが、それだけは何とか踏みとどまった。

「あの時はそれほど気にとめていなかった言葉だが、よく考えると自分にも何か問題があったんではないかと」

「……は、反省したんですか？」

「うむ。だから、なぜそう思ったのか……そう、誤魔化しのない言葉で聞きたい」

何とも言えない奇妙な気持ちになった。しっくり来ないというか、違和感があるというか、信じられないというか、しかしああやっぱりとも思う自分がいた。

「でもなんで私に」

「他の者は一様に同じ事を言う。参考にならない」

神様でも反省するのだと驚き、しかもそれが我が道を行く事で有名なラーハなのだからその事実にさらに驚く。そして神様やら精霊やらも驚いて、無難な答えで誤魔化したという事実が、涙すら誘った。

彼もようやくその異常性の壁にぶち当たったらしい。

その全てが原因で、彼の悩みは解決せず、ただ時だけが流れる。だから違和感がありながらも、どこか納得してしまうような結果を招いたのだ。

「で、何が気になったのだ」
イゼアは言葉に悩む。無難な答えはかえって彼を怒らせる。しかし下手な言葉を口にするのは恐ろしい。悩みに悩んで、イゼアは腹を決めた。
「たぶん、それが分からないのがまず第一の問題です」
「なぜだ」
「弱者の気持ちが理解出来ないのは仕方がありませんが、何となくでも分からないのが問題なんです。人間でも何となく他人の気持ちらしきものを想像しますけど、ラーハ様はそれをなさらない。それが問題です」
彼は顔を顰めて腕を組む。
理解できないのだろう。そうでなければこのような事を聞きに来ない。だから、それを理解させるのは、容易ではない。
「まあ……こう言うのも何ですが、ラーハ様が理解する必要はないんじゃないですか？」
「それでは解決にならないだろう」
「しかし、そのような事を尋ねて回ると、配下の方々が怯えるのではないでしょうか」
ラーハの言葉から、容易に想像できた。イゼアも含めて、聞かれた皆が怯えたのだ。そして真実は語られない。
「なぜ怯えるのだ」

彼は自分が部下にあまり好かれないタイプの上司だと自覚がないようだ。自覚があれば、こんな所に来ないから、当然なのかもしれない。

「彼らに答えがないからですよ。明確な答えがあるならともかく、うっかり否定的な事を言ってしまったら、不興を買うのではないかと恐れるんです。私はもう失言をしてしまったので素直に言いますが、彼らが恐れる理由も分からないようなラーハ様へと、誰が答えを差し上げる事が出来ましょう」

彼の勘気に触れるのは恐ろしい。激しさを知っているからこそ、恐ろしくてたまらないのだ。

なのにラーハは、そんな怯える配下達と、月神アシュターは別だと考えている。

「だけどそんなラーハ様は太陽としては理想です。だから分かる必要はないと申し上げました」

「意味が分からない。他人の気持ちの理解できない私の何が理想なのだ？」

とりあえず、ここまでの中で言った事は理解してくれている上に、怒っていないので安心して続けた。

「人は自然に感謝と畏怖を向けます。自然は恵みも苦しみも与えるからです。他の一級神の方は性質上、その下々と触れ合う事も度々ありますが、太陽が触れ合う事はありません」

「太陽は大抵の場所で、一日の半分は空にいるだろう」

「しかし太陽は下々の気持ちなど考えず、ただひたすらに、等しい恩恵と恐怖を与えていればいい存在です。今のラーハ様の有り様は実に太陽らしく感じます。誰かの言葉も意志も何も視

界に入れずに世界を育む事がラーハ様らしいあり方で、それを周りの誰もが知っているんです。だから余計に答えを出せなくなるのだと思います。答えは貴方の有り様を否定する事ですから」

彼は今こんな所に、こんなくだらない理由でいたとしても、神の中でも頂点に立つ存在だ。そんな彼に下位の神や精霊が意見を出せるはずがない。上下関係は絶対で、それを本人の気持ちがどうであれ覆せる事ではない。

その上、彼は孤高の太陽。誰も何も言えない存在。そうであってこそのラーハだ。

反省するラーハというのが、彼らからすればおかしいのだ。イゼアが思うのだから、身内はパニックになっていただろう。

彼はしばし沈黙し、立ち上がった。

「帰る」

「そうですか。ごきげんよう」

イゼアは手を振って見送り、気配が消えると椅子から崩れ落ちた。

彼がもうイゼアの生きているうちに『悩み事を抱える』などという異常事態が起きないよう、運命の女神に本気で祈りを捧げた。どうにもその女神に弄ばれている気もするが、とりあえずは太陽神を満足させる事が出来たようで、感謝しておかないともっと呪われる可能性もあり、手を合わせてとにかく祈った。

翌日の日が昇らぬ時間、また首の後ろがほんの少しだけ痛み、目を開いた。

あまり痛くはないので、ラーハが来たのではなさそうだ。この痛みはゼイレムが来たのだろう。なぜ痛むのかは分からないが、ラーハに関わってから、ゼイレムでも少し痛むようになったのだ。呪いが強まったのではないかと、少し不安だった。

イゼアはベッドを出て階段を下りた。

ゼイレムの姿を確認したら、用をたして部屋に帰ろうと決めた時、部屋に明かりがあるのを見て、イゼアは考えを改めた。ゼイレムは明かりはつけない。マナラもゼイレムの前で深夜作業をしない。

ならばやはりラーハかとも思ったが、まだ朝日は出ていなかったはずだと思い出す。彼は朝日が出てからしか姿を見せていない。朝日が出ていないから痛みが少ないのだろうか。

別人である可能性も考慮して攻撃の準備をして部屋を覗(のぞ)くと、疲れた様子のマナラと魔動機(まどうき)を手にして立つ見知らぬ黒い男が見えた。

黒。

「ま、マナラさん!?」

イゼアが慌てて部屋に飛び込むと、二人は驚いて振り返った。
そして男の姿を見て、イゼアは目を見開く。無駄に整った姿形に、深い闇を思わせる黒い瞳。
明らかに人間ではない。新しい神か何かだ。
「イゼア、起こしたか、すまないな。この方は死神ターラ様だそうだ」
「はっ？　今何て……」
「死神のターラ様だ。話してみたら驚くほど普通の方のようだから怯える事はない」
マナラが言うので少し安心すると同時に、イゼアは泣きたくなった。
太陽神の次は死神だ。
「え……私達死ぬんですか？」
死神が迎えに来るなど、それしかないではないか。冗談ではない。
「人間をわざわざターラ様が直々に迎えに来るはずがないだろ。聞きたい事があるらしい」
そう言われて、イゼアは安堵した。
ラーハとは別の意味で外に出てこない事で有名な神だ。死者の安寧を祈り導く、仕事熱心すぎると評判の神だ。わざわざ今生きている人間を迎えに来るはずもない。
それに死神と言えば、太陽神と並ぶ一級神なのだ。
そう、ラーハと並ぶ、ラーハとは対のような立場の神である。
「……ラーハ様の事ですか」

「察しがいい」

ターラが怖そうな顔を少し笑みにした。そうするととても優しそうに見える。

察しも何も、死神が来るような理由があるとすれば、それ以外に心当たりが無い。

「あの男が人間に興味を持った上に何度も通うなど前例がない。何をした？　彼女に聞いても答えが曖昧だ」

先日またラーハが来た事は、彼女には伝えていない。知らないのも当然だ。

「ラーハ様はただゼイレム様の様子を気にしていただけですよ。あとは……ただ……なんというか、そう、悩み相談に来ただけです。誰に聞いてもちゃんと答えないらしいので」

「そ……相談？　何の相談だ？」

「たぶん……恋愛相談です」

きっとそうなのだろう。あれは世間で言う恋愛相談だ。イゼアは生まれて初めてそんな相談をされたような気がする。イゼアはそんな感情とは無縁に生きていた。ラーハは相談する相手を間違えているのだ。色恋とどこまでも遠い師弟に、何が答えられると思っているのだろうか。

「れ……れんあいとは、世間一般で言う愛だの恋だのというあれか」

「その恋愛だと思います」

自分で言っていて空しくなったが、事実なのだから仕方がない。

「あと、いくばくかの責任感……でしょうか。私の一族が、月神様関係でラーハ様に呪われて

いて」

鈍く痛む後ろ首に触れる。ラーハの魔力だけに反応するのではなく、他の神にも多少は反応するようで厄介だ。ターラの方が力が強いせいか、ゼイレムが近くにいるよりは痛む。

イゼアの様子を見て、ターラが後ろに回り込んで、首の後ろを覗き込み、小さく唸る。

「また厄介な呪いを。アシュター絡みだと力が入るから、あと五代は続く。不憫な」

ターラの言葉に、イゼアは絶望というものを覚えた。魔力が復活したから次の代はひょっとしたらと言われていたのに、さらに五代続くとは。

「どうにもならないものですか？」

「どうにか……か。考えてみよう」

それから彼はマナラと少しだけ話して、日が昇る時間になると帰って行った。彼もマナラの生態に興味を持ったらしく、魔動機を観察しながら、人間にとって健康と睡眠とバランスのいい食事がどれだけ大切かを切々と語ってくれていた。彼は死と夜の神だからだ。

ターラがとても素晴らしい人格者の神様だという事だけは、それを見て理解した。

そしてマナラは、神様から見てもまだ不健康なのだ。

明日からもっと努力して、彼女を健康美人に戻そうと決意した。

いつものように工房にて、いつものように具神ゼイレムが来ていた。
ここに来てはや二ヶ月、すっかり慣れたこの光景だ。
今ではゼイレムがいるだけで少し首の後ろがうずくようになり、集中力のいる仕事なので身が入らない。
だから彼が来た時は、仕方がないので湯を沸かしてお茶を淹れる。眠気覚ましになる香りのよいお茶と、目にいいお茶と、健康にいいお茶を混ぜて湯をポットに注ぐ。葉が踊り、トレイに載せて先週買ったカップと一緒に持っていくと、程よく色が出て香りを部屋に満たした。
「マナラさん、一服しましょう。それとも何か面白い物でもありました？」
「特にはない。もちろん世間からしたら珍しい物だけどな」
マナラは手をぬれタオルで拭いて、イゼアが淹れたお茶を飲む。彼女はこのブレンド茶を気に入っていて、これを出すと手を止めてくれるのだ。
「ゼイレム様もどうぞ」
意識がおぼろな神様でも、何となく匂いとか味ぐらいは分かるだろう。楽しめるかどうかは知らないが、何となくでも感じてもらえればいい。
イゼアも椅子に座り、舌に程よい温かさのお茶を飲む。
実はアーソルドの実家の領地で栽培されているもので、基本的なブレンドの配合も教えても

らったのだ。家が近いとはいえ、なぜ家来扱いされていたのかすら、もう覚えていないほどの付き合いだ。イゼアが気に入ったためか、アーソルドの母親が毎年山のように送ってくれて、お茶は買った事がなかった。エムラドにいた頃は、手慣れたイゼアが彼のお茶係にされて、口うるさい彼に鍛えられ、お茶を淹れる腕はかなり上達した。アーソルドの母は、娘がいないからイゼアを可愛がっていたのだが、喧嘩を売るような真似をしてしまったというのに、今も茶葉をもらえるのが不思議でならない。

「はあ……落ち着く」

「そうだな。落ち……」

マナラがカップを取り落とし、無惨な音が響く。

せっかくセットで買ったばかりのカップがはや一つ壊れた。自分達が使うカップの予備どころか、来客用のティーセットもないため、買ってもらったばかりなのに、もう割れた。安物だが、とても気に入っていたのに割れた。

彼女の反応の理由は、その視線を追わずとも理解できた。理解できてしまうこの呪い持ちの身体が憎かった。

「ラーハ様」

イゼアが名を口にしながら振り向くと、ラーハが彼女を見下ろしていた。まだ日が出ている時間なので彼が来ても不思議ではない。

「どうしたんですか？　また質問ですか？　私に聞いても答えられませんよ。人生経験なんて薄っぺらですから」

彼は首を横に振る。

「ターラに言われた。むきになって叩いているから、巻き添えを食らう者がいると。その時お前の言っていた事を思い出した」

「そうですか」

他人の気持ちを理解できなくとも、その気持ちを理解しようという努力が大切な事を、分かってくれたのだとしたら嬉しい。今まで本当に誰も言えなかった事なのだろう。

「だから、責任を果たそうと思う」

「いや、以前も申しましたように、あれは遠慮させていただきます」

「完全に無効化しようとするから無理がある。だからいくつかの方法を考えた」

彼は胸を張り、続きを促して欲しそうにイゼアを見た。

きっと本当に考えた結果、出した答えなのだろう。期待できないが、聞きもせずに却下するのでは悪い事をしているような気分になる。彼は子供のように純粋な気持ちで行動していると分かるから。

「ど……どんな、ですか？」

すると彼はうむと頷いた。

「手は細かく言えばいくつかあるが、基本的には二つだ。呪いの方向性を変える。上書きする。どちらがいい」
「どちらも同じ事のような気がします」
違いは理解できるのだが、される事は似たようなものだろう。
痛いに決まっている。
「痛いのは嫌です」
「痛みのない方法か……」
痛い方法が普通に交じっていたのだろう。言ってよかった。また無理やり実験されてはたまらない。あの痛みはもう嫌だ。本当に痛いのだ。
もちろん痛くない方法も、色々と不安がある。
「副作用のある方法も嫌です」
「贅沢な娘だな」
言ってよかった。
いやむしろ、言わないと何をされるか分からない。不安材料は全て口にして、本当に安全か確かめ、少しでも不安な場合は何が何でも追い返す。
「現状は魔法が使えない、神様が近づくと少しだけ痛むだけです。生活に支障はありません。悪化させるような事だけは嫌です」

「なぜ私が悪化をさせるのだ」
「あれ以来、神様が……以前は平気だったゼイレム様が近くにいても少し痛むようになりました」
十分悪化していると言っていいはずだ。
「ふむ。なら、上書きにするか。それならひどくなる事はない。むしろ魔力はますます上がるし、魔法も使えるようになるだろう。痛みもなくなる」
話だけ聞くといい事のように思える。しかし世の中うまい話ばかりではない。ここで信じる者が、騙されて全て奪い取られるのだ。
「本当にですか？」
「なぜそれほど疑う」
「生き物は痛みに弱いんです。痛みとか恐怖で自害までするんです」
彼は不服そうに唇を歪める。疑われているのが不服なのか、理解できないからなのかは分からない。分かる必要はないだろう。イゼアはカウンセラーではないし、相談役になるつもりもない。
「私が口を挟むのもなんですが……」
今まで黙っていたマナラが立ち上がってラーハと向き合う。
「自己満足だけなら、手を出すのはやめてください。これ以上神と関わって人生を狂わせては

あまりにも哀れ。生意気な事ばかり申しておりますが、彼女はまだ子供なのです」

「意地になっているような事はない。自分の影響がここまで残るとは思わなかった。浄化する必要がある。本来なら得手とする者にやらせるべきなのだが、私の力を打ち消すのは無理だと断られた」

彼の怨念がこもっていそうな呪いだ。易々と解呪できるはずがない。神様でさえさじを投げたのだ。イゼアが抗うだけ無駄だった。

これをどうにか出来るのは、本当にラーハ一人なのだ。

彼は今まで以上に自信に充ち満ちている。思いつきではなく、無駄にある暇な時間を有効活用し、考えてきたのだろう。うぬぼれるわけではないが、彼の思考はイゼアの言葉が占めていたはずだ。

「本当に痛みも副作用もなくできるのなら、お願いいたします。本来咲かせるべき才能が全て封じられ、蔑まれるのは見ている方が胸に悪い」

ラーハはうむと頷く。

どこまで打ち消されるのか。

どこまで出来るようになるのか。

ようやくこの不自然な状態が終わる事を自覚すると、恐怖が薄れ、喜びが溢れてくる。

「本当に、信じても大丈夫ですか？」

「無論」
「じゃあ……お願いします」
イゼアは頭を下げる。ラーハは恐る恐る頭を上げたイゼアの首に手を置き——服のボタンを外される。
「ちょ」
思わず後退して胸元を押さえると、ラーハはやり場のない手を見つめ、引っ込めた。
「脱げ」
「最初から口で言ってください！」
神様相手に恥ずかしがるほどうぬぼれてはいない。どうせ背ばかり伸びて女らしい身体とは縁がない。隠すほどのものではないと、一笑されるような事はしない。
ただ、いきなり脱がされるのは、勘弁して欲しい。これでも身体も中身も女の子なのだ。
戸惑いながら上着とシャツを脱ぎ、肌着姿になるとイゼアはラーハを見上げる。
「それでいい」
ラーハの言葉に少しほっとした。こんな場所で裸になれと言われても少し困る。
「すぐに終わる。人間のような儀式など必要はない」
ラーハはイゼアの肌着と肌の隙間に少し指を入れ、ちょうど胸の真ん中に指先で触れる。胸が大きかったらいやらしい感じもするだろうが、無理やり作らなければ谷間などないので問題

ない。

問題あるような肉体美が欲しかった。

触れられると、一瞬、首の後ろに痛みが走った。

指が置かれた部分を中心に熱を帯びて広がる。不快ではない、温かく心地よい熱。

熱を追うように白い模様が広がり、首の後ろの痛みが少し強まるが、耐えられないほどではない。

首の後ろから肩へと黒い模様が広がるが、白に飲み込まれ、白が黒を全て飲み込むと、やがてラーハの指が置かれた部分に戻っていく。

彼が指を置いていた場所に、ラーハの髪のような色をした、わずかに輝く太陽の紋章が刻まれていた。

「……なんですか、これ」

綺麗だが、光っているのが気にくわない。上書きだと言っていたが、首の後ろはどうなったのかが気になった。魔力も強まった感じはなく、呪いがどうなったのか不安になって彼を見上げると、自信たっぷりの麗しい笑みが不安を掻き立てる。

「祝福の印だ」

イゼアは考える。

神の祝福。

それを受けるのは普通は神官だ。しかも直接仕えるような、ものすごい、一部の選ばれた神官だけだ。彼等は神の直属の配下となる。

「あれ……？」

おかしい。何かひっかかる。

「ラーハ様、それは呪いとどう違うので？」

「光栄に思え」

気持ち的な問題だけが違う。

しかしもっと大切な事があるはずだ。

「本来なら私の神殿に仕える、私にすべてを捧げた者に付ける印だが、特別に自由を許そう」

聞いているとものすごく破格の扱いだ。しかし、問題はそこではない。

考えたくない事実がすぐ手の届く場所にあるのだが、思考が拒否する。

見たくない、聞きたくない、そう現実を無視しようとするイゼアの目の前で、ラーハは後頭部をはたかれて振り向く。

不機嫌を絵に描いたような死神ターラが立っていた。彼がラーハを叩いたのだ。

生きた人間でこれほど立て続けに、別の理由で引きこもっているこの二人の神を見た人間は、イゼア達だけだろう。

そう思うほど、彼らは滅多に動かない。ラーハは自分勝手で、ターラは仕事熱心で。



「ターラ、仕事はどうした」
「お前の力を感じて配下に任せて飛んできたが……遅かったようだな」
イゼアの胸元で淡く光る、太陽の刻印を見て呟いた。
「ゼイレムの道具の意味が分かるなら、その刻印の意味も分かるだろう。覚悟はあるか？」
意味。
神に仕える。神は永遠。永遠に存在し続ける神に仕え続けるには、劣化しない肉体が必要だ。
イゼアが想像するように、この印は人を不老不死の存在にしてしまう印なのだ。
祝福と称した、ある意味今までよりも質が悪い呪いであり、神へと縛り付ける鎖だった。
「うあ……」
倒れそうになり、マナラが支えてくれた。
目の前にある絶望の谷は深く深く、底がない。
自由をもらってもどうしようもない。
これからそれなりに女性らしくなる予定だったのに、止まってしまうのだ。一人だけ、止まってしまう。いつか一人になり、誰もいなくなる。
「まったく、お前は考えもなしに無責任な事を。お前自身が太陽と生の象徴ゆえ、仕方がないと言えばそうだが、あまりにも考えがない。人が人であるには夜の静寂と安らぎ——死が必要だ。お前の与えたそれは、人を捨てる覚悟のある者のみに施すもの。常人に耐えられるもので

はない」
　イゼアは頭を抱えた。
　そんな覚悟などもちろんない。
　すがるようにマナラを見ると、イゼアと似たような風の彼女がいた。彼女にすがってもどうしようもない。彼女はイゼアよりは年上で頭はいいが、まだ若い普通の人間なのだ。
「た……ターラ様。私、どうすればいいんですか？」
　ラーハはだめだ。任せるとろくでもない事になると身を持って知り、悟った。二度と信じない。彼を信じては絶対にダメだ。
「見せてみろ」
　肌着を指で下げて、胸元を見せる。
　光はまだ治まっていない。
　いかにも神聖な物ですというその主張が憎らしい。
「力を使ったら定着するな」
「……定着していないって事ですか？」
「呪いの分」
　呪いがあったから、さらに強いこの呪いを防いでくれている。あんな呪いにも猫の手ぐらいには役に立つ事があったのだ。

彼の言い方からあまり救いのある言葉には感じなかったが、絶望の谷を真っ逆さまというわけではないようだ。

「力を使うなって事ですか？　だとしたら、今まで魔力だけは全力で放てた分、悪化しているような気がするんですが」

イゼアはちらとラーハを見て呟く。彼は何が不満だとばかりに少しすねている雰囲気だ。

「魔力を放つなという事ではない。それは自分自身の魔力に限る事だろう。使うと問題なのは精霊など他者の力に頼る魔法だ。魔法で他者の力をまったく借りないものは……あまりない」

「って事は、神様が近づくと痛むのがなくなっただけだと思えばいいんですか？」

「今はな。ただの呪いだったら時間をかければどうにか出来た。しかしこれは死を持ってしか取れないぞ」

「……今はって事は、時間がたつとやっぱり定着して不老になるんですか？」

「このまま何もしなければ数週間もあればそうなる」

「す……」

数週間では女性的な成長も出来ないし、成長したとしてもラーハが飽きるまで傀儡人生など嫌だ。ロマンスとか、望まれて決意があっての事ならともかく、くだらない悩み事の相談役などまったく生き甲斐がない。空しさできっと気がおかしくなる。

「私、そんな風に生きていく自信なんてありません」

ターラは押し黙る。
それはつまり、手がないという事を意味する。
「それについてはちゃんと考えてある」
突然ラーハが胸を張って言う。今までが今までなので、素直に喜べない。きっと裏があるに違いない。イゼアは絶望の底で、どうせ解決策にもなっていない彼の言葉を待つ。
未だに彼の言葉に救いを求める自分が情けなかった。
「簡単だ。そっちの魔力なしの女に半分移せばいい」
「他人を巻き込むような事を平然とするなっ！」
イゼアが抗議する間もなくターラが怒鳴りつけ、ラーハは何が不満だとばかりに顔を顰めた。
やはりろくでもない。
「まったくお前という奴はいらぬ事をしていつも騒動を大きくする」
彼は引きこもりのくせにトラブルメーカーのようだ。一番質の悪いタイプである。
「マナラとイゼアでは器が違う。彼女の魔力では、お前の力を入れられたら身体の方が耐えられずに死んでしまう可能性があるだろう。そんな危険を彼女に押しつけるつもりだったのか」
イゼアはその言葉にぎょっとした。ラーハは身勝手な男だが、まさかマナラを犠牲にする方法を考えていたとは、予想の範囲外だ。
「死ぬ？　そんな話は聞いた事がない」

「自分の印を魔力の低い人間に与えた者がいないからだ。お前にとってはイゼアとマナラの魔力の差など大した事はないかもしれないが、神以外の目から見たら、大人と赤子ほどの差だ。お前の加護を移すなど問題外だ。自分のために死ぬかもしれないが犠牲になれなどと、この娘が言うと思うのか」

まったくだ。

マナラには返すべき恩はあっても、仇などない。

「しかし、お前のその無謀な発想のおかげで、一つだけ思いついた」

ターラはちらとイゼアを見て、ため息をつく。

彼の反応から、またろくでもない内容なのだろうが、彼だからこそラーハにされるがままになるよりは幾分かいい状況を作ってくれると信じて、頷いた。

「この方法はあまり勧められるものではない。似たような事なら成功例はあるが、この事例そのものに前例はなく、成功するかどうかも分からない」

彼は方法を口にしない。

「失敗すると？」

「死ぬ」

「そうですよね。神様の力ですもんね」

こんな事になって生きているのも不思議な気がしてきた。マナラなら死ぬのだ。イゼアが生

きているのもけっこう紙一重なのではないだろうかと、恐ろしくなってくる。若くして死ぬのは不本意だ。

「それに関しては、私のさじ加減だ。信頼してもらうしかない」

「大丈夫です。ターラ様は信用しています。加減が上手そうですし」

ラーハの顔つきが不服だとばかりにいっそう険しくなったが、人を実験台にした自覚がない証拠である。何より彼は手加減とかそういうものがいかにも苦手そうだ。

「じゃあ、他に何か問題が？」

「今生はおそらく問題ない。やはり魔法を使われるとバランスが崩れるから今まで通りの生活をしてもらうが、問題は死んだ後だ」

「死んだ後」

魂が消滅するというのは、ないだろう。それなら彼は提案しないはずだ。彼は死を司る神。人の死後を見守る神なのだ。

「転生した時にどうなるかが分からない。力を受け入れずに死を迎えた前例がない。それだけでも影響がある可能性が高い。私がしようとしているのは、それをさらに歪める可能性がある」

ターラはラーハと違い親切に教えてくれた。欠点を隠されては、また判断を誤ってしまう。

「どんな影響を受けるか、私にははっきりとは言えないが、その手の影響の一例としては、転

生出来ずに我らが母の下で数百年眠り続けるというのが多いな」

彼らの言う母とは、創造主（そうぞうしゅ）の事だ。彼女は彼らのように具現化せず、この世界とは少しずれた場所に存在するという。人間が、自分の作った箱庭の中に、自分では入れないように、創造主は存在が大きすぎて降臨する事が出来ないと言われている。

「生まれ変わっても、人生を狂わすほどの魔力を持つ場合もある。この街に住んでいるその実例は、人格に問題が出てたようだ」

それが誰なのか聞くのが恐ろしかった。アーソルドではない事を祈りながら考える。

ここで浅はかな考えで動けば、ただただ落ちていくだけである。

道は一つではなく、三つもあるのだ。

今のまま年を取らずに延々と生きて伝説となるか、人生も何もかも諦（あきら）めて人間を捨てラーハに仕えるか、一か八かで普通に年を取ってから死んでその後の運にかけるか。

眠り続けるぐらいならいい。眠っていれば意識がないから気づけば起きている事になる。

人格に影響といっても、普通に死んで生まれても、どうなるか分からない。彼が言うほどの魔力があるのなら、多少人格に問題があっても出世できるだろう。

「その具体的な方法は？」

「私の印を別の部位に付ける。この場合は背中だな」

「ターラ様の印？」

「そうだ。私の印を受けた者は死ぬ。死ななければ人間は私の管轄に入れない」
生の対である死。動の対である静。彼の力はラーハの力を打ち消すのだろう。だから失敗すれば死ぬ。
「それで表面上は普通に生きられると」
「そうだ。印を与えた後に、もし先の分からない死を遠ざけたいと思うなら、魔法を使えばいい。お前がラーハの力を受け入れ、歪んだ生を歩もうと思えば、それでバランスが崩れるほどの力しか入れられない」
イゼアはため息をつく。
人にとって永遠の命は夢だろう。それを求め始めると良心がうち捨てられ、人を殺す者は多い。しかし本当の知識がある常人であれば、その先を知って望む者はあまりいない。今すぐに選べと言われれば断るのは惜しい気もするだろうが、それがいつでも手に入れられるところにあるなら、迷いはしても恐ろしくて手が伸びない。
時の魔法を使い不老を手に入れた者のほとんどが、いつしかどこまで続くかも分からない長き時と孤独に耐えられなくなる。知り合いを作ってもすぐに老いてしまい、環境が変わり、自分がどこまでも独りである事を痛感する。
自分の意志を持ち、貫いている間はいい。生きる目的をなくした時、耐えられなくなるらしい。

「できれば……普通に生きたいです」

今のイゼアには、これしか選択肢はない。ラーハの相談役で先の見えない生を送るなら、死んだ方がマシだ。

ターラはゆっくりと手をあげた。

「痛みはないから、楽にして背を向けるといい」

イゼアは深呼吸して彼に背を向けた。

ターラはラーハよりも常識を心得て、肌着を持ち上げる時も触れる事を告げて、頷くまでは触れなかった。痛くもないし、むしろベッドの中で眠っているような心地よさを覚えた。ラーハの時は太陽の光の心地よさ。しかしこれは眠る安らぎ。

ラーハが最後まで不満を漏らしていたが、イゼアはもう気にかけるのをやめた。

「よし」

「え、もういいんですか？」

命がかかっていた割には、気持ちがいいぐらいだったのに。

「進行は抑えたが、もしも体調不良などがあるといけないから、しばらくは通って様子を見る。魔法は絶対に使うな。使うとしても自分自身の力のみに頼る力だけにしろ。それでも全力は出すな」

イゼアは神妙な気分で頷いた。ターラは真剣で、へらりとも笑えない雰囲気である。

「もしもそれが守られない場合は、諦めてラーハの物になれ。あれはお前の事を側に置いておいたら便利だなぐらいに思っている。飽きられたらどうなるか保証は出来ない」
「ロマンも何もないほど真実を突きつけないでください。空しくなるので」
「分かっているならいいが、おそらく本人は自覚せずにしている。これからも何か申し出があったら全部断れ。もしも無理やり何かされそうになったら、この鈴を鳴らせ。鳴らすつもりがなければ音は鳴らない。その音が鳴ったら、どうにかしよう。暴漢に襲われそうになった場合でも鳴らしていい。自衛手段を封じてしまう結果になったからな。私はすぐに行けないかもしれないが、配下だけでも行かせよう。だから気兼ねする必要はない。マナラにも渡しておく」
ターラはマナラへと綺麗な鈴を手渡し、彼女へ微笑む。
彼には死んで生まれ変わるまで、下手をしたら生まれ変わっても世話になるようだ。そう思うと切なくなった。
人は死んだ瞬間にほんの一時、全ての忘却を与えられる。それは人にとっては何よりの癒しである。
新たに生き苦しむ事になる者達にせめてもの安らぎを与えられる死の忘却は、どんな極悪人にも与えられるものだ。そして転生した事を哀れむように、送り出すのが、死神の仕事だという。
よき者はまたよき者になるよう、世の誘惑と生きの苦しみに負けぬように祈って見送る。

だから彼はいつも忙しく、こちらに手をかけさせてしまうのが気まずい。
「ゼイレム。イゼアのために、魔法を封じる道具を用意することを許す。形として存在すれば、彼女の心も落ち着くだろう」
人の心を理解する神。
本当に生と死の二人は対極の存在だ。対として作られたと言われているのは、このためだろう。力も役割も性格も。
存在だけして、己が育む生を目にかけぬ太陽神。
存在するだけで十分なのに、他者のために尽くす死神。
「イゼアにもマナラにも、私のいらぬ言葉のせいで、迷惑をかけたな。だがあれを嫌わないでやって欲しい。これからも答えを分けてやって欲しい。邪険にしないでやって欲しい」
ターラはイゼアへと頭を下げた。真摯な言葉と態度を向けられ、イゼアは戸惑った。
「悪気はないんだ。それに言葉だけですんでいるうちなら害はない」
「悪気がないのは分かっています。変な事をされないなら、時々話をしに来るのは構いません。あと、早朝に起こされるのも勘弁していただけるなら」
痛みがなくなったのだから、早朝に彼が来ても気づいて起きる要素はないが、迎えないと部屋まで来て起こされそうだ。
「ありがとう。それについては彼の部下に伝えておこう」

ひょっとしたらその部下にものすごく恨まれるのではと考えながら、イゼアはシャツを羽織って、ボタンを留めた。

ちらとラーハを見ると、彼はやはり不機嫌だった。ターラが出しゃばっていると思っているのかもしれない。

「ラーハ様。せっかくだからお茶を淹れましょうか。ラーハ様のような方のお口にも合うと思います」

「うむ」

イゼアはため息をついてキッチンへと向かう。

太陽神ほどの印なら、欲しがる者なら他にいくらでもいる。きっと五百年ぐらいしたらかなり後悔しているだろうが、先を考えない人間は多く、欲しがる者は多いはずだ。

なのに、なぜだか過分な物というのは、欲しがらない者にこそ与えられる。

これからどうなるか考えると、ため息しか出てこない。

マナラは薬をキセルにつめ、目頭を押さえて火をつける。独特の甘い匂いが鼻を抜ける。

白い煙は窓から逃げて、空に散る。

たばこではなくただの頭痛薬なのだが、これがよく効く。

いつも娼館でもらい、使うのは久しぶりだ。マナラはあまり物事を気にしないようにしているので、この手の薬に頼る事は少なかった。さすがに今回は、色々ときついものがあって、昨日から世話になっている。

「問題ありませんね」

イゼアの胸元の印に触れていた手を引き、塔長、闇の賢者カオスは言う。もちろん本名ではないだろうが、誰も彼の本名を知らない。ターラが言っていた、魔力の影響で人格に影響が出ている人間とは、おそらく彼の事だと、マナラは睨んでいる。

二つ名の通り、髪も瞳もローブもマントも黒い、見た目だけならマナラと同年代の青年だ。普段はにこやかだが、見た目に騙されていい人だと思い込むと、後でしっぺ返しを食らうような、そんな人格の持ち主である。

生まれ変わってイゼアがこうなったらと考えると、マナラは不安で胸が一杯になる。

「本当ですか？」

しかしそれを知らないイゼアは、無邪気に喜んでいる。普通に接する分に優しい塔長なので害はない。彼女が彼の本性を知るような事態が起こらない事だけを祈った。

「さすがはターラ様だ。処置が的確でらっしゃる。念のために私もこれを封じる魔具を作りますから、イゼアは安心して生活してください」

「ありがとうございます、塔長様」
「いいんですよ。こんな後にも先にも見られないような物に触れられるなんて、夢にも思っていなかったんですから。でも本当にいいんですか？　不老不死」
「いいですよ。だって、千年も生きると、誰もいないのに壁に向かって話し始めるって言うじゃないですか。そんな風になるぐらいなら、ターラ様の所に行きます」
「私が直接知っているのは、冷血男が人間嫌いになって、無類の動物好きになったという例ですね。人間を相手にしていると、ストレスが溜まるようになるらしいです。知能のある者を相手にするのは面倒臭いですから。私のように組織に組み込まれていればいいのですが、個人だと勘違いした馬鹿にも狙われますからねぇ。イゼアもそんな印があると、きっと誘拐しようという輩が出てきます。気をつけなさい」
「塔長様、なんでそんな目に遭うと分かってるのに、こんな呪いを受け入れるとか少しでも思うんですか？」
「それもそうですねぇ。でもラーハ様は必要以外は自由にすると仰ったそうですし、望む者にとっては美味しい条件ではありますね。神の庇護下になければ、死ぬのは案外簡単ですし」
　言い換えれば、神は庇護下にいなければ守ってくれるものではないという事だ。必要な時にだけ目を向け、あとは完全放置。ラーハの巫女になってしまえば、ターラにも頼りづらい。
　気に入られる相手と気に入られ方が悪かった。イゼアも変な男にばかり気に入られる。彼女

が将来まともな相手と出会えるのか、マナラはますます心配になった。イゼアは彼氏も欲しい、幸せな結婚を願う普通の女の子なのだ。

イゼアが上着を羽織ると、カオスは扉に向かって声をかけた。

「終わりましたよ」

その声を聞き、部屋の外で待っていたアーソルドとキーオが入ってくる。

イゼアの事は秘密にしておいた方がいいのだが、独特の気配があるらしく気づく者はいるらしい。だからフォローする者が身近にいた方がいいと、ターラがカオスに相談したのだ。カオスはターラに近い属性で、だからこそ闇の賢者などと呼ばれている。そしてそのカオスが、アーソルドとキーオを連れてきた。

イゼアを心配しているキーオと、好意を持っているアーソルドなら、信用に足ると思ったのだろう。

「しっかし、すごいよなぁイゼア。ラーハとターラに会っただけでもすごいのに、印を付けられて何も変わってないってのが一番すごい」

「変わらないようにターラ様にお願いしたんだから、そうでないと困りますよ」

「ターラ様が気づいてくださってよかったなぁ、本当に」

「はい。ターラ様はとってもいい方でしたよ。っていうか、いい方すぎて……あんなに親身になってくれたのは、今まで先生とマナラさんぐらいで……」

イゼアはシャツの袖で目をこする。
マナラには、親身になった記憶はないが、あれで親身と言えるほどの扱いを受け続けてきたと思うと、人ごととは思えない。もう少し優しくしてやるかという気持ちにもなる。
「……なぜそこに僕の名が出ていない？」
「え……」
不機嫌なアーソルドを見上げ、イゼアは驚く。
「子どもの頃から、僕がどれだけ気にかけてやっているか」
アーソルド的にはどこに行くのも無理やり引きずっていく事で、親身に世話をしていたつもりなのかもしれない。
「アーソルド様って……本当にプチラーハ様って感じです」
イゼアの言葉にマナラは笑った。改めてみると、本当に似ている。
「いやまったく、なんで縁者じゃないのか不思議なぐらい似てるな。迷惑度は向こうの方が遥かに上だけど」
アーソルドはふるふると震えて拳を握りしめている。無自覚な男というのは質が悪い。
「アーソルド。イゼアと生きたかったら、優しくエスコートしてやるんだぞ。ひょっとしたら、苛められすぎてラーハ様の方がいいと行ってしまう可能性もあるんだからな」
キーオの言葉に、彼ははっとした様子でイゼアを睨む。やはり睨むのはやめられないらしい。

この調子ではイゼアが嫁に行くのはまだ遠そうで、しばらくこの賑(にぎ)やかな生活は続きそうだ。

# 実験と呪いとアーソルド〝様〟

Experiment & Curse & "Mr." Arsold

仕事を受けて、仕事をして、食べて、寝て、起きて、仕事をする。

マナラのそんな当たり前で楽しい毎日は、弟子が出来てから、少し変化があった。食と睡眠の割合が増えた。人と話す事が増えた。

イゼアは干渉しすぎているのではないかと、おっかなびっくりマナラの世話をしているが、マナラは不快だと思ったことはない。その方がいいと分かっていて、出来なかったのだから、ありがたいと思うほどだ。

マナラは四年前に魔道学院エムラドを出て、娼館に住み込んだ。いつからか趣味だった魔動機修理が仕事になって、具神ゼイレムに出会い、もらった魔動機を手放し家を買った。そこまではなかなか波瀾万丈だったが、そこから三年間は変わらぬ毎日だった。マナラは魔動機の中身を見るのが好きなので、それでも楽しい日々ではあった。ずっと変わらないんだろうとすら思っていたが、まったく変わらない毎日というのはあり得ないようだ。新しく出来た弟子のせいで、太陽神や死神と顔見知りになってしまうほどには。

波瀾万丈すぎるだろうと思いながらも、起き上がり、あくびをして眼鏡を掛けた。

目がそこまで悪いわけではないが、度を調節できるので便利な魔具である。細かい物を見る時に、ルーペの代わりにもなり、一度使うと手放せなくなった。調節機能が壊れていたので、ゼイレムが持ってきた物だ。要である眼鏡のツルに掘られた紋様が汚れていただけだったので、マナラにも簡単に直せたが、これを作れる職人はそういない。見ているだけでため息が出るほ

どよい品だ。

髪をといて三つ編みにし、櫛に絡みついた長い髪を綺麗に伸ばして、鏡台の横のテーブルの上にある、白い布の上に置いた。髪の毛は様々な物の媒体になる。イゼアが髪を切っていなければよかったのだが、短いものは仕方がない。

今日は出かける用事があるので、油で汚れた作業着ではなく、私服に着替えて一階に下りた。弟子はマナラよりも早く起きようと無理をするから、マナラも自然と睡眠時間が延びて、皆の思惑通りになっている。それが少しばかり悔しくもあった。もちろん意地悪のつもりで仕事に打ち込んでいるわけではないから、ほんの少しだが。

「あ、マナラさんおはようございます。準備は出来てますよ」

「んー」

作業場にはマナラの工具入れやエプロンが、綺麗に整頓されて、いつでも持ち出せるよう並べてある。それをした弟子のイゼアは、相変わらず男物に身を包んでいる。女物の服も買っているのだが、髪がもっと伸びるまでは女装扱いされそうで着るのが怖いらしい。エプロンを身につけ、三角巾を頭に巻いた彼女は、十分可愛らしいのだが、男の子的な可愛らしさになっているのは否めない。もう少し大人になって、髪さえ伸びれば美女になりそうだが、今はまだまだ元気が溢れているので仕方がない。

普通の女の子なら退屈だと思いそうな毎日を、彼女は楽しそうに、生き生きと過ごしている。

女の子らしい趣味もありながら、魔動機が好きでたまらないというのも伝わってくる、可愛い弟子だ。

「お昼も簡単につまめる物を作っておきました。他に何か欲しい物ありますか？」

「いや、工具さえあれば問題ない。足りなかったら借りられるからな。私達は今日の所は見に行くだけだし」

マナラは用意された朝食を腹に詰め込み、イゼアが揃えた工具のチェックをした。完璧だったので褒めてから、ウエストポーチなどを大きなカバンに詰め込んで、ゼイレムにもらった魔動機を手入れしながら、手配された迎えが来るのを待った。

エムラドの職員室で待っていたのは、塔長でもキーオでもなく、アルスだった。彼女にはたまに壊れた物を直すように頼まれる事があったが、わざわざ招かれた理由が分からなかった。

「で、見て欲しい物って？　なんか大がかりみたいな事が書いてあったけど」

「付属魔法室の設備がさぁ」

マナラの問いに、アルスは笑みを浮かべて答えた。

「設備って……何か運べないようなのあった？」

マナラは記憶をほじくり返して考える。付属魔法室と魔工作室は近いので、設備はよく目にしていたはずだ。どう記憶を絞り出しても、アルスなら抱えて持ってこられるようなサイズだ。

「いや、設備全部がなぜか壊れちゃって、原因が分からないか見るついでに、直してもらえたらなぁって」

「は？　全部？」

さらりと口にしたその言葉に耳を疑った。全部壊れたと簡単に言えるほど、少なくはない数の魔動機があったはずだ。

「照明、スピーカーもやられた。うちの教室だけ」

マナラは額に手を当てた。

「……そんなの私に言われても」

「たとえ総入れ替えになるのは仕方ないとしても、原因が分からないとまた繰り返すだろ。魔工科の連中に見せても、ひどいとしか言わないんだ。ほんと、原因を探るだけでもいいからこの通り！」

アルスはへらへらと笑いながら手を合わせた。

「と、とりあえず現状を見てみないと」

「じゃあついてきてくれ。午後まで授業ないから、あの辺の教室は静かなもんだし」

アルスに案内され、マナラは懐かしい付属魔法室へと向かう。

付属魔法は必修科目ではなく、午後からの選択科目で学ぶ事が出来る専門性の高い科目だ。添付魔法とも呼ばれている通り、身体能力を上げたり、剣に炎の力を宿らせるような、何か属性の類を付ける魔法の総称だ。人間に掛けなければ効果が分からないものも多い、少し危険な魔法である。そのため、測定器などがたくさん置いてある。

その全てが壊れて、全て買い換えとなったら、とんでもない金額だ。

「でも、全部って何があったんでしょう。こんな事例って今までありますか？」

「誰も知らないってさ。ほんとなんでこんな事になったのやら」

イゼアの問いに、アルスは渋面で答えた。

「マナラなら色んな物を見てるだろ。少しは何か分かる事があるんじゃないかって、予算出してもらえたんだ。このまま謎にはしておけない」

「確かにねぇ」

マナラはアルスに案内され、中庭を突っ切る渡り廊下へと出た。

「懐かしいな」

マナラは魔力がなくても出来る魔工と魔法薬を選択していたため、温室のあるこの中庭にはよく足を運んだ。選択科目は楽しかったし、そのおかげで娼館で働けていたので、いい思い出だ。

「イゼアっ」
聞き覚えのある声が、温室の向こう側の渡り廊下から聞こえた。
「げ、アーソルド様」
マナラは眼鏡を調節して、向こう側の様子を見た。心なしか頬を上気させ、恋する少年といった体だった。もちろんそこまでは裸眼のイゼアには見えないはずである。
彼は咳払いを一つして、余裕のある顔を作って渡り廊下を出てこちらに向かってきた。
その時だ。
「はっ」
と声を発し、アーソルドが飛び退いた。
マナラが何事かと思った時、アーソルドが立っていた場所に、迷彩服に身を包んだ誰かが飛び降りた。そしてなぜか分からないが肉弾戦による戦闘が始まった。
「え？　え？　な、何だあれは」
慌てるマナラとは対照的に、アルスとイゼアは落ち着いた様子でその光景を見ていた。
「ああ、うちの生徒だ。いつもの事だから気にするな」
「ええっ!?」
マナラは思わず声を上げた。
見事な徒手格闘の攻防戦を繰り広げるのが、いつもの事。

「ほ、本当にいいのか、あれ」
「ああ、子供の遊びだ。授業が始まる前には終わる」
「そうですよ。いつもの事です。どうせ返り討ちにするだけなんで、さっさと行きましょう。見ているとほんとムカツクんです」
アルスに手を引かれ、イゼアに背を押され、マナラは目を白黒させた。
学校とはいつからこれほど危険な場所になったのか。エムラドそのものがおかしくなったのではないかという気さえした。もちろん普通の学校に比べれば、危険に満ち溢れているはずだが、昼間から生徒が襲撃を受けるような場所ではないはずだ。
混乱しながら、手を引かれるままに歩き、気づけば懐かしい魔工作室を通り過ぎ、二部屋離れた付属魔法室へと到着していた。
明かりがないので暗いが、一見何もおかしな所はない。マナラは落ち着くために持ち込んだ水筒の水を口に含む。先ほどのは綺麗に忘れて、仕事に専念しなければならない。
よく見えるようにと、アルスが魔法で明かりを作り出す。マナラは魔動機を一つ手に取り、封印を外して手を止めた。
「封印はそのまま機能しているのか」
マナラは顔を顰め、腑に落ちずに中身を確認する。あるべき場所に、あるべき物がない。
「……導線が取られてる？」

「うん、そうらしいんだ。全部じゃないけど、線がなくなってるってさ。それで中身が分かんないらしい」
「なんでか分からないから、呼ばれたんだっけ……。中身が少し煤けてるな。なんだろう。燃えやすい素材を導線に使っていたのか」
「金属以外も使うのか？」
「絹糸とか蜘蛛の糸とか髪の毛とか、植物も一部導線向きのものがある。物によっては綿の糸でも十分だ。滅多に動かさないようなのだと、そういう物を使うのは珍しくない」
「へぇ」
「金属系のは残ってるから、燃えたのかも」
そう言ってから、マナラは周囲を見回した。教室内には、プリントが壁に貼り付けられている。
「でも、紙とか燃えてないんだよな？」
「それだったら話が早くてありがたい」
放火で片づけられるからだ。
「イゼア、お前にも出来るだろうから手伝え。私はちょっと慎重に直すから、時間が掛かる。お前はどんどん直せ」
「はーい」

マナラは確認した物をイゼアに渡す。
「アルス、導線が欲しい。魔工の連中に一通り貸してくれと言えば分かる。あと、この中のどれかと同じ物がないか聞いてきて欲しい。同じ工房の、出来れば同じ製作者の」
「わかった。テキパキと指示を出してもらえると、なんか安心するなぁ」
「いいから行け」
アルスは教室を出て走っていった。
イゼアは魔動機の中身を確認しながら、ちらりとマナラを見ている。
「どうした」
「いや、アルス先生にも容赦ないなぁって。セファイン先生は幼馴染みだから分かるけど」
「別に幼馴染みだからって特別扱いはしてないよ。向こうは責任を感じてるみたいだけど」
「責任？」
「……まあ、色々と」
マナラも魔動機を分解しながら曖昧に答え、自分の髪の毛を抜いて、指に巻き付ける。
イゼアの視線が、珍しく手元以外に突き刺さっている。
いらない事を言ってしまったようだ。
「マナラさん、そんな言い方だと気になるじゃないですか」
少し前なら聞き流していたのだが、慣れてきたせいか突っ込んできた。

「今はもう関係ない話だ。お前とアーソルドが関係ないようにな」
「え、マナラさん売られそうになったんですか？」
「うちはそんなに貧乏じゃなかったから安心しろ」
イゼアは金が絡むとおかしな思想に転がる傾向がある。貧乏とは人の心を歪めるらしい。もしくはアーソルドに苛められすぎたか。
「マナラとキーオは、子供の頃は婚約者だったんだと」
開けっ放しだったドアの前に、手ぶらのアルスが立っていた。
「導線は？」
「用意して持ってきてくれるそうだ。女の子だけを残すと何があるか分からないから、戻ってくれって。私も女だというのに」
アルスは教室内に入り、椅子に座った。
「婚約って、本当ですか？」
「本当さ」
アルスが余計な事を言うから、イゼアが驚いてマナラとアルスを見比べている。
「なんで結婚してないんですか？　仲いいのに」
マラナは仕方なく、小さく息をついてから、顔を上げて口を開いた。
「仲はよくないよ。それに家の都合の結婚だから、魔力が低かったから御破算。家族との確執

で出ていったのに、婚約解消の事で出ていったって勘違いしたみたいで、妙に構ってきたけど、今は習慣になってるみたいだな。結婚するような仲のよさじゃない」

「でもそれって未練があるって事じゃ……」

キーオが気に入りの教師であったためか、イゼアはキーオを高く評価している。だからこその言葉だろう。何かとアーソルドと比べて、いい人だと言っている。

「いや、あいつの弟が私の妹に惚れててさ。で、妹は私と違ってうちの一族らしい魔力があった。私がダメならキーオには妹をって母が言っていたから、本当に実行しようとしたんだろうね。だから、それを何とか避けるために私を連れ戻しに来たんだと思う。他に方法が思い浮かばなかったんじゃないかな。若気の至りってやつだ」

その辺りは直接本人に問い質したわけではないが、同情や愛情ではなく、自分の都合のために迎えに来たのだけは、肌で感じた。そしてキーオは、それを後になって少し気にしていた。

「結局、キーオは家に戻らず、弟に家督を譲ったみたいだ。その時は出てってたから、詳しい事は聞いてないけど、何となく想像はつくだろう？」

マナラが知っているのはそれだけだが、キーオがどれだけ弟を可愛がり、どれだけ悩んだかよく分かる。

もしマナラに対する好意があの時にあったなら、アーソルドのように怒っていたはずだから、イゼアの考えるような甘い感情は一欠片もない。

「私の知らない所で勝手に動いてた事だし、私がどうこう口を挟む事でもないから、全部突っぱねてほっといた。だから私は結果しか知らない」

それで弟のために連れ戻そうとしていた事を気にしている。それだけの関係だ。

キーオもマナラの実家に振り回されて同情はするが、それでも女としては腹立たしかった。アーソルドのような過激な表現でも、マナラに対する愛情があれば話は違ったが、あったのは家族だけに対する愛情と、マナラに対する無関心だった。

「だから私は、男としてのキーオの事は、どちらかと言えば嫌いだな。さすがに私も、あの扱いには女としてのプライドが傷ついた」

「……お、お友達としては？」

「別に嫌いではないけど好きでもない。なにせ食料を運んでくるようになってからの方が、顔を合わす機会が多くなったぐらいだ」

「そうなんですか？」

「そう。イゼアとアーソルドの方がよっぽど親密な関係だ。気はすんだか？」

「はい、ごめんなさい」

イゼアもアーソルドを押しつけられたら嫌なはずだ。二人は小さな頃から一緒に遊んでいたようだが、マナラはキーオとはエムラドに来るまでは年に一度ぐらいしか顔を合わせる事もなく、エムラドでも年齢が離れていたし、マナラが落ちこぼれていたから、優秀なキーオとはク

ラスが遠くて年に数回しか顔を合わせなかった。
イゼアが黙ったので、マナラは指に巻き付けた髪を、仮の導線として巻き付ける。
「髪の毛を使うんですか？」
「ああ、これは仮な。先にちょっと動きを見たいから。髪は魔力を通しやすいし、細いし、導線としてはいい素材だよ。うちの三番の導線は私の髪をコーティングしたものだ。だから私は髪を伸ばしてるんだ」
「言われてみれば、マナラさんなら髪を乾かすのを面倒臭がって短髪にしていてもおかしくないですよね」
「私だって女は捨ててないから、多少鬱陶しくても、お前らみたいにバッサリ切らないぞ」
イゼアはアルスを見た。アルスは自分の黒髪を引っ張って長さを気にしている。
皆がマナラは女を捨てていると言うが、捨てた覚えは一欠片もなかった。
それからマナラは、いくつかの魔動機の導線を張り直した。時間を掛けて、ゆっくりと。だからこそ理解できずに腕を組んだ。
「しっかし見事に導線がやられてるな。なんで導線だけ？」
マナラは首を傾げる。
「んん……何か導線が燃え尽きるほど強い魔力嵐が局地的に？」
「それこそ聞いた事がない。この教室だけで収まっているんだ。魔工作室が隣の隣だから、あ

いつらも戦々恐々としてる。全部徹底的に調べたみたいだし、間違いはないと思う」
マナラの予想をアルスが否定する。イゼアは分からないためか、黙々と導線張りをしている。
「でもこの程度の事を魔工の連中直せなかったのか？」
「断られた」
「確かにダミーがあるからややこしいけど、同じ工房のシリーズみたいだし、イゼアが黙々と作業できるぐらいなのに……ケチだな」
「修理って慣れてないだろ。それにあいつら、自分の新しい技術は大好きだけど、古い技術は非効率的でレベルが低いって思ってるから」
「そりゃあ日進月歩だから昔よりも技術は進んだかもしれないけど、ゼイレム様が封じられる前の技士の方が、遥かにレベルが高かったよ」
「見れば分かるのか？」
「当然」
この程度を本当に直せないなら、それは技士ではなくただの研究者だ。
マナラは直った魔動機を脇にどけ、次の魔動機に手を掛けた。その時、閉まっていたドアが開いた。
「やはりいたか」
イゼアの顔が強張った。マナラは声の主が無事で、いつもと変わりないのを見て眉間にしわ

を寄せた。

「アーソルド様、なんの用ですか」

アーソルドとアランと、他数名の生徒が入り口に立っていた。

「アルスが一緒にいたから、ここにいるだろうと思ってな。食堂も一杯だったから、どうせ次の授業があるここに来ようという事になった。お前達の分もあるから食え。それ以上痩せられては見るに堪えない」

アーソルドは机の上に買い込んだ食料を置いた。

ごく普通の好意のはずだが、言葉に素直さが足りないため、イゼアはげんなりとした表情だ。他の誰かの言葉であれば、照れ隠しだと気づくことが出来るのだが、なぜかアーソルドの言葉だけは、そのまま受け取るのだ。彼がイゼアに何をしてきたか、尋ねなくともよく分かる。

「しかし原因も分からないのに修理をして、また同じ事になったらどうするんだ？」

「それを調べながら進めてる。それよりも、お前、付属魔法なんて習ってたのか」

「攻撃魔法は教師レベルに習う必要はないからな。選択科目でまでセファインと顔を合わせたくない」

マナラが尋ねると、そう言って彼は銀髪を掻き上げた。艶やかで、キラキラして、手入れされた髪だ。

イゼアが唇を噛みしめた。マナラでさえ腹が立ってハンマーで殴りたくなるのだから当然だ。

「いやさ、男手が欲しくて、イゼアに自慢できるぞって言ったら入ってくれたんだ。第二科目としての生徒は女の子ばっかりで、男手が足りなかったからありがたい。アランは死霊術以外を習いに来てるから、強引に誘ったら来てくれた」

アルスの説明でマナラは納得した。

午後からの選択授業は、第一科目と第二科目があり、アーソルドは第一科目に精霊魔法を選んでいるのだろう。彼が最も得意とするのは、精霊魔法らしい。だから第二科目も攻撃的な科目だと思い込んでいたが、イゼアが関係しているなら納得できた。付属魔法というのも、戦闘に使える魔法であるのには違いないし、先ほどの動きが出来るなら、十分自分自身にかけても使えるだろう。

「そんな嫌味な事のために……」

マナラが納得する隣で、イゼアがふるふると震えて悔しがった。

魔法を使うと死ねなくなる呪いに掛かっているイゼアにとって、なんでもほいほい習って使えるアーソルドは羨望を通り越した存在に違いない。

「ば、馬鹿だな。そんな理由で自分の将来を決めるか。魔道士としての幅が広がるだろう。何よりも、呪い対策になるからだ」

「え、なんでですか？」

イゼアが尋ねると、アーソルドは鼻を鳴らした。

「お前には縁のない魔法だから知らないだろうが、付属魔法と呪いは似たような系統の魔法だ。付属魔法が局所的なだけで、何かに影響を与える事を目的としているのは同じだろう。呪いは悪い効果ばかりが目立つが、気を晴れやかにするような効果のものもあるぞ」

「ああ、そういえば……」

そういう意味では同じ属性に数えられる。呪いは効果が持続したり、範囲を広くできるため、複雑な儀式を必要とする事が多いのが、大きな違いだ。

「まあまあ、食べる時にそんな話はやめようよ。イゼアちゃんの好きなパン買ってきたよ。でも久しぶりだねぇ、元気だった？　イゼアちゃんがいなくなってから、完璧なノートを書いてくれる人がいなくて大変だったんだよ。アーソルド様のノートは、やっぱりイゼアちゃんのノートに比べると質が落ちるからねぇ」

「……自分でノート取りましょうよ」

イゼアはアランの陰から出てきた少年に捲し立てられ、呆れて言葉を返した。

「アーソルド……お前に一緒に食事をして、ノートを見せるような友達がいたのか」

「なぜそんな事で驚く？」

アーソルドは心外だとばかりにマナラを睨み付けた。

マナラは友達などアランしかいないと思い込んでいたのだ。いくら同じ科目を選択しているからと、友達になるとは思えなかった。しかし親しげな様子から、友人に見えた。このラーハ

によく似た、俺様男に。
「しかしその割にはなぜ様付け？」
「アーソルド様はアーソルド様だからですよ。アーソルド様以外だと違和感が」
友人の口から語られる。アーソルドは教室内でも俺様キャラではあるようだ。
「アーソルド様ほど優秀な友達を持てて僕は幸せですよ、色々と」
「色々と？」
マナラには理解できない友人関係だ。
「それよりも、結局原因は何だったのか、少しぐらいは分かったのか？」
アーソルドが足を組んで偉そうに問う。
「導線がほとんど焼き切れてる。そういう事例に心当たりがあるなら、とっくに判明してるな」
「専門家だろう」
「何の専門家だ。私は修理屋だって言ってるだろう。ここに住み着いて三百年の塔長様にも分からないのに、見ただけで分かるほど私が物を知っているはずがない」
「……確かに塔長様にも分からないのなら、仕方がないか」
アーソルドは納得して頷いた。
マナラは頭を掻きむしり、ため息をついた。
一息つくために、教室の隅にある水道で手を洗い、この水道は生きているのだと疑問に思っ

た。手を蛇口の下に入れると水が出るようになっている魔動機である。
壊れた魔動機との違いは何かと考える。イゼアが食事のために用意した椅子に座りながら、頭を抱えたくなった。
「マナラさん、なんでこんな現象が起きたかよりも、なんでこんな事になったのかを先に考えるのもありじゃないですか？」
弟子の言葉にマナラは顔を上げた。
「自然現象じゃなかったら、犯人がいるって事ですし。こんな局地的だから、人為的って言われた方が納得できます」
「なるほど。犯人から手がかりを探した方が早いかもな」
犯人の得意な分野が何か分かれば、原因が分かる。今後の対策も取れる。
イゼアはアーソルドが用意した食事ではなく、自分が作って持ち込んだ昼食を広げていた。
マナラは野菜と肉が挟まれたパンに噛り付いた。
「でも、なんで付属魔法室？　アルス、女子生徒を寝取ったか？」
「冗談でも怒るぞ」
アルスに頭を掴まれ、マナラはその手を払う。
「だが女の事で恨まれているっていう可能性は否定出来ない。塔の中でも付属魔法と言えばお前だ。恨まれているとしたらお前の可能性が高い。人気があると、妬む奴も多いからな」

逆恨みというのは案外侮れない。最初は些細な嫌がらせでも、潰れないと段々過激になっていく。

「あとは生徒だな。ここにいるのは二科目めの生徒ばかりか？」

「そうだ。一科目めに選択している生徒は男女半々だな。でも恨まれるような子はいないと思うが。だいたい私が顧問しているクラブの生徒が多いし」

マナラが一つめのパンを食べ終え、次に手を伸ばすと、横から手が伸びてパンをかっ攫っていった。アーソルドの手だ。

「足りないなら買って来てください」

イゼアが敵意むき出しで睨み付ける。工房では自分のテリトリーのためこれほどツンケンとはしていないのだが、今はエムラドにいるためか、いつもよりも気が立っている。

「これが食べたいんだ。お前の作るソースは僕好みだからな」

「アーソルド様が口うるさく言って、ルフィル家の料理人にお料理を習うよう仕向けたんじゃないですか。アーソルド様の家庭の味なんだから、口に合うのは当たり前です」

「家庭の味か……確かにそうだな」

少し照れたようにアーソルドが顔を逸らす。

この光景を端から見る分には微笑ましいため、皆がニヤニヤと笑う。知らぬは苛められていると思っているイゼアだけだ。髪を引っつかまれるようなのが当たり前なのだから、そうなる

のは当然だ。

マナラは弟子の様子を生温かく見守りながら、原因と結果から様々な可能性を考えつつ、アーソルドが買って来た購買のパンを食べた。懐かしい。

「アーソルド様、これ冷めてるんで温めてください」

「だから自分で出来るように訓練しろと言っているだろう」

アーソルドが友人に頼まれ、チキンを温めた。あのチキンは購買で人気で、マナラもよく食べたと、懐かしさを覚えた。

「アーソルド様、これぬるいんで氷作ってくださいませんか？　私精霊魔法苦手で」

「精霊魔法を使わなくても、すぐそこの水を凍らせる事は出来るだろう」

アーソルドが言いながらもカップに氷を作り出してやる。購買にはたまに氷をケチる販売員がいるのだ。

「アーソルド様、私も一口欲しいです」

「イゼアに言え」

可愛らしい女の子が口を開くが、顔面を鷲掴みにして押し返し、自分で食べて満足そうに笑う。

マナラは学生らしいやり取りを見て、額に手を当てた。今朝見た戦闘は何だったのか分からなくなった。



様付けされつつ、皆に頼られ……るというよりは、便利に使われている。精霊魔法は精霊さえいれば使えるので、生活に便利な魔法とはいえ、文句を言いながらも頼みを聞いているアーソルドを見ると、マナラは不気味でならなかった。

「……アーソルド、何か恨まれる覚えは？」

性格的には、彼が一番敵を作っている。精霊魔法は魔動機を使わないから動機はほとんどない。だから第二候補でやったという可能性もある。でもそんな事をするなら、アーソルドの部屋を狙った方がいい。部屋が狙われないのは、犯人が女子生徒だからだろうか。

「それはありません。アーソルド様はこんな陰湿な事をされるような方じゃないですよ」

マナラの推測をアーソルドの友人が否定した。

「そうそう。アーソルド様に陰湿な嫌がらせはないですよ」

「アーソルド様にこんな回りくどい事なんて」

マナラは奇妙な信頼のされ方をしているアーソルドに目を向け、そしてイゼアに目を向けた。

「どういう立ち位置なんだ、これは。通路で喧嘩を売られたり、信頼されたり」

「アーソルド様本人に陰湿な何かをするならともかく、教室に陰湿な事をしても意味がないですから。自分の所有物には執着心がすごいですけど、教室は所有物じゃないですし、嫌がらせにもなりません」

イゼアは何かを思い出したのか、自分を落ち着かせるように水を飲んだ。

「それって、誰かが本人にはしてるって事か？」
「はい。今朝のは何か新しい技術の実験だったんだと思います。試すにしても、相手にある程度の実力がないと、効果が分かりませんし、まさか教師で試すわけにもいきません」
イゼアの笑顔でますます理解が出来なくなった。悩んでいると、アルスが口を挟む。
「アーソルドは便利なんだ。抗魔力がずば抜けて高いし、実戦体術の成績はいいし、あらゆる魔法の実験台には打って付けというか。特に付属魔法の実験台にはこれ以上ないという素材だな」
「生徒を目の前にして、実験台と言うな」
アーソルドは万能型の魔道士らしい。
ますます謎が深まり、マナラはアーソルドの学生生活への理解を断念した。気にしたら負けだ。
購買のパンに囓り付いた時、再び教室のドアが開いた。
「おお、揃ってるな。頼まれてた物持ってきたぞ」
キーオがスピーカーと測定器を抱えて入ってきた。スピーカーは予想外だったが、マナラが頼んだ壊れた物と同じ魔動機であるには違いない。彼は足でドアを閉めて、魔動機を置くとイゼアに笑みを向けた。
「ん、イゼア。だいぶ髪が伸びたな」
「そ、そうですか？」
イゼアはキーオに伸びた髪の事を指摘され、嬉しそうに笑った。

彼は昔よりずいぶんと丸くなった印象がある。アーソルドのように分かりやすくはなかったが、子供の頃はもっと他人に冷たい男だった。今は笑顔に昔のような嘘を感じない。教え子を心から可愛がっている。

男としては問題外だが、人としては嫌いではなくなった。

食事を終えたイゼアが、スピーカーの中身を見比べ始めた。他の生徒達も、面白がって覗き込む。

「これ……」

何かに気づいたイゼアは、もう一つの測定器を分解して、中を確かめる。

「マナラさん、導線がなくなってる所、三番の導線みたいな雰囲気なんですけど」

「三って、髪の毛？」

マナラは立ち上がり、イゼアから魔動機を受け取る。確かに髪の毛が使われていた。

「これ、魔動機じゃなくて生物に対する攻撃だったんじゃ……」

マナラの指摘に、暢気に食事をしていた生徒達の顔色も変わった。

「マジか。塔長様呼んでくるか？　機械オンチだけど、逆にそういうのには詳しそうだし」

「待て、キーオ。それよりも先に、近隣の生徒の避難を」

「あ、ああ」

アルスに指摘され、キーオは教室を出て行こうとした。しかし次の瞬間、アーソルドが腹を

押さえて苦しみ出した。
「くぅ……」
「アーソルド様っ」
膝を折ったアーソルドを、隣に座っていたイゼアが血相を変えて支えた。
（まさか本当に……）
だとしたら、命に関わる。マナラが鈴を使おうかと考えた時、アーソルドは手を横に振った。
「何でもない、離れていろ。いつものアレだ」
「え……ああ、あれですか」
アーソルドは痛みを堪えながら呪文を唱え、手を振り上げて何かを払うような仕草をした。
次の瞬間、一瞬黒い物がアーソルドの周囲を飛び散り、消えた。
「な、何がアレなんだ？」
「今のは呪術科目の可愛い呪術だな」
面食らうマナラにキーオがさらりとそんな事を言った。
「い、意味が……」
「ほら、さっきもアルス先生が言っていたように、アーソルド様は抗魔力が高いので、いろんな実験に本人の意志とは関係なく付き合わされるんです」
「やっぱり意味が……」

マナラの様子を見てイゼアがくすりと笑った。
「つまり向こうの都合で勝手に呪われて、アーソルド様が勝手に呪い返しをするんです。アーソルド様ほどの術者を呪えるなら、立派な呪術師的な目安にされているというか。返されるのが分かっているから、シャレにならない事はされませんよ。今のもどうせ……」
誰かが教室のドアを開けた。すると、
「きゃあ、トイレに行きなさいよっ」
「最悪っ！」
などという声が、キーオの開いたドアから入ってきた。
本当に大した事のない呪いを返したようである。
「最近のアーソルド様は呪いの気配を感じて、ヘタクソの呪いなんかだと足捌きで避けられるようになったんだよ。素晴らしい進化だよね」
アーソルドの友人が、自慢するようにイゼアに言う。
「呪いを避けるとか、化け物ですか。だいたい、呪いの気配って……」
人間離れした技に、イゼアが呆れた。
足捌きで避けられる物だというのは、マナラも聞いたことがなかった。才能に満ち溢れたアーソルドに、イゼアが腹を立てるのも理解できた。この調子で、才能を見せつけられ続ければ、誰だってコンプレックスを持つだろう。マナラは妹やキーオに対して、そのような感情を

持っていた。今でも思い出すと、少しくすぶりそうになる熱が胸の中には存在する。
「なあアーソルド、お前一人だけそんな愉快な学生生活を送らされて、なんでキレないんだ？私なら乗り込みに行くぞ」
「ああやって報いは本人が受けているし、乗り込んでいって呪いでくだらない目に遭っている下級生を見て、さらに制裁するのも大人げがないと思ったんだ。何も壊れていないから、大した事のないうちは可愛いものだ」
「なんでその大らかさをイゼアに向けてやれない」
「僕はちゃんと責任を持って面倒を見ていたぞ。なのにこの馬鹿は勝手に勘違いして……」
ちゃんと正妻にしてやるつもりだったのにとか、そういう意味だろう。しかしイゼアは『主として奴隷の面倒を見ていた』ぐらいに受け取り、ますます不機嫌になっている。
マナラは頭痛を覚えて廊下を見る。
覗き込んでいた男と目が合い、逃げられた。
マナラは緊張の抜けたキーオを見上げて問う。
「なぁ、シャレにならない呪いって、どこまでがシャレにならないんだと思う？」
「そりゃあ命とか、後遺症が残るような質の悪い呪いとかだろ」
マナラは腕を組んで考えた。
呪いも避ける。

あまり呪いが上手くない生徒なら、複雑な呪いなら即効性はない可能性がある。そして再生可能であれば……。

「なぁキーオ。私には今のエムラドが理解できないから、何となく思っただけなんだけどさ」

「何か分かったのか？」

「今、坊主頭の学生が覗いてたんだけど」

「坊主頭なんていたか……って、坊主？」

皆は顔を見合わせ、手を打った。

狙われたのは、髪だったのだ。

そしてアーソルドが悪魔のごとき形相で、教室を飛び出て、男子生徒の悲鳴が響いた。

「よく分からないアレンジした呪いを僕に返されて毛が抜けたから、僕を禿げさせるまで頑張ろうとしたと」

アーソルドは、縛り付けた男子生徒を踏みつけて、愉快そうにケラケラと笑った。

目はけっして笑ってはいない。

「この僕の髪を……くははははっ」

背中を蹴りつけ、再び笑う。
「もう二度と毛が生えてこないように、毛根全て焼き尽くしてやろうか」
「ひぃぃ、もうしません、勘弁してください、せっかく生えてきたのにやめてぇっ」
髪を狙われたという事実がよほどショックだったのか、アーソルドは壊れたように背を蹴りつける。蹴っているのが背中だからそれほど問題はない。
「腹が痛くなるだの、笑いが止まらなくなるだのの、可愛い呪いだったから許していたがなぁ、人の身体を欠損させたらいかんだろ、なぁ」
「アーソルド様、禿げなかったんだからそろそろ……」
「馬鹿か。髪が大切なのは女ばかりじゃないぞ。だいたい、ガキやら女やらならともかく、年上の男に髪を狙われて、笑って見過ごせるほど僕は人間が出来ていない」
腹が痛くなる呪いや、笑いが止まらなくなる呪いでも、普通の人間なら見過ごさないものだ。下手に防げてしまうから、被害は拡大していったようである。
「アルス先生、止めなくていいんですか？」
イゼアは怒れるアーソルドに怯え、アルスに尋ねた。
「ん、でもうちの機材全部ダメにされたし。まさかアーソルドに禿げとけばよかったのにとは言えないだろ。だがアーソルド、これからは避けずに全て呪った本人に返してやれ」
「そうだな。そうしよう。威力を削いだりせず、これからは全部返すか」

女子供かもしれないから、少し手加減して返していたようだ。それでつけ上がり、このような事態になったらしい。

やや過激な報復を見て、次に止めたのはアランだった。

「アーソルド、罰を与えたいなら、そんな野蛮な方法ではなく、首から下を地面に埋めるとか、もう少し平和的な方法を」

「どうやって」

「アンデッドに引きずり込ませると簡単だ」

「……何度も思っている事だが、やはり僕とお前の間には、飛び越えられない溝があるな」

恐ろしい提案でようやく頭が冷めたのか、アーソルドは坊主頭を踏みつけながらアルスへと視線を移した。

「まあいい。アルス、この馬鹿を塔長様の所に突き出してこい」

「ああ。まあ、今日の所はこれで水に流してやるんだぞ」

「分かっている。もう二度と僕の髪を狙ったりしないだろうしな」

アーソルドはもう一度睨み付けて、足をどけた。

「ああ、まったく胆が冷えた」

「髪ぐらいで大袈裟な」

イゼアの言葉に、皆は彼女の短い髪を見た。
「短髪とハゲは違うぞ。それにお前だって、僕の髪は綺麗で好きだと言っていただろう」
「へ？　おばさまの髪と同じですねとは言いましたけど、そんな事は言ってません」
アーソルドの母は、娘がいないのでイゼアを可愛がっていたらしい。けっして好いていない事から、可愛がり方はアーソルドの母らしい物だったに違いないが。
「アーソルド様は頭の形が綺麗だから、坊主頭も似合いますよ、きっと」
「……ふん」
嫌味な褒め言葉に、アーソルドは気恥ずかしそうに目を逸らした。
マナラには関係ない事だから言えるが、アーソルドという男は、端から見ている分には、とても愉快な男だ。

数日後。
マナラは再び付属魔法室に立っていた。
腰に手を当て、再び転がされた坊主頭と、それを踏むアーソルドと、教室を掃除しようとしている生徒達を見比べる。

「アルス、塔長様の名を使っていきなり迎えを寄越した理由がこれか？」
腰に手を当て、荒れた、気色の悪い、黒い何かが生えている部屋を見回した。床に落ちている分は、黒だけではなく、茶や金色も交じっている。
「こわっ、キモっ」
さすがのイゼアも怯えてマナラの背に隠れながら教室を覗き込む。
「ほんと何度もごめんな。いやさぁ、なんか強い呪いだったらしくてさ。呪いって結構呪う本人の意志が関係するだろ」
マナラは転がっている生徒とアーソルドを見比べた。イゼアが一歩踏み出し、床に伸びる長い糸を指さした。
「アーソルド様、何ですかこのキモいの」
「呪いでやたらめったら伸びた髪だ」
見れば分かる。
マナラは先日、一度これらすべてを修理した。元々髪を使う癖のある工房のシリーズで、髪を素材にした導線でないと調子が悪いものだけ髪を使っていたのだが、そういった類の物から、不気味な黒の糸が飛び出ていた。
これはマナラの髪ではなく、用意してもらった専用のコーティング済みの導線である。一本だけが伸びているのならよかったが、強度のために束になっていて、それがとてつもなく伸び

ているのだ。床には自然に落ちていた髪が気色の悪いほど伸びて、床で絡み合っている。
どれだけ伸びているか、測ってみないと分からない。しかし髪がこれほどに伸びているのだから、かなり強い呪いである。
「中の魔石は？」
「俺が確認したのは空だった」
キーオが腕を組んで、達観したように答えた。
これだけ伸びた理由は、普通に使えば半永久的に使える魔石を、消滅させてしまうほど魔力を引き出した結果のようだ。
「一番高いパーツは魔石だぞ」
「わかってるから縛り倒してるんだ。このまま雑巾代わりにしてやろうか」
誰も怒れるアーソルドを止める気すらないらしい。今日は呪術科目の生徒も手伝って、気持ち悪い髪の毛を除去している。魔動機の中で絡みついているのを取り出すのは、マナラがやっても彼らがやっても手間は同じだ。
「でも、今まで髪の毛が伸びる呪いなんて聞いた事ないですけど。かなり需要はありそうな気がしますが」
イゼアは髪の毛を蹴って隅に寄せながら言う。
「それは無理らしい」

アーソルドは坊主頭の頭を踏みながら言う。
「生きた人間では発動しなかったそうだ。で、どういうわけかこうなった。なぜこうなったかは分からんが、なってしまった物はなってしまったのだから仕方がない。まだ魔石が残っているのもあるらしく、切ると伸びるし大変だぞ」
イゼアは残念な呪いの結果に、肩を落とす。髪を伸ばしてもらいたかったようだ。
「馬鹿だなイゼア。肉体を直接どうにかするような魔法は最も難しいんだぞ。もしも成功しているなら、そんな実用的な呪いは有名になっているに決まっている。胡散臭い毛生え薬がどれだけ売れていると思ってるんだ」
落ち込むイゼアに、アーソルドが馬鹿にするように答えた。
「なぜ付属魔法で能力の底上げだけして、筋肉を直接どうにかしないか分かるか？　下手をすると腕が破裂するからだ。この呪いなら、死ぬまで髪が伸びるかもしれない。なくなる分にはまだいいが、無制限に増えるのは本当にシャレにならない。呪いとは掛けた本人も意図しない効力を生む事があると、お前はよく知っているだろう」
イゼアはシャツの胸元を掴んで唇を噛んだ。アーソルドに教えられているのすら嫌なようだ。
しかしその後に、アランが続いた。
「本家の先祖には、髪を生やそうとしてミイラになった奇人がいる。たかが髪のために今生を終えて墓に入ったのは、後にも先にも彼だけだ」

「ああ、アランが教えたんですか」
「そうだ。髪をそんな方法で伸ばそうと思ってはいけない。禁術の分野だ」
呪術そのものが禁術と紙一重の、扱いが難しい魔法だ。有用なこともあるが、危険と隣り合わせでもある。
「知らなかったんだぁ。まさか髪までダメだったなんて」
アーソルドの下で、喚く坊主の生徒。
そんな事も知らない、習い始めたばかりだろう素人が、ここまで出来るのは、才能があるからだ。
「私がいない間に、すっかり愉快になっているな。昔はこんなのはいなかったのに」
「まぁなぁ。今は面白い奴が多いな。俺の時はお前とアルスぐらいしかいなかった」
「私は面白くはなかっただろう」
「そうか？　俺はけっこう面白かったと思うけどな。口説いてきた男を魔動機の動作実験に使うのはお前ぐらいだったからさ」
何が面白いのか、マナラにはさっぱり理解できなかった。
「アルス先生、やっぱり何か擦れ違いとかがあるような気がするんですよ」
「そうなんだよな。他人にはそう見えるんだ。他人には」
自分の事は自覚せず勝手な想像を膨らませるイゼアに、アルスが適切な言葉を返した。

キーオはそんなイゼアを見た後、にっこりと微笑んでマナラの肩を叩いた。
「俺的には、最近こいつみたいな行いをする生徒が増えたのは、実はお前のせいじゃないかと思うんだ」
マナラは否定しようとして口を閉ざした。
口説いてきたと言っても、連中はマナラに惚れたのではない。マナラとキーオの婚約が破談になるのは目に見えていたから、マナラの実家とのつながりが欲しい実力はあるが地位のない学生に口説かれていたのだ。それほど自信があるなら、攻撃を避けてみろと言って、実験台にしていたのは事実だ。
一方的にやった事はないが、人間とは一人が始めると、それを見て段々と遠慮なくやるようになる。
もしもあれを見ていた学生がいたら、真似をし始めたと言われても、マナラには否定出来なかった。
「責任を感じて、頑張ってくれよ。な？　魔石は用意したんだ。魔石の原石は」
原石、つまり加工が必要だ。魔石の加工は魔工で習う。しかし、神経と魔力を削り取られる大変な作業だ。しかも記憶の中にある魔石は、少し独特の形をしていた。それに近い形にカットしなければ、はめ込めないはずだ。
「数は？」

「十二」

数日かかる数だ。イゼアは魔力が大きすぎて、細かな加工は不得意そうだから、マナラがやらねばならない。

「イゼア、こっちは頼むわ。一度やったから分かるだろ。私は数日かかると思うから、ゆっくりでいい」

「はーい」

マナラはため息をついて、アーソルドから向けられる、面倒臭いとは少し言いづらい視線を感じつつ、逃げるように教室を出た。

後は若い二人に任せよう。

# あとがき

ある日の事です。その日は私の誕生日。
普通に出社し、普通に仕事をして、普通に帰るちょっと寂しい普通の日でした。
何か面白いサプライズはないのかと、いい大人がふてくされていました。
帰ってきてケーキを食べながらメールチェックをしたら、こんなメールが来ていました。
『この度は弊社発行の少女向け文庫レーベル「一迅社文庫アイリス」にてご執筆をお願いしたくメールさせていただきました』
本当にありました。びっくりですね。
ということで、これも運命と、ほとんど何も考えずにお引き受け致しました。
たかが365分の1、されど365分の1です。

というわけで、はじめまして、またはこんにちは。かいとーこです。
魔道都（まどうと）の修理屋をお手にとって頂き、まことに有り難うございます。
この魔道都の修理屋は、元々ブログに掲載していた小説です。別作品のスピンオフ

として書いたもので、その設定を流用しているため、無駄な設定などが見え隠れします。こんな設定の塊のような話で本当にいいのか、もっと設定を削ってシンプルにすべきか、せめてあのシーンにあの俺様を配置した方がいいのか。そう悩んで一応お伺いを立てたのですが、

「大丈夫です」

と、おっしゃるので、基本的な流れはそのままです。不憫な男です。

私が美男子を書くと、かなりの確率でヘタレ、不憫、変態、変人属性を背負わされます。修理屋には変態が出ていないものでセーフだと思いますが、一体なぜこんなイロモノ変態キャラ好きの私にお声を掛けられたのか、今でも不思議です。

脳内の予定ではこれであとがきが終わるはずだったのですが、予想に反してあとがきが5ページもあったという。

初あとがきが5ページ。なんて高いハードル。

というわけで、他に思いつかないので自分語りを続けようと思います。

最初の依頼では書き下ろしであったため、ギリギリな感じのキャラを紛れ込ませたい誘惑に耐えながら、たまには少女小説らしく恋愛物も頑張ってみようかなと、甘々

にしてみようかなと、色々考えていました。
デビュー作は男装物なので、見た目だけはお人形みたいな可愛い女の子を書こうと、段々色々と構想を練っていました。しかしある日の事。
「次の会議で魔道都の修理屋も提出していいですか？」
電話でこのような事を聞かれ、数日で決定しました。
魔道都の修理屋といえば、昔ブログで書いた小説です。
急な事で驚きながら、ヤバイキャラは出ていないけど、とても地味だった気がしたので確認してみると、やはり地味でした。
主にヒロイン達の服装が。
少女小説になろうというのに、衣装が作業着とか。しかも修理屋です。華やかさとは対極にいるような職人達です。
しかもイゼアは男装少女です。男装物を書いたからふりふりにしようと思ったのに、男装物に戻ってくるとは、世の中何があるか分かりません。
男装の麗人という言葉は大好きですが、あくまでも偶然です。けっして男装少女マニアではありません。
イラストが鳴海ゆき様に決まり、こんな繊細な絵を書かれる方に、作業着を描かせ

ていいのかと再び自問自答しました。
華やかな男装なら映えるのですが、なにせ作業着。
可愛くした方がいいのかと悩んでいたところ、見せて頂いたラフには、細かく設定の書かれた作業着図が！
私にはセンスが無いため作業着の一言ですませていたのに、まさかこんな気合いの入った絵を描いてくださるとは、まさに予想外でした。表紙が何とも可愛らしい。
そしてピンナップのマナラが可愛くて胸キュンです。眼鏡と三つ編みが素晴らしいです。歯車がお花のようでとても綺麗でまあ可愛らしい。
どうしようもなく地味なキャラを華やかにしてしまう。
これがプロのイラストの力！

……まだページがあるので自分語りは続きます。
ちなみに書き下ろしの番外編を書くよりも、このあとがきの方が時間がかかっています。不思議です。
プロフィール画像は我が家のチワワ、プリンちゃんです。名前の由来は毛の色です。男の子だったらカスタードだったそうです。

まだまだページがあるので宣伝など。
アルファポリスさんのレジーナブックスから、詐騎士2巻が9月末に発売です。
この本が出てすぐですね。
飄々とした腹黒傀儡術師が、寄付金のために男装して、騎士団に潜り込みます。
女装したり、王子様に構われたりと、基本は王道、お約束をてんこ盛りにしているのに、ヒロインのキャラのせいか、予想と違ったと言われる事が多くて説明に困りますが、詐騎士って感じの内容です。
発売日が近いので、帯で交換広告までしていただいています。興味のある方は、ぜひお手にとってご覧下さい。
単行本なので、売り場はライトノベルとは異なります。

またネットでも小説を書いています。興味があればご覧下さい。
白夜城　http://byaku.skr.jp/

ダラダラと書きましたが、何とかページを埋める事が出来ました。
ここまで読んでくださった皆様、有り難うございます。
また皆様のお目にかかれれば幸いです。

一迅社文庫アイリス

# 魔道都の修理屋（まどうとしゅうりや）

あなたのモノにはなりません！

2011年10月1日　初版発行

著　者■かいとーこ

発行者■杉野庸介

発行所■株式会社一迅社
〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
電話03-5312-7432（編集）
電話03-5312-6150（営業）

印刷所・製本■大日本印刷株式会社

ＤＴＰ■株式会社三協美術

装　幀■今村奈緒美

落丁・乱丁本は株式会社一迅社販売課までお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
本書のコピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者などの第三者に依頼してスキャンやデジタル化をすることは、個人や家庭内の利用に限るものであっても著作権法上認められておりません。

ISBN978-4-7580-4263-5
©かいとーこ／一迅社2011　Printed in JAPAN

●この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには関係ありません。

この本を読んでのご意見
ご感想などをお寄せください。

おたよりの宛て先

〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
株式会社一迅社　ノベル編集部
かいとーこ 先生・鳴海（なるみ）ゆき 先生

私だけの騎士選びます!!

# 『海上のミスティア』




著者・梨沙
イラスト：凪かすみ

友人の策略で海上の訓練校・ルティアナ号に乗船したエダ。船医の勉強をしたい彼女は、学費免除の条件につられて“不敗の女神・ミスティア”に立候補する。だけどミスティアは恋愛禁止。更に自分を守ってくれる騎士を5人選ばなくてはいけなくて!? 幼馴染の特待生、剣術の使い手、海兵を夢見る海賊の息子、寡黙な秀才、ミステリアスな先輩…。次々と現れる個性的な少年達にエダは――？ 海を駆け歴史を変える乙女の物語が始まる!!

男だらけの音楽学院を舞台にした、男装乙女の学院ライフ★




# 『聖鐘の乙女 光の王子（プリンス）と炎の騎士（ナイト）』

著者・本宮ことは
イラスト：明咲トウル

ロウエン王国の都にある聖楽学院に、天使の声を持つ少年・サディが入学する。しかし、彼には大きな秘密があった。…実は入学したのは、サディの姉・アティーシャだったのだ！　音楽家だった亡き父の楽譜を探し出すため、女子禁制の音楽学院に潜り込んだのだが…。周りはすべて男、しかも寄宿舎！　男として暮らすことになったアティーシャを助けてくれたのは、誰もが憧れる王子様で――!?　乙女の運命の楽章が、いまはじまる‼

泳げない人魚姫ローザの恋の行方は…？




# 『恋する人魚姫と8つの受難』

著者・尾久山ゆうか
イラスト：榊空也

人魚の血をひく侯爵家令嬢ローザは、運命の王子様を探す船旅の途中、海で遭難しかけ海軍の戦艦に救助される。その船の艦長アシュレイこそ、彼女の探す王子様だった。ところが戦艦が爆破され、ローザにスパイ疑惑が…。叶わない恋だと諦めようとするけれど、彼に惹かれる心が止められないローザ。そんな中、突如現れた海賊ユリウスにローザは拉致されてしまい…!?　帝国の王子様 vs. 大胆不敵な海賊王。泳げない人魚姫の恋の行方は――？

今日から王宮生活‼　同居人は皇子様五人⁉

# 『はなひらく―淵国五皇子伝―』




西の都の王立大学で植物について学ぶカナン。ある日、異国の青年・善が持っていた奇跡の実に触れたカナンは、謎のツタにとりつかれてしまう。ツタごと東方の帝国につれてこられた彼女を待っていたのは、呪われた体を持つ五人の皇子様。奇跡の実の力で呪いが解けるまで、カナンは個性的な皇子様たち＆ツタと王宮で暮らすことになってしまい…⁉　植物育成能力を持つ少女と五人の皇子たちが繰り広げる、中華風王宮恋愛ファンタジー！

**著者・古戸マチコ**
イラスト：鳴海ゆき

# 第4回 一迅社文庫大賞

## アイリス部門作品募集のお知らせ

**一迅社文庫アイリスでは、10代中心の少女に向けた
エンターテインメント作品を募集しています。
ファンタジー、時代風小説、ミステリー、SF、百合など、
皆様からの新しい感性と意欲に溢れた作品をお待ちしています！**

### 応募要項

大賞賞金 50万円

**■応募規定**
年齢・性別・プロアマ不問。作品は、未発表のものに限ります。

**■応募規定**
- A4用紙タテ組の42字×34行の書式で、70枚以上115枚以内
（400字詰原稿用紙換算で、250枚以上400枚以内）。
- 応募の際には原稿用紙のほか、必ず①作品タイトル②作品ジャンル（ファンタジー、百合など）③作品テーマ④郵便番号・住所⑤氏名⑥ペンネーム⑦電話番号⑧年齢⑨職業（学年）⑩作歴（投稿歴・受賞歴）⑪あらすじ（800文字程度）を明記した別紙を同封してください。

**■権利他**
優秀作品は一迅社より刊行します。
その作品の出版権・上映権・上演権・映像権などの諸権利はすべて一迅社に帰属し、出版に際しては当社規定の印税、または原稿使用料をお支払いします。

**■締め切り**
一迅社文庫大賞第4回締め切り
**2012年9月30日（当日消印有効）**

**■原稿送付宛先**
〒160-0022　東京都新宿区新宿2-5-10　成信ビル8F
株式会社 一迅社　ノベル編集部『一迅社文庫大賞　アイリス部門』係

※応募原稿は返却いたしません。必要な方は、コピーを取ってからご応募ください。
※他社との二重応募は不可とします。
※選考に関するお問い合わせ・質問には一切応じかねます。
※受賞作品については、小社発行物・媒体にて発表いたします。
※応募の際にいただいた名前や住所などの個人情報は、この募集に関する用途以外では使用いたしません。

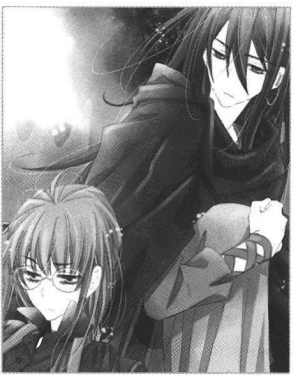
**本大賞について、詳細などは随時小社サイトや文庫新刊にて告知していきます。**

9784758042635

ISBN978-4-7580-4263-5
C0193 ¥590E

1920193005905

定価：本体590円＋税
発行　一迅社
一迅社文庫アイリス



太陽神に呪われ、魔力を失い没落した一族に生まれた少女イゼア。彼女は自分に執着している、魔道貴族で幼馴染みのアーソルドに売られそうになっていた。

彼から逃げ出したイゼアは、街外れに住む魔動機修理師に弟子入りすることに。好きな魔動機とちょっと変わっているが尊敬できる師匠に喜ぶイゼア。だが、弟子生活を楽しんでいた彼女の前に、アーソルドと身勝手な太陽神が現れて―!?

魔道都の修理屋　あなたのモノにはなりません!